

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(39)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書

# 泉川遺跡

1986年3月

鹿児島県教育委員会

## 序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が、新奄美空港建設に先立って、昭和60年度に実施した泉川遺跡の発掘調査の記録です。

泉川遺跡は、南西諸島に多くみられる砂丘遺跡の一つで、古墳時代から奈良・平安時代に相当する時期の遺物が多数発見されました。中でも、靱痕のある土器片は、奄美地方では初見のものであり、百種以上にのぼる多量の貝殻及び各種貝製品などとともに、この地域の古代文化解明の貴重な手掛かりとなるものと考えます。

本書が、南西諸島の歴史研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に終始御協力くださった県土木部空港対策室、大島支庁港湾課、笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和61年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 山田克穂

## 例 言

1. この報告書は、新奄美空港建設によって消滅する遺跡について行なった泉川遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部空港対策室からの委託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査については、笠利町教育委員会や大島支庁港湾課の協力を得た。
4. 発掘調査や発掘調査報告書については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳（考古学）、京都産業大学助教授山田治（放射性炭素年代測定）、鹿児島大学助教授西中川駿（動物・魚骨同定）、宮之城中学校教諭行田義三（貝類同定）の諸先生方に御指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。また、行田義三、西中川駿の両先生より玉稿をいただいた。
5. 遺物の実測、トレース、写真撮影、編集などについては、立神が中心になり行い、遺物の整理・復元作業等は収蔵庫の整理作業員が行なった。
6. この報告書は、上記の方々の助言と協力を得て鹿児島県教育委員会が実施し、執筆は立神が担当した。
7. 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高で、挿図中の遺物番号は、図版中の番号と一致する。

## 目 次

第1章	遺跡の位置及び環境	4
第2章	調査の経過	6
第1節	調査に至るまでの経過	6
第2節	調査の組織	6
第3節	調査の経過	7
第3章	調査の概要	10
第1節	調査の概要	10
第4章	遺 構	14
第1節	土 壙	14
第5章	人工遺物	15
第1節	土 器	15
1.	甕形土器	15
2.	壺形土器	26
3.	その他の土器	29
第2節	石 器	33
第3節	貝 製 品	35
1.	貝小玉	35
2.	円孔貝製品	35
3.	有孔貝	35
4.	貝製利器	35
5.	貝匙（ヤコウガイ製）	44
6.	貝製容器（貝匙）	47
第6章	まとめ	55
付 篇	泉川遺跡出土貝類について	74
	泉川遺跡出土の自然遺物	99

## 挿 図 目 次

第1図	泉川遺跡と周辺遺跡	5
第2図	泉川遺跡の周辺地形図	11
第3図	泉川遺跡グリッド配置図	13
第4図	泉川遺跡土壌実測図	14
第5図	泉川遺跡土器実測図 (1) 甕形土器 I	16
第6図	泉川遺跡土器実測図 (2) 甕形土器 II	18
第7図	泉川遺跡土器実測図 (3) 甕形土器 III	20
第8図	泉川遺跡土器実測図 (4) 甕形土器 IV	22
第9図	泉川遺跡土器実測図 (5) 甕形土器 V	25
第10図	泉川遺跡土器実測図 (6) 壺形土器 I	27
第11図	泉川遺跡土器実測図 (7) 壺形土器 II・その他の土器	28
第12図	泉川遺跡土器実測図 (8) その他の土器	30
第13図	泉川遺跡石器実測図 (1) 叩石	33
第14図	泉川遺跡石器実測図 (2) 石皿	34
第15図	泉川遺跡貝製品実測図 (1) 貝小玉・円孔貝製品・有孔貝	36
第16図	泉川遺跡貝製品実測図 (2) 貝製利器 I	38
第17図	泉川遺跡貝製品実測図 (3) 貝製利器 II	39
第18図	泉川遺跡貝製品実測図 (4) 貝製利器 III	40
第19図	泉川遺跡貝製品実測図 (5) 貝製利器 VI	41
第20図	泉川遺跡貝製品実測図 (6) 貝製利器 V	42
第21図	泉川遺跡貝製品実測図 (7) 貝製利器 VI	43
第22図	泉川遺跡貝製品実測図 (8) 貝製利器 VII	45
第23図	泉川遺跡貝製品実測図 (9) 貝製利器 VIII・貝匙・貝製容器 I	46
第24図	泉川遺跡貝製品実測図 (10) 貝製容器 II	48
第25図	泉川遺跡貝製品実測図 (11) 貝製容器 III	49
第26図	泉川遺跡貝製品実測図 (12) 貝製容器 IV	50
第27図	泉川遺跡貝製品実測図 (13) 貝製容器 V	51
第28図	泉川遺跡貝製品実測図 (14) 貝製容器 VI	52
第29図	泉川遺跡貝製品実測図 (15) 貝製容器 VII	53
第30図	泉川遺跡貝製品実測図 (16) 貝製容器 VIII	54

## 表 目 次

第1図	泉川遺跡Ⅰ・Ⅱ類甕形土器一覧表	15
第2図	泉川遺跡Ⅲ・Ⅳ類甕形土器一覧表	17
第3図	泉川遺跡Ⅴ・Ⅵ類甕形土器一覧表	21
第4図	泉川遺跡その他の甕形土器一覧表	23
第5図	泉川遺跡甕形土器底部一覧表	24
第6図	泉川遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類壺形土器一覧表	29
第7図	泉川遺跡その他の壺形土器一覧表	29
第8図	泉川遺跡その他の土器一覧表	32
第9図	泉川遺跡螺蓋製貝斧一覧表	37
第10図	泉川遺跡その他の利器一覧表	44
第11図	泉川遺跡貝製容器一覧表	47

## 図 版 目 次

図版1	泉川遺跡発掘調査(Ⅰ)	57
図版2	泉川遺跡発掘調査(Ⅱ)	58
図版3	泉川遺跡発掘調査(Ⅲ)	59
図版4	泉川遺跡発掘調査(Ⅳ)	60
図版5	泉川遺跡発掘調査(Ⅴ)	61
図版6	泉川遺跡発掘調査(Ⅵ)	62
図版7	泉川遺跡発掘調査(Ⅶ)	63
図版8	泉川遺跡出土土器(Ⅰ)	64
図版9	泉川遺跡出土土器(Ⅱ)	65
図版10	泉川遺跡出土土器(Ⅲ)	66
図版11	泉川遺跡出土土器(Ⅳ)	67
図版12	泉川遺跡出土石器(Ⅰ)	68
図版13	泉川遺跡出土貝製品(Ⅰ)	69
図版14	泉川遺跡出土貝製品(Ⅱ)	70
図版15	泉川遺跡出土貝製品(Ⅲ)	71
図版16	泉川遺跡出土貝製品(Ⅳ)	72
図版17	泉川遺跡出土貝製品(Ⅴ)	73

## 第 1 章 遺跡の位置及び環境

泉川遺跡は、大島郡笠利町万屋2252番地に位置している。奄美大島は、鹿児島から南の海上約400kmのところであり、南西諸島のほぼ中央に位置する奄美諸島に属している。

奄美大島は、奄美諸島の中でも最も大きい島で、一般に地勢は急俊である。この島の北部は比較的平地を多くもち、南部は湯湾岳(694m)を中心に400～500m級の山地が連なり、リアス式海岸を形成している。これらの地勢の中に亜熱帯植物の繁茂は、独特の景観で奄美の景勝地を造り出している。

本遺跡の所在している笠利町は、最北端部に位置し、細長い笠利半島にある。この半島の中央部には、高岳(183.6m)、大刈山(180.7m)、淀山(175m)などで形成する笠利山脈が南北に走り、東西の海岸地帯とに分別する地勢である。東海岸地帯は、西海岸地帯に比べ、緩やかな丘陵状の台地で、よく砂丘などが発達し、そのほとんどの遺跡地が集中している。

この東海岸には、北側の用遺跡をはじめ、コロビ遺跡、あやまる第2貝塚、宇宿貝塚、宇宿高又遺跡、下山田遺跡、ケジ遺跡、長浜金久遺跡などがよく知られ、海岸砂丘に立地している。しかし、南端のヤーヤ洞穴遺跡のみが隆起珊瑚礁の崖下にできた洞穴の中にある。

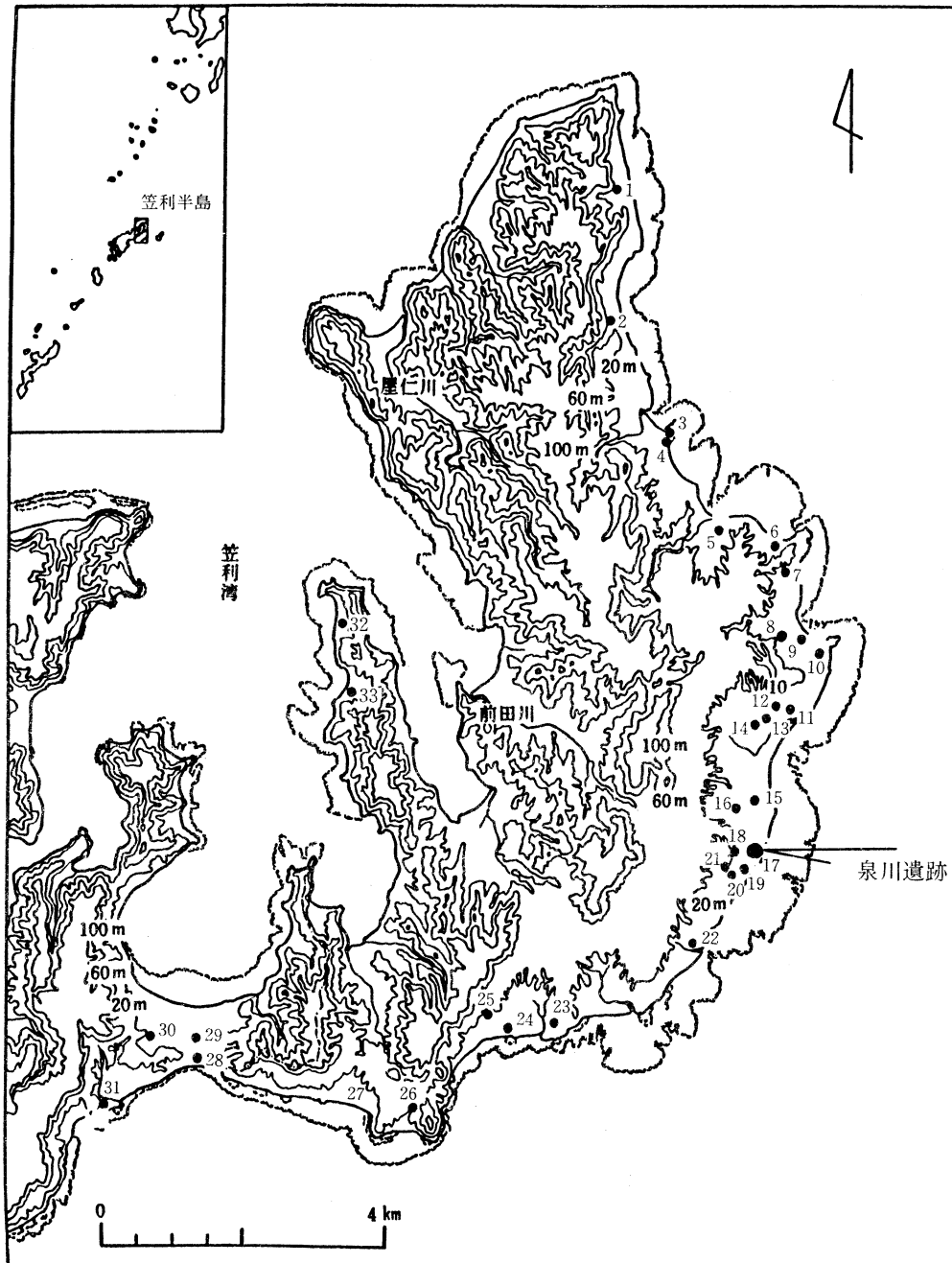
ヤーヤ洞穴より出土したヤブチ式土器は、最も古い時期の遺物とされ、宇宿高又遺跡から出土した轟式土器や曾畑式土器、ケジⅠ遺跡やケジⅢ遺跡出土の曾畑系土器は、ヤーヤ洞穴遺跡につぐ遺跡と考えられ、宇宿貝塚からは、縄文時代後期の市来式土器と宇宿下層式土器が共伴して出土し、宇宿高又遺跡以後に位置づけられている。このように、比較的古い時期の遺跡は洪積台地縁辺部付近にあり、新期砂丘に形成されている遺跡などからは、宇宿上層式土器から兼久式土器などの遺物が認められ、海浜の提防状の砂丘地においては、兼久式土器タイプに限られるとの報告がなされ、本遺跡はこの環境に位置している。

一方、西海岸においては、サウチ遺跡が知られ、唯一の遺跡であり、奄美諸島及び沖縄諸島で最初の弥生時代の遺跡として知られている。

本遺跡は、前述の東海岸でも砂丘のよく発達した海浜砂丘上に位置し、長浜金久第1遺跡と同じ環境のところの所在しているが、その大部分については、砂採集事業の影響を大きく受けている。

### (参考文献)

- |    |           |                    |                |        |
|----|-----------|--------------------|----------------|--------|
| 注1 | 笠利町教育委員会  | 「ケジ遺跡・コロビ遺跡・辺留窪遺跡」 | 笠利町文化財報告No.6   | 1983.3 |
| 注2 | 笠利町教育委員会  | 「あやまる第二貝塚」         | 笠利町文化財報告No.7   | 1984.3 |
| 注3 | 笠利町教育委員会  | 「サウチ遺跡」            | 笠利町文化財報告No.1   | 1978.3 |
| 注4 | 鹿児島県教育委員会 | 「長浜金久遺跡」           | 鹿児島県埋蔵文化財報告書32 | 1985.3 |
| 注5 | 鹿児島県教育委員会 | 「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」          | 鹿児島県埋蔵文化財報告書38 | 1986.3 |



第1図 泉川遺跡と周辺遺跡

- 1. 用長浜遺跡 2. 用遺跡 3. 辺留城遺跡 4. 辺留窪遺跡 5. コロビ遺跡 6. あやまる第二貝塚
- 7. あやまる第1貝塚 8. マツノト遺跡 9. 喜子川遺跡 10. 土盛遺跡 11. 宇宿港遺跡 12. 宇宿貝塚
- 13. 宇宿高又遺跡 14. 宇宿小学校遺跡 15. 万屋遺跡 16. 下山田遺跡 17. 泉川遺跡 18. ケジ遺跡 (ケジⅠ・Ⅱ・Ⅲ遺跡を含む)
- 19. 長浜金久第1遺跡 20. 長浜金久第Ⅱ遺跡 21. 長浜金久第Ⅲ遺跡
- 22. ナロビ川遺跡 23. 立神遺跡 24. 土浜遺跡 25. イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴 26. 明神崎遺跡 27. 用安遺跡
- 28. 赤尾木遺跡 29. ウフタ遺跡 30. 赤尾木保育所遺跡 31. 手広遺跡 32. サウチ遺跡 33. 鯨浜遺跡



## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は、大島郡笠利町万屋から和野地区にかけての海岸部に新奄美空港の建設を計画し、昭和57年から空港建設を実施している。この新空港は、昭和63年度の完成を目ざし、東部海岸部の埋め立てと県道竜郷—新奄美空港線の改良工事とが併行して施行されている。

この建設用地内には、周知の遺跡の所在が確認されており、昭和57年度の長浜金久遺跡の確認調査を皮切りに、諸発掘調査が実施され、記録保存や一部の遺跡においては、空港の緑地帯の中に現状保存が認められ、開発と文化財との調和が計られるなどの手だてが講じられている。

本年度も空港建設事業に伴い、県土木部空港対策室からその遺跡の取り扱いについて、県教育委員会文化課に協議があった。協議の結果、新空港建事業の推進と文化財保護のために、本遺跡については、発掘調査を実施し、記録による保存を図ることとなり、今回の調査が実施された。

### 第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	山田 克穂
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課	課長	桑原 一廣
	〃	課長補佐	坂口 肇
	〃	主 幹	中村 文夫
調査企画	〃	主任文化財研究員	向山 勝貞
調査担当者	〃	主 査	立神 次郎
	〃	主 事	長野 真一
事務担当者	〃	主幹兼管理係長	寺園 晃
	〃	主 査	濱松 巖
	〃	主 事	川畑由紀子

尚、発掘調査の指導については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏の御指導・御教示を得た。

その他、県土木部空港対策室、大島支庁港湾課、大島教育事務局、笠利町役場、笠利町教育委員会、笠利町立歴史民俗資料館、沖縄県教育庁文化課、沖縄県立博物館、山下建設（山下義和氏代表）の方々の協力を得た。深謝の意を表したい。

### 第3節 調査の経過

本遺跡は、砂採集事業のため砂丘の大半が削平され大部分を消失し、先端部周縁を残しているのみである。今回調査を実施した周縁部付近では、新空港建設事業により地勢の変化がみられる状況である。

現地での調査は、昭和60年9月2日より昭和61年11月2日まで実施し、整理作業については、昭和60年12月17日より昭和61年2月28日まで実施した。これらの経過については、日誌抄により以下略述する。

- 9月2日（月）各関係機関との事務連絡及び打ち合せ。調査事務所へ発掘機材運搬作業。
- 9月3日（火）本日より作業員使用。作業員に対して調査の主旨及び作業上留意すべき事項について注意と説明（特に、ハブ対策について）。伐採作業。
- 9月4日（水）立草木伐採作業。支庁港湾課担当者（以下、担当者と記す）と現地協議。
- 9月5日（木）立草木伐採作業。立草木の搬出作業。清掃作業後表土層掘り下げ作業。
- 9月6日（金）立草木伐採作業。表土層及び一部遺物包含層確認のため掘り下げ作業。地表面下約3mの位置で貝類の出土を認め、量は少量で枝サンゴ等を含む。
- 9月7日（土）表土層除去作業。立木等の除去（蘇鉄は仮移植を後日実施する予定）。ハブミが出現し、その対策を実施する。担当者と現地協議。
- 9月8日（日）資料収集作業。
- 9月9日（月）表土層の除去作業（地表面下約3m付近まで）。
- 9月10日（火）表土層の除去作業。排土終了地区について2×20mのトレンチによる確認調査実施。貝類とともに少量であるが土器破片（兼久式土器）の出土。枝サンゴ類も貝類とともに認める。
- 9月11日（水）表土層の除去及び排土作業。遺物が出土したためトレンチを拡張し、掘り下げ作業を実施する。
- 9月12日（木）表土層の除去及び排土作業。Iトレンチ調査の継続作業。貝類と枝サンゴ類も多く、土器もローリングを受けたものが多い。砂のかたまり（以下クールと呼ぶ）も随所に認める。
- 9月13日（金）表土層の除去及び排土作業本日で終了。Iトレンチ調査の継続作業。土器小破片の出土。貝類の出土を認めるものの製品の出土はない。担当者と現地協議。
- 9月14日（土）仮グリッド設定作業（10×10m）。E-2区・C-2区の掘り下げ作業。G-1～4区以東について確認調査を実施する。
- 9月17日（火）E-2区、C-1・2区、E-1～3区掘り下げ作業。E-2区少量の貝類の出土。C-1・2区より少量の土器・貝類の出土。担当者と現地協議。
- 9月18日（水）E-2区、C-2・3区、E-1～3区掘り下げ作業。E-2区の下部で湧水の確認をする。E-1～3区の下層についての確認調査を実施する（遺物は皆無である）。

- 9月19日(木) C-2・3, F-1~3区掘り下げ作業。C-3区北側に貝類がまとまって出土し、兼久式土器破片が少量出土する。F-2区より二枚貝を中心に出土するがサンゴ類も多い。F-3区はクール層をかなり認める。
- 9月24日(火) D-2~4区掘り下げ作業。D-4区で土器小破片の出土(ローリングを受けている)。D-2区サンゴの残骸を認める。担当者と現地協議。
- 9月25日(水) G-1~3区, F-2区, H-1~5区掘り下げ作業。F-2区貝類の出土を認めるがサンゴ類も多くみられる。
- 9月26日(木) G-1~3区, H-1~5区, I-5・6区掘り下げ作業。縁辺部で軽石類を認め、出土遺物は貝類が少量である。サンゴ類も多く、二枚貝やマガキガイを認める。
- 9月27日(金) H-1~5区, I-5~7区, G-6・7区掘り下げ作業。遺物出土皆無のため部分的に下層の調査、一部地区に湧水を認める。担当者と現地協議。
- 9月28日(土) C-1~3区, D-1~3区, E-1~4区, F-1~4区の遺物取り上げ作業。E-3・4区掘り下げ作業。貝類を少量認める。
- 9月30日(月) E-3・4区, C-1~3区掘り下げ作業。E-3・4区貝類の出土を認める。E-3区より兼久式胴部が出土(ローリングを受けている)。
- 10月1日(火) D-1・2区, C-1~3区, E-1区掘り下げ作業。E-1区貝類のほか兼久式土器破片が出土。サンゴ類も多い。
- 10月2日(水) E-1区, C-1~3区掘り下げ作業。貝類の出土を認めるが、土器は皆無である。支庁次長、港湾課長来訪。
- 10月3日(木) E-1区, C-1~3区, D-4区掘り下げ作業。貝類のみの出土で、製品は認めない。サンゴ類も多い。
- 10月4日(金) D-1・4区掘り下げ作業。クールが多くクール中にも貝類を認める。台風接近情報のため事務所や遺跡内の管理作業実施。
- 10月7日(月) テント設定作業、器材搬入作業。D-1区, E-3区掘り下げ作業。貝類の出土を認める。
- 10月8日(火) E-2区, B-1~2区掘り下げ作業。B-1区貝類及び兼久式土器破片の出土。向山主任現地指導。
- 10月9日(水) B-1~4区, C-4区掘り下げ作業。排土作業。向山主任現地指導。
- 10月10日(木) D-2・3区掘り下げ作業。D-3区より兼久式土器(壺)の口縁部から胴部までの破片出土。
- 10月11日(金) D-2・3区, A-3・4区掘り下げ作業。少量の貝類と土器小破片出土。土器はローリングを受けている。
- 10月14日(月) D-2・3区, A-3・4区掘り下げ作業。D-2・3区貝類がまとまって出土。兼久式土器破片出土。A-3・4区大型貝類がクール中より出土。

- 10月15日（火） B-1～3区, A-3・4区掘り下げ作業。全体的にクール中より貝類や土器破片が出土する。河口貞徳氏現地指導（16日まで）。
- 10月16日（水） B-2～4区, A-3・4区掘り下げ作業。B区より兼久式土器や貝類がまとまって出土するが、枝サンゴ類も認める。貝小玉出土。
- 10月17日（木） C-2区・D-2区の掘り下げ作業。貝類が集中して出土。土器破片（兼久式土器）も認めるがローリングを受けている。遺物出土状況平板実測。
- 10月18日（金） C-2区・D-2区掘り下げ作業。貝類や土器も多く出土（小破片が多い）。平板実測。遺物取り上げ作業。
- 10月19日（土） C-2・3区, B-1・2区掘り下げ作業。貝類の出土も多く、特にシャコガイ・ヤコウガイ・マガキガイが多く、土器破片（口縁部・底部）を認める。
- 10月21日（月） B-2～4区, C-1～4区掘り下げ作業。以前として貝類が集中して出土し、土器破片も認める（須恵器・土師器なども含む）。C-4区石皿の出土。
- 10月22日（火） 昨日からの継続作業。B-4区骨の出土。B-3・4区土器がまとまって出土する。湧水量が多くなる。サンゴ類も多く当時の海浜が想定される。
- 10月23日（水） 昨日からの継続作業。湧水は以前として多くなる。出土遺物平板実測作業。写真撮影、遺物取り上げ作業。貝殻の集中度の在り方を検討する。
- 10月24日（金） B-2～4区・C-1～4区・D-1～4区掘り下げ作業。サンゴ類が多く、須恵器、土師器、兼久式土器とともに混在して出土する。湧水の量は一段と多くなる。遺物平板実測作業。写真撮影。遺物取り上げ作業。
- 10月25日（土） C-2～4区掘り下げ作業。特に、C-2区に貝殻の集中を認める。D-2～4区も出土量が多い。一部E区へのひろがりを確認する。
- 10月28日（月） C-2～4区, D-2～4区, E-2～4区掘り下げ作業。D-2区において当時の海岸の岩礁を認める。E区にはサンゴ類が多く、一部サンゴ礁を確認する。遺物平板実測・写真撮影・遺物取り上げ作業。
- 10月29日（火） A-3・4区・B-1～4区, C-1～4区掘り下げ作業。A・B区出土はなくなる。D区側に貝類や土器類を認める。湧水が多く作業に困難を期たす。
- 10月30日（水） D-2・3区に集中的に貝類が出土し、E区側はほとんど認めなくなる。遺物平板実測・取り上げ作業。湧水のためプール化する。サンゴ類を多く認め、当時の海岸の岩礁を確認する。出土品整理作業。発掘器材の整理作業。遺物の梱包作業。テント除去作業。一部埋めもどし作業。
- 11月1日（金）・11月2日（土） 事務所整理作業。器材搬出作業。関係機関への事務連絡及び打ち合せ。遺物発送準備作業を実施する。現地調査は11月2日で終了する。
- 尚、整理作業は、文化課収蔵庫で、12月17日から水洗い、注記、復元、実測、トレース、図版、レイアウト、原稿作成などの作業を実施し、2月28日にすべての作業を終了した。

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の概要

笠利町内に所在する遺跡の立地は、一部の遺跡を除き、東海岸の砂丘上に立地し、一定の傾向があることが報告されている。洪積台地上の赤土には、遺跡の立地は認められず、洪積台地の縁辺部付近の古期砂丘上から現海岸線を作り出している新期砂丘上に、それぞれ南島特有の小遺跡を多く形成し、奄美諸島の他地区に比べ遺跡が集中して発見されている。

これらの遺跡地は、砂丘上に立地しているために、砂採集事業により大なり小なりの影響を受け、東海岸海においては、遺跡の発見をはじめ遺跡の調査例も多く知られている。

泉川遺跡は、新期砂丘上に形成された遺跡のひとつで、長浜金久第1遺跡と同じ環境にあり、砂採集事業により中心部は消失し、現在ではわずかに縁辺部に残存しているのみである。

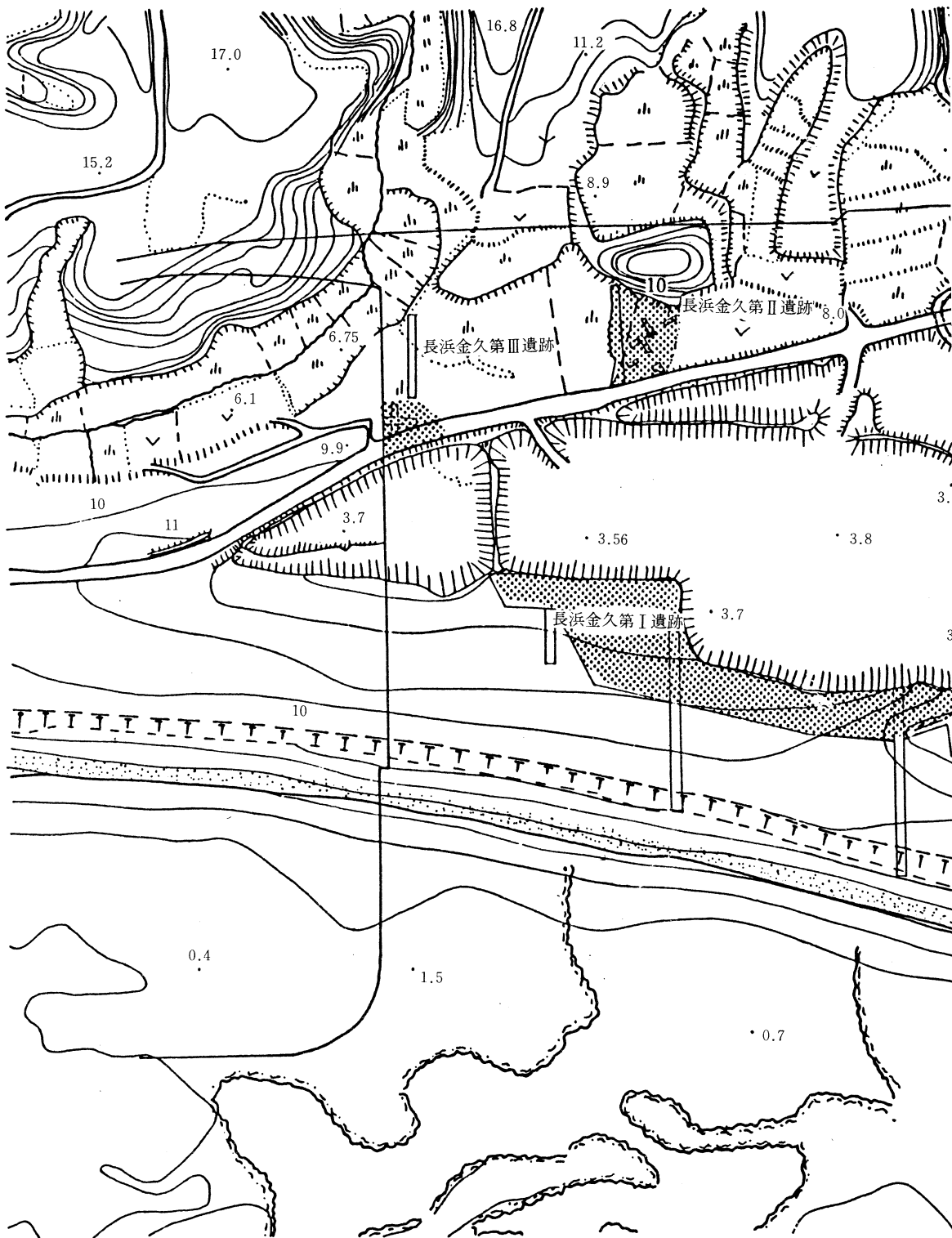
本遺跡の周辺地形は、砂採集事業や新奄美空港建設事業により大きく変貌し、周辺地形から推定するとどまる状況である。本遺跡は過去の例からみれば、長浜金久第1遺跡の延長上にあり、本遺跡とは泉川により分断された地形で、本年度調査を実施したケジ遺跡の南側150mの所に幅70mの谷があり、その谷間を泉川が東流し、泉川は県道東側の低地を蛇行しながら海岸砂に当たって北方向に流れを変える付近が本遺跡と報告されているが、現況は埋め立て造成中で、泉川も本遺跡南沿いに一時的に河川変更がなされている。

調査方法は、10m×10mのグリッドで、東西方向に西からA・B・C・D……………、南北へ1・2・3・4……………として設定した。

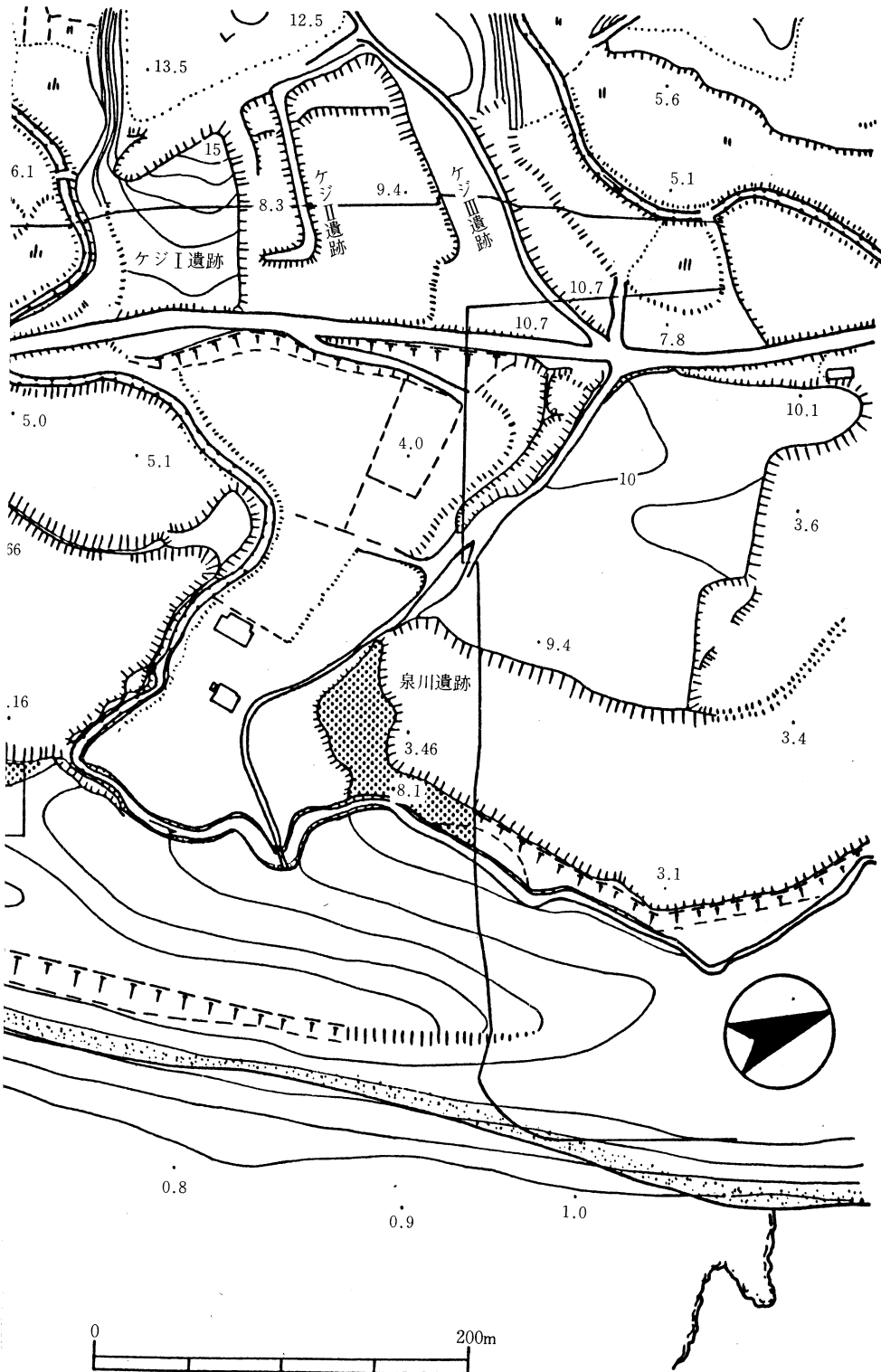
調査は、当初、アダンやモクマオをはじめとする立草木の伐採作業から実施した。表土層は黒褐色砂層で、20～30cmを計測したが、掘り下げ作業とともに白砂層となり、遺物包含層の検出のためトレンチによる確認調査を実施した。その結果、表土層より約3m下位の白砂層中に貝殻を認めたため、深さ約3m付近までは重機による除去及び排土作業を実施する運びとなった。この間、生活の痕跡を示す遺物包含層は検出されなかったことを付記する。

その後、グリッド杭の打ち直し作業後、C-2区、E-2区、G-2区、H-4区、I-5区において確認調査を実施した結果、E-2区、G-2区、H-4区、I-5区は、貝殻が散布している程度で、遺跡地の東側(泉川寄り)は軽石やサンゴ塊や枝サンゴなどが認められたため、C-2区、E-2区、H-4区において深掘りの確認調査を実施した結果、約1mの間はクール(水成作用で凝結した砂層)となり、E-2区およびH-4区においては、湧水が認められ、遺物包含層は検出されなかった。さらに、C-2区において確認調査を行い、兼久式土器の小破片とともに貝殻が検出された。C-3区においても確認調査を実施し、同様の調査結果を得たため、D区以西について全面調査へと作業を運んだ。

C-2区・C-3区において、白砂層のクール下、褐灰色砂層中より多量の貝殻、土器破片サンゴ類が混在して出土した。土器破片はローリングを受けたものが多く、貝殻においても死骸と思われるものがほとんどであり、調査はB区以西へと進展した結果、A区・B区・C区・D



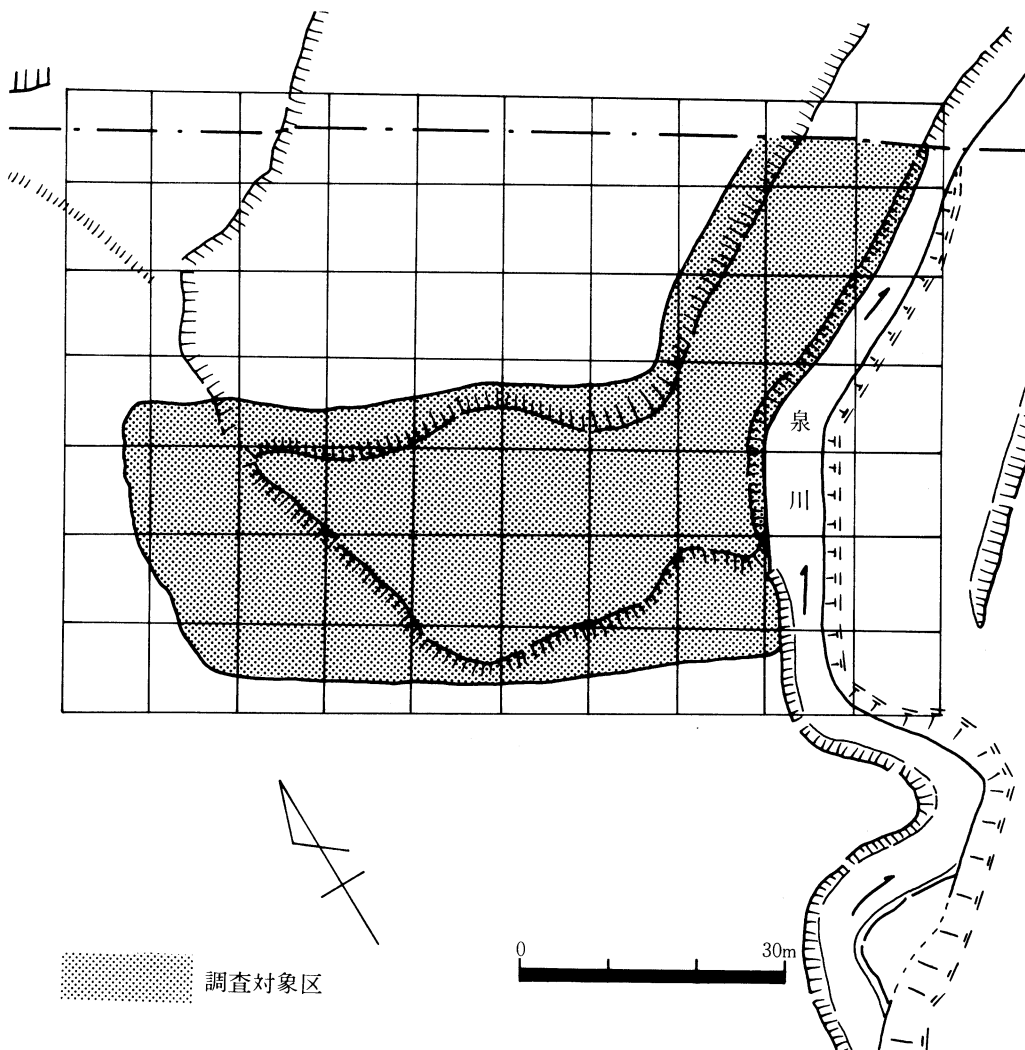
第2図 泉川遺跡の周辺地形図



区・E区（一部）において、貝殻（貝製品を含む）・土器破片（須恵器・土師器を含む）をみる。特にC・D区を中心に貝殻の出土を認め、その集中度が注目されたが、明確な形ではとらえられなかった。また、当時の海岸の岩礁や湧水が認められた。

層位についてみると表土層は、黒褐色を呈し、2層は白砂層で約4mを数え、この間はクールを随所に認め、若干の遺物を検出する。3層は褐灰色砂層で貝殻や土器などが出土した。このように遺物を包含する砂層は、サンゴ塊や枝サンゴを含み、貝殻の死骸で構成され、人為的な層位でなく海進海退の影響を受け、現位置でなく二次的な推積層と判断した。

- 注1 笠利町教育委員会 「ケジ遺跡・コロビ遺跡・辺留窪遺跡」笠利町文化財報告No.6 1983.3
- 注2 鹿児島県教育委員会 「長浜金久遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32 1985.3
- 注3 鹿児島県教育委員会 「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38 1986.3



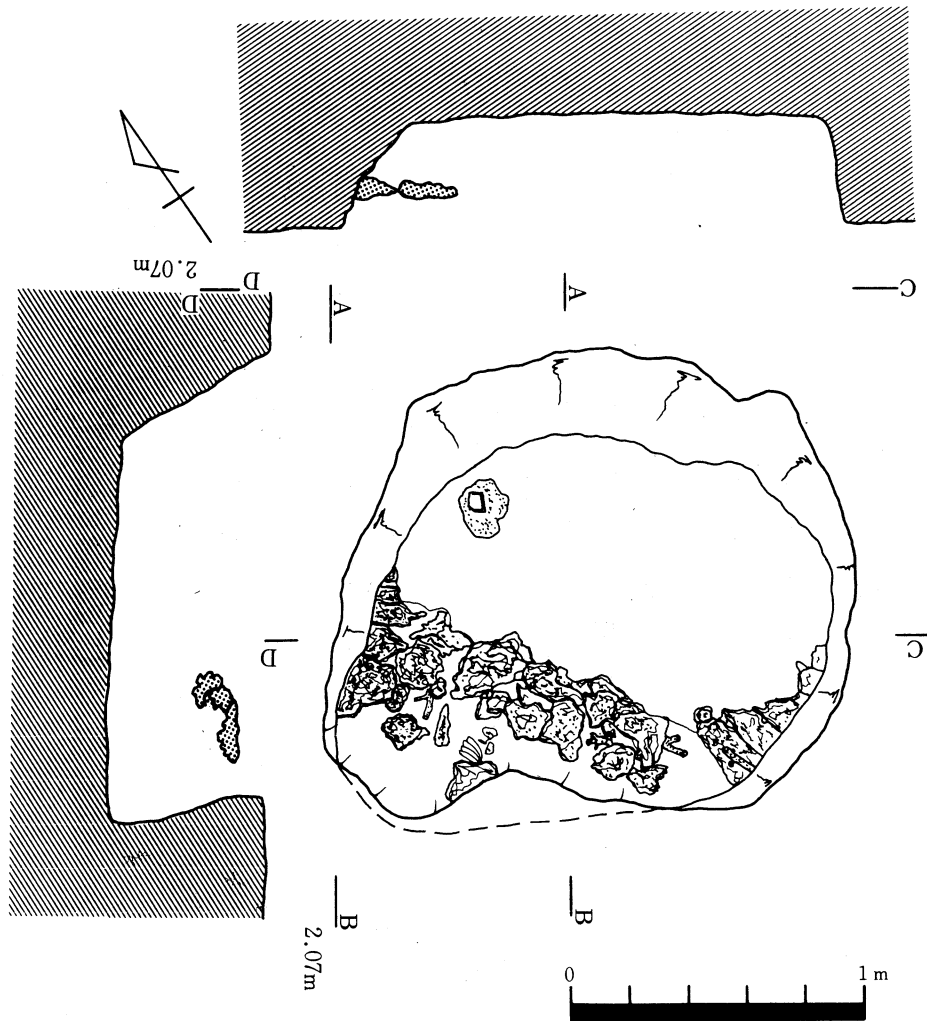
第3図 泉川遺跡グリッド配置図



## 第 4 章 遺 構

本遺跡からは、土壌が遺跡地西端のB-3区白砂層中で検出した。土壌の規模は、最大長182cm、最大幅160cm、深さ約40cmを測る略円形状の土壌である。

土壌は、白砂層に掘込みを認め、埋土は青灰色の砂層で、埋土中には、埋土中位付近から上位にかけて、焼かれたサンゴや枝サンゴ、径20cm大の礫、土器小破片などが混在した状態で認められ、埋土はクールとなり、非常に固くかたまっていたため、サンゴ類を除去しながら埋土状況を観察しながら掘り下げが、土壌の性格については不明である。この土壌は海進海退の影響を受けているものの残存し、周辺には多くのサンゴ類の残骸を多くみた。



第4図 泉川遺跡土壌実測図

## 第5章 人工遺物

### 第1節 土器 (1~114)

#### 1. 甕形土器

##### I類 (1)

I類は沈線を施している土器である。

1は口縁部破片で、口縁部は復元口径25.1cmを計り、わずかに外反する器形の土器である。文様はヘラによる弧文のくり返しで、口唇部につながるように施文され、その中に略Y字状と頸部に近づく部分に、二本ずつの沈線を縦方向に並べている。器面調整はローリングを受け不明である。

##### II類 (2~6)

II類は沈線と突帯を組み合わせた土器である。

2は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は復元口径30.7cmを計る土器である。口縁部は外反し、頸部でわずかに絞りぎみの器形で、口唇部と突帯間には鋸歯文を施し、破片のため詳細は不明であるが、突帯の状況からはIV類の突帯を思わせるようである。しかし、沈線と突帯との組み合わせからII類に含めた。

3は口縁部破片で、小さい沈線で施文され、破片のため詳細は不明である。

4は山形波状をもつ口縁部破片で、わずかに外反する器形である。山形は粘土紐を貼り付けて造り出されている。突帯を取り囲むようにヘラ状施文具により沈線を施し、器面調整はナデ整形である。

5は頸部に突帯をもつ破片で、ヘラ状施文具により沈線を略弧状に施し、内側には指頭圧調整痕を残し、器壁の薄い破片である。

6は胴部破片で、突帯上位にヘラ状施文具により縦位の沈線を施し、調整は剝落しており不明である。

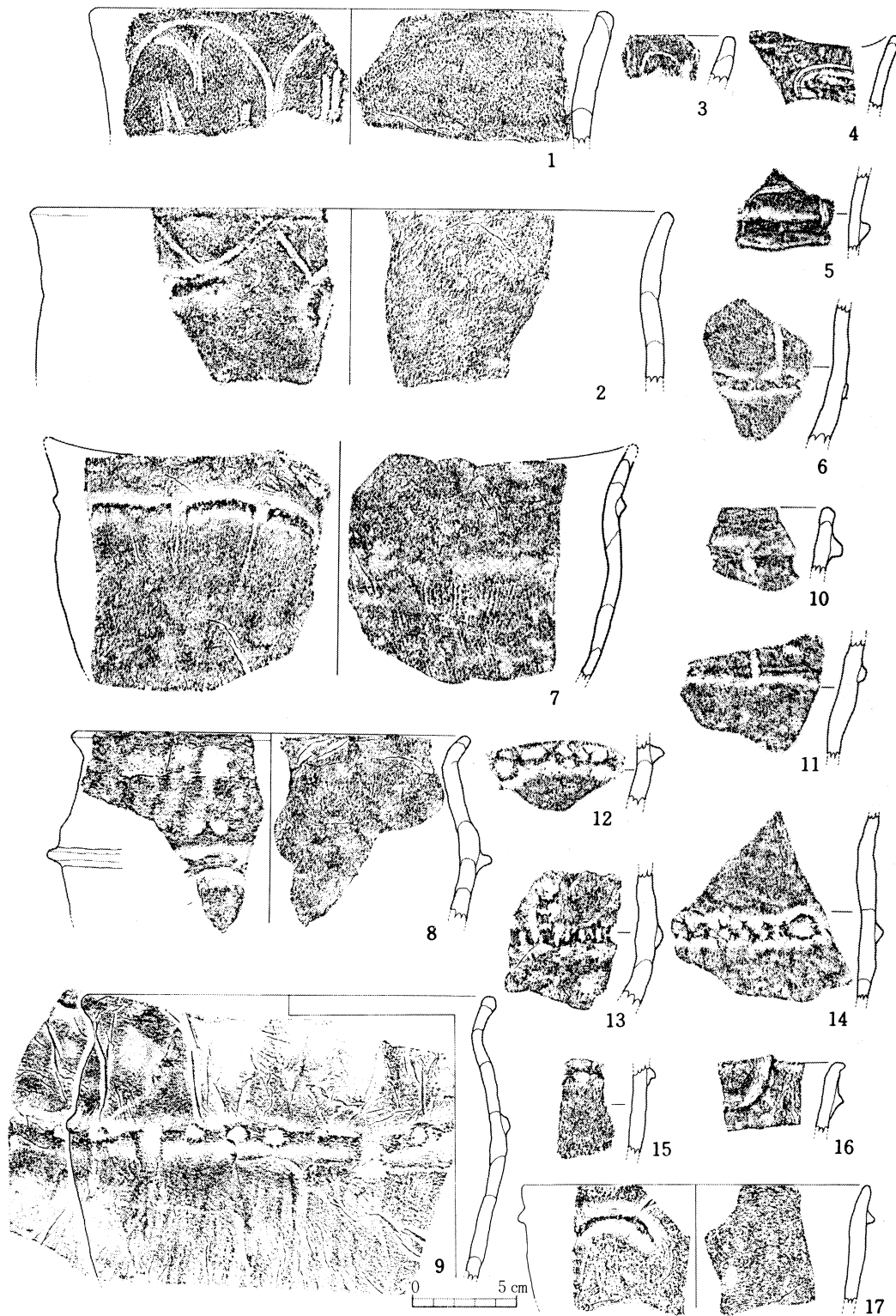
第1表 泉川遺跡I・II類甕形土器一覧表

類	番号	出土区	色調	胎土	焼成	類	番号	出土区	色調	胎土	焼成
I	1	D-3	茶褐色	石英・角閃石・細砂	良	II	4	C-3	暗茶褐色	石英・角閃石・細砂	良
II	2	D-2	明褐色	石英・雲母・細砂	粗	II	5	C-2	黄褐色	石英・雲母・細砂	良
II	3	B-4	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良	II	6	D-2	褐色	石英・角閃石・細砂	粗

##### III類 (7~15)

III類は刻目突帯を付ける土器である。

7は口縁部から胴部にかけての土器破片で、口縁部は山形波状をもつ口縁部である。器形は口縁部が内向し、口縁端部で外曲する。胴部は若干ふくらむ器形で、復元口径28.1cmで、復元



第5図 泉川遺跡土器実測図(1) 甕形土器 I

胴部最大径27.1cmを計る。頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、棒状施文具により不規則に区画している。器面調整は内外面ともに指頭圧調整痕を残し、内面にナデ調整を認める。

8は口縁部から胴部にかけての土器破片である。口縁部は内向し、口縁端部で外曲する。頸部はやや締り、胴部は若干はる器形で復元口径18.6cm、復元胴部最大径20.2cmを計り、胴部には突帯を貼り付けている。器面調整は内外面ともに指頭圧調整痕を残し、外面にナデ調整痕が薄く残在している。

9は口縁部から胴部下位にかけての土器である。口縁部は内向し、口縁端部で外曲し、胴部は丸味を帯び、復元口径19.1cm、復元胴部最大径20.1cmを計る。胴部からやや上位にかけて貼り付け突帯をもち、突帯は、不規則に棒状の工具により区画し、その間に叉状の施文具で刻みを入れ、叉状施文は右から左下へ押し左上へはねあげるように施文している。器面調整は内外面ともに指頭圧調整痕を顕著に残し、外面の口縁部から突帯間は横位のナデ調整で、突帯下位は指頭か棒状施文具により縦位のナデ調整を施し、内面は剥落し不明である。

10は口縁部破片である。口唇部下位に貼り付け突帯をもち、U字状の刻み目を施している。器面調整はナデ調整で、突帯下位には煤の付着を認める。

11は胴部付近に断面三角形の貼り付け突帯をもつ土器破片で、突帯にはV字状の刻みをもち、器面調整はローリングを受け不明である。

12は胴部上位に断面三角形の貼り付け突帯をもつ土器破片である。突帯は断面三角形の突帯に、指頭によりO字刻みと指頭つまみを施し、器面調整はローリングを受け不明である。

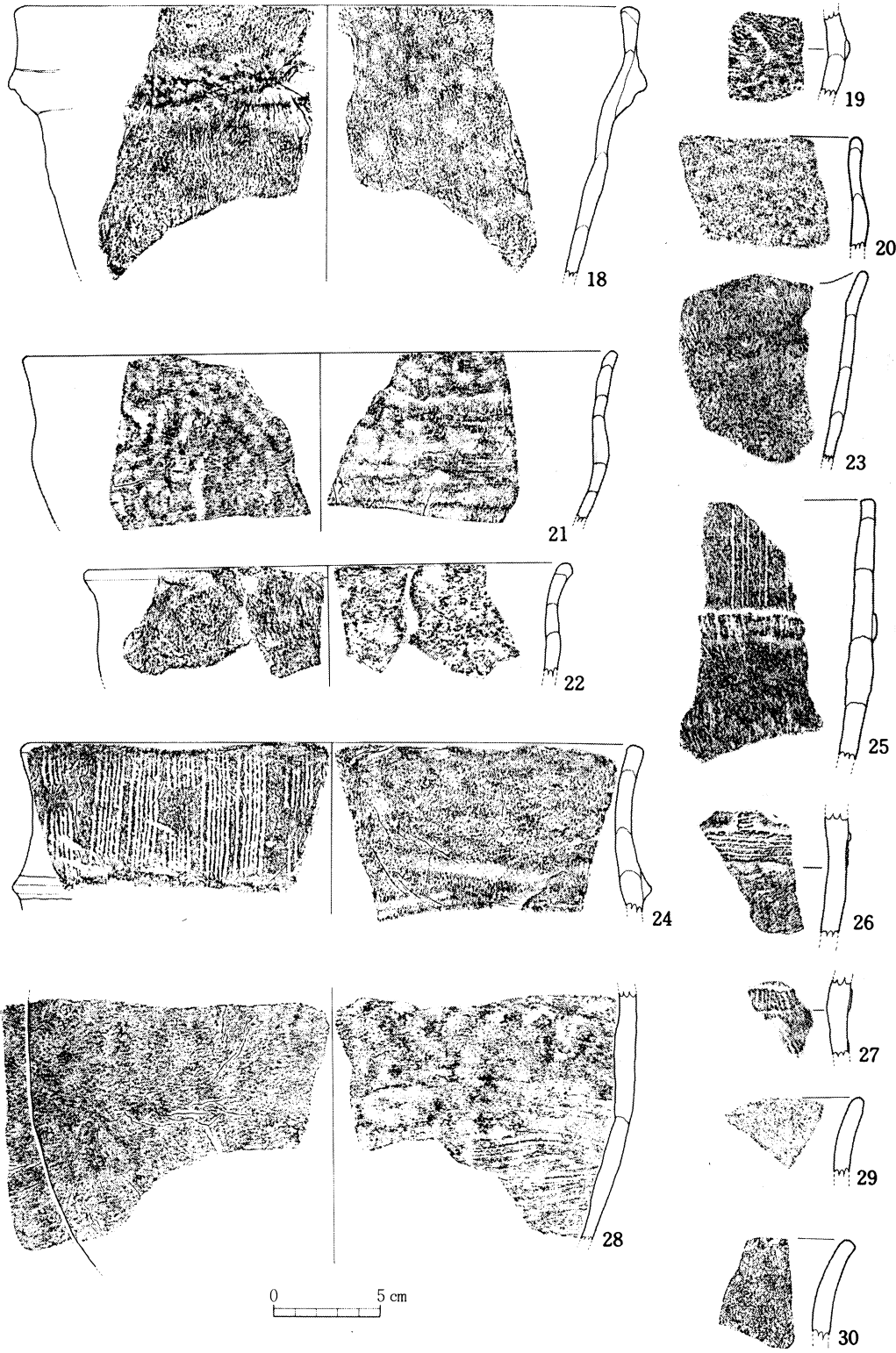
13は胴部破片である。横位と縦位の断面三角形の突帯を貼り付け、突帯は貝殻の復縁により刻目を施し、器面調整は指頭圧調整痕を残し、ナデ調整を施している。

14は口縁部付近から胴部にかけての破片である。胴部最大径と思われるところのやや上位に断面三角形の突帯を貼り付け、突帯は指頭圧によるO字刻みで区画し、区画内には指頭つまみを施している。器面調整はローリングを受けているが、指頭圧調整痕を残し、外面の一部にナデ調整が残存する。

15は断面三角形の貼り付け突帯をもつ土器で、突帯は指頭つまみをもち、調整痕はローリングを受け不明である。

第2表 泉川遺跡Ⅲ・Ⅳ類甕形土器一覧表

類番	出土区	色調	胎土	焼成	類番号	出土区	色調	胎土	焼成
Ⅲ 7	D-4	黒褐色	石英・長石・細砂	良	Ⅲ 14	C-2	茶褐色	石英・長石・細砂	良
Ⅲ 8	E-1	燈茶褐色	石英・長石・細砂	良	Ⅲ 15	D-2	茶褐色	石英・長石・細砂	良
Ⅲ 9	C-2	明茶褐色	石英・長石・細砂	良	Ⅳ 16	D-2	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
Ⅲ 10	D-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良	Ⅳ 17	C-2	暗褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
Ⅲ 11	C-3	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	Ⅳ 18	C-2	赤茶褐色	石英・長石・細砂	良
Ⅲ 12	D-2	赤茶褐色	石英・長石・細砂	良	Ⅳ 19	D-3	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
Ⅲ 13	C-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良					



第6図 泉川遺跡土器実測図(2) 甕形土器Ⅱ

**Ⅳ類** (16～19・45)

Ⅳ類は横位の突帯に縦位の突帯を組み合わせたものや横位の突帯が変化したものがみられる土器である。

16は器壁が薄く、やや外反する口縁部破片である。頸部付近から口唇部にかけて横位と縦位の断面三角形の突帯を連続して貼り付けてある土器である。器面調整はナデ調整で、煤の付着を認める。

17は口縁部がやや外反する器形の土器で、復元口径16.6cmを計り、頸部には、横位の突帯が変化した逆U字状の突帯を貼り付けている。器面調整はローリングを受けているが、指頭圧調整痕を若干残し、部分的にナデ調整を認める。

18は、この類ではやや特異なものである。底部付近から直線的に外向し、頸部付近から直口する口縁部を作る器形の土器で、復元口径29.3cmを計る。破片のため定でないが、頸部付近から口唇部にかけて横位で幅の広い断面三角形の貼り付け突帯と口唇部にかけての斜位の断面三角形突帯を組み合わせたものである。器面調整は、ローリングを受けているが、内外面ともに指頭圧調整痕を残し、内面は口縁部付近に横位のナデ調整を施し、外面の口縁部付近は横位、突帯下位は縦位のナデ調整が部分的に残存している。

19・45は孤状の一部と思われる貼り付け突帯を有する土器破片である。19の器面調整はローリングを受けているが、指頭圧調整痕を残し、部分的にナデ調整を認める。45はの器面調整は内外面ともにナデ調整を施し、指頭圧調整痕を認める。突帯下位から胴部にかけて煤の付着が残存している。

**Ⅴ類** (20～23)

Ⅴ類は無文の土器である。

20は口縁部から頸部下位付近にかけての土器破片である。直口する口縁部で器壁の薄い器形を呈している。器面調整はローリングを受けているために内外面とも胎土中の鉱物や砂粒が露呈する。

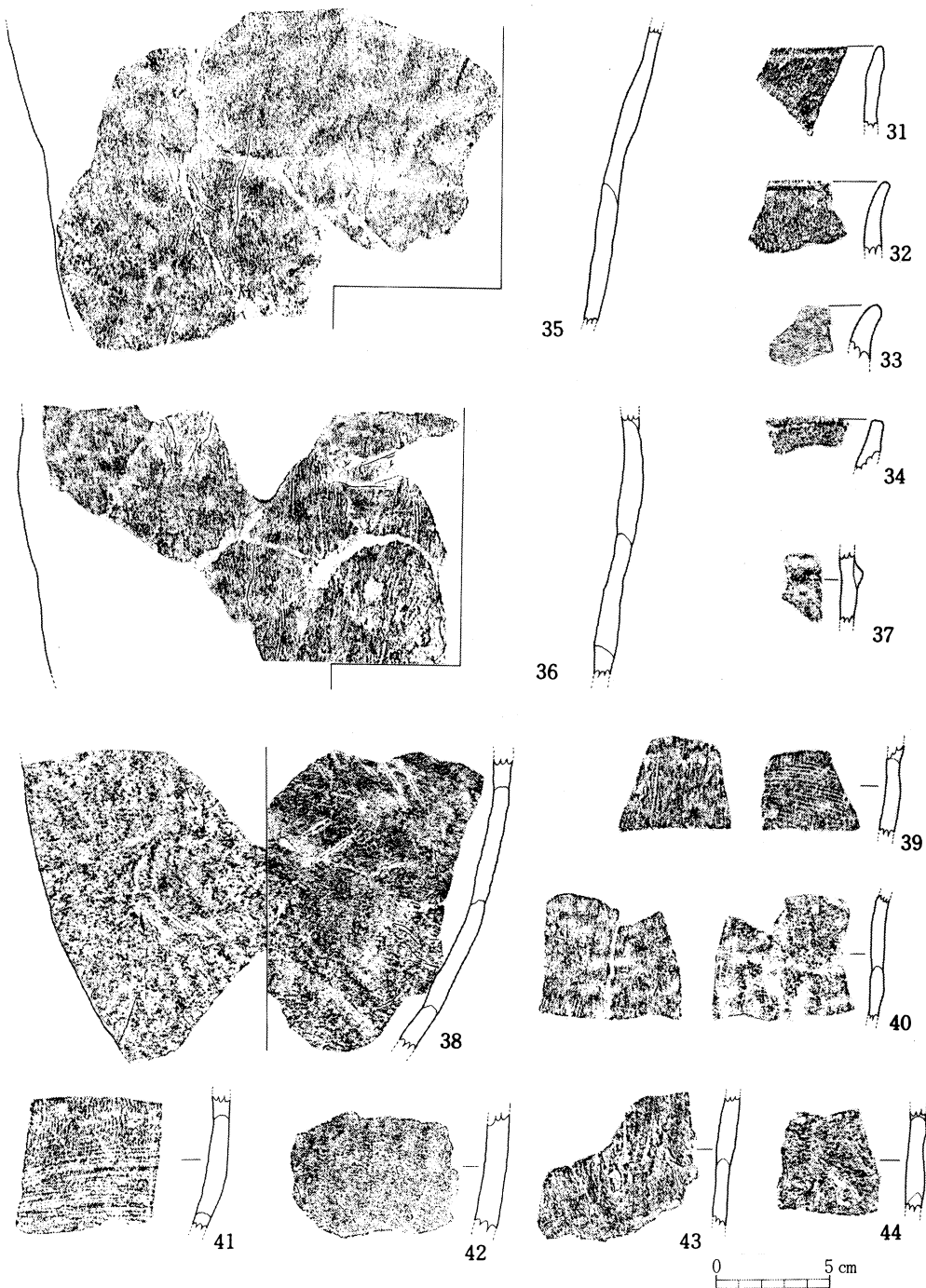
21は口縁部がやや外反し、胴部は丸味をもつ器壁の薄い器形の土器破片で、復元口径27.8cmを測る。器面調整は内外面ともに指頭圧調整痕を顕著に残し、ナデ調整である。内面の一部には輪積みの手法を残し、外面の一部には煤の付着を認める。

22は21より口縁部が外反し、器壁の薄い土器で、復元口径22.8cm、復元胴部最大径21.6cmを計る。器面調整はローリングを受け不明であるが、部分的にナデ調整を認める。

23は山形波状をもつ口縁部から胴部にかけての器壁の薄い土器である。器形は直線的に外向し、口縁部がわずかに外反する。器面調整はローリングを受け内外面ともに不明である。

**Ⅵ類** (24～27)

Ⅵ類は横位の粘土帯や横位と縦位の粘土帯を組み合わせたものに刻目を施している土器である。



第7図 泉川遺跡土器実測図(3) 甕形土器Ⅲ

24は復元口径29.1cmの口縁部から頸部下位にかけての土器で、器壁は厚く大形土器である。頸部には幅広い断面三角形の貼り付け突帯をもち、口唇部から突帯間には1.4cm幅の櫛描文を口唇部より縦位に2列づつ施し、その中間には、1列の櫛描文を施すが、その中ほどには施文せず文様を構成し、この施文の組み合わせをくり返している。また突帯下位にも櫛描文が施されているがわずかに観察できる。器面調整はローリングを受け不明である。

25は口縁部付近から胴部下位についての土器破片で、低い横位の粘土帯の貼り付けをもって。粘土帯上位には口唇部付近と思われるところより櫛描文の施文を認める。粘土帯はヘラ状施文具により区画し、不規則であるがV字刻みを施している。器面調整はローリングを受け不明であるが、わずかにナデ調整痕を残す。

26は胴部付近と思われる土器破片である。幅広い横位の粒土帯と縦位で低い粘土帯との組み合わせをもつもので、粘土帯の上位にわずかであるが縦位の櫛描文の痕跡をととめている。横位の粘土帯は上下二回で叉状工具による二本の平行施文が施され、縦位の粘土帯にはヘラ状施文具により刻みを施している。器面調整は、ナデ調整であるが鮮明さに欠ける。

27は低い粘土帯をもつ土器破片である。粘土帯は櫛描状の施文により刻目を施し、さらに下位には粘土帯の一部を認める。粘土帯間には穿孔を認める。

第3表 泉川遺跡V・VI類甕形土器一覧表

類	番号	出土区	色調	胎土	焼成	類	番号	出土区	色調	胎土	焼成
V	20	D-3	黒褐色	石英・長石・細砂	粗	VI	24	B-3	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
V	21	D-3	暗褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	VI	25	B-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良
V	22	C-4	暗褐色	石英・長石・細砂	良	VI	26	C-2	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
V	23	C-2	赤褐色	石英・長石・細砂	良	VI	27	C-2	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良

その他の甕形土器 (28~49)

28は胴部からその下位にかけての土器破片である。器面調整はローリングを受けているが、指頭圧調整痕を内側に残し、外面の一部はナデ調整をわずかに認め、内面は横位のヘラナデ調整痕が不鮮明ながら観察できる。

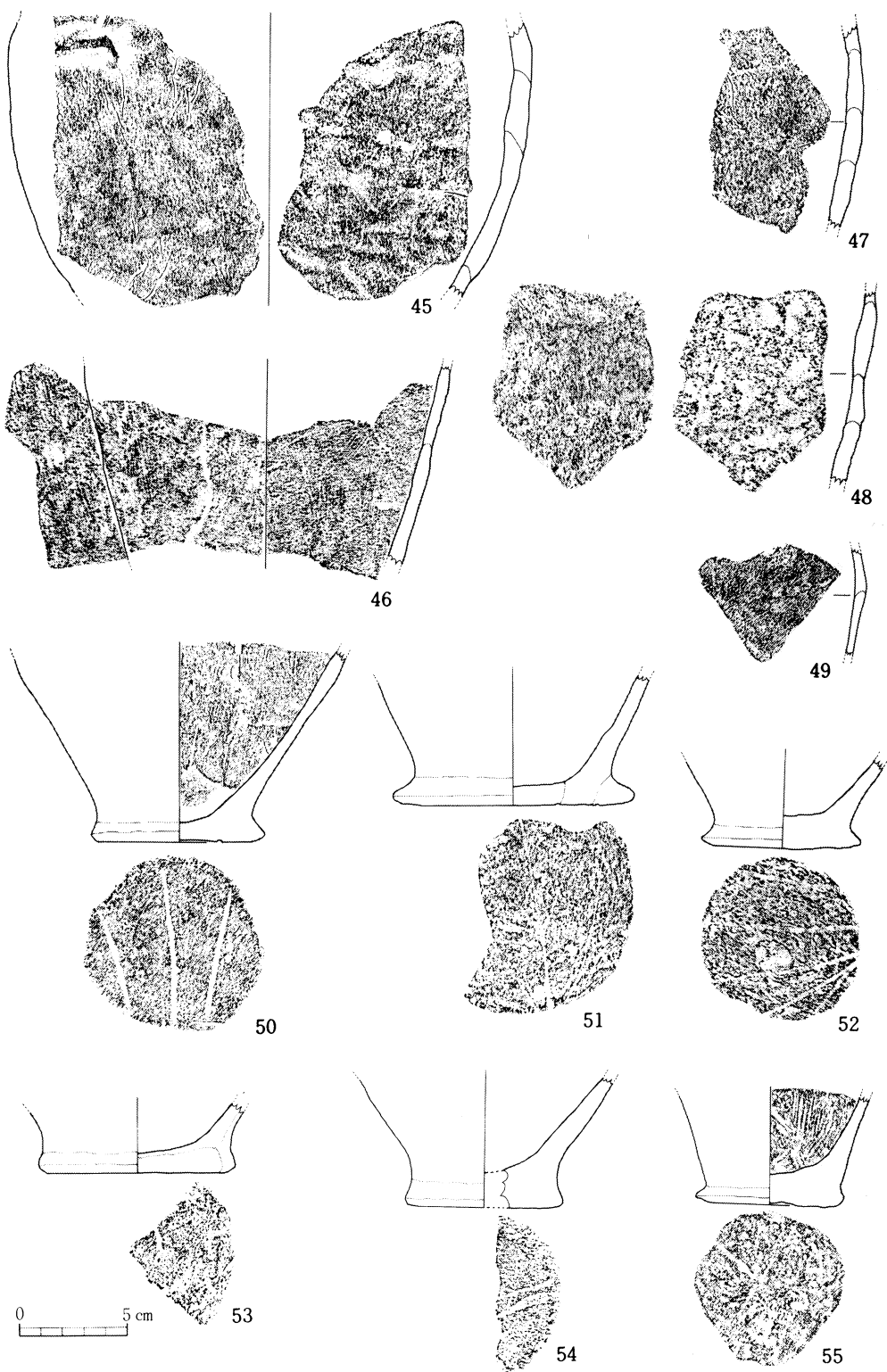
29はわずかに外反する器壁の薄い口縁部破片である。器面調整はローリングを受け不明である。

30~34は外反する口縁部破片である。30は器面調整はナデ調整で、内側はローリングを受け不明である。口唇部下位には指紋の付着を認める。31はローリングを受けているが、わずかにナデ調整痕を残す。32はハケナデ調整痕を残し、33は表面に指紋や煤の付着を認める。34はローリングを受け器面調整は不明である。

35は頸部下位から胴部下位についての土器破片である。器面調整はローリングを受け不明であるが、指頭圧調整痕を残す。

36は胴部からその下位についての土器破片である。器面調整は外面で縦位や斜位のヘラナデ





第8図 泉川遺跡土器実測図(4) 甕形土器Ⅳ

調整で、内面はローリングを受け不明である。内外面ともに指頭圧調整痕を残す。

37は小破片のためその他に入れた。断面三角形の貼り付け突帯をもつ土器で、内外面の調整はローリングを受け不明である。

38は胴部付近からその下位にかけての土器破片である。器面調整は外面でナデ調整を施し、内面はローリングを受けて不明である。内外面ともに指頭圧調整痕を残す。また、内面には輪積みの痕跡を顕著に残している。

39は器壁の薄い胴部付近の土器破片で、器面調整は外面が縦位で、内面は横位のナデ調整である。土器の上下端は輪積みの部分より剝離した破片である。

40は頸部付近から胴部付近にかけての土器破片で、器面調整は両面ともわずかに縦位のナデ調整を残し、内面には輪積みの痕跡を認める。

41～44は胴部付近と考えられる土器破片である。41の器面調整は外面にナデ調整を施し、内面には横位及び縦位のヘラナデ調整痕を顕著に認め、輪積みの痕跡を残す。42の器面調整は外面でナデ調整を施し、内面はローリングを受けいるが、部分的にナデ調整痕を認める。43の外面には輪積みの調整部分を顕著に残し、内面はローリングを受け調整痕は不明である。44はローリングを受け調整痕は不明であるが、外面の一部にわずかにナデ調整痕を残す。

46～49は、胴部付近から胴部下位にかけての土器破片で、46・49は器壁の薄い土器である。器面調整はローリングを受けている。46は内外面ともにナデ調整痕を部分的に残し、47はわずかにナデ調整痕を残す。内面には輪積み調整痕を認める。48は内外面とも剝落して不明であるが、内面に指頭圧調整痕を残している。49は不明である。

第4表 泉川遺跡その他の甕形土器一覧表

番号	出土区	色調	胎土	焼成	番号	出土区	色調	胎土	焼成
28	B-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良	39	B-3	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
29	C-4	茶褐色	石英・長石・細砂	良	40	D-2	暗褐色	石英・長石・細砂	良
30	D-3	褐色	石英・長石・細砂	良	41	D-2	暗灰褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
31	E-3	暗褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	42	D-2	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
32	E-2	黒褐色	石英・長石・金雲母・細砂	良	43	D-2	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
33	D-2	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	44	D-2	明褐色	石英・長石・細砂	良
34	D-2	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	45	C-2	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
35	D-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	46	C-2	黄茶褐色	石英・長石・細砂	良
36	C-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	47	C-3	暗褐色	石英・長石・細砂	良
37	D-2	明茶褐色	石英・長石・細砂	良	48	C-3	茶褐色	石英・長石・細砂	粗
38	D-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良	49	C-2	明茶褐色	石英・長石・細砂	良

甕形土器底部 (50～66)

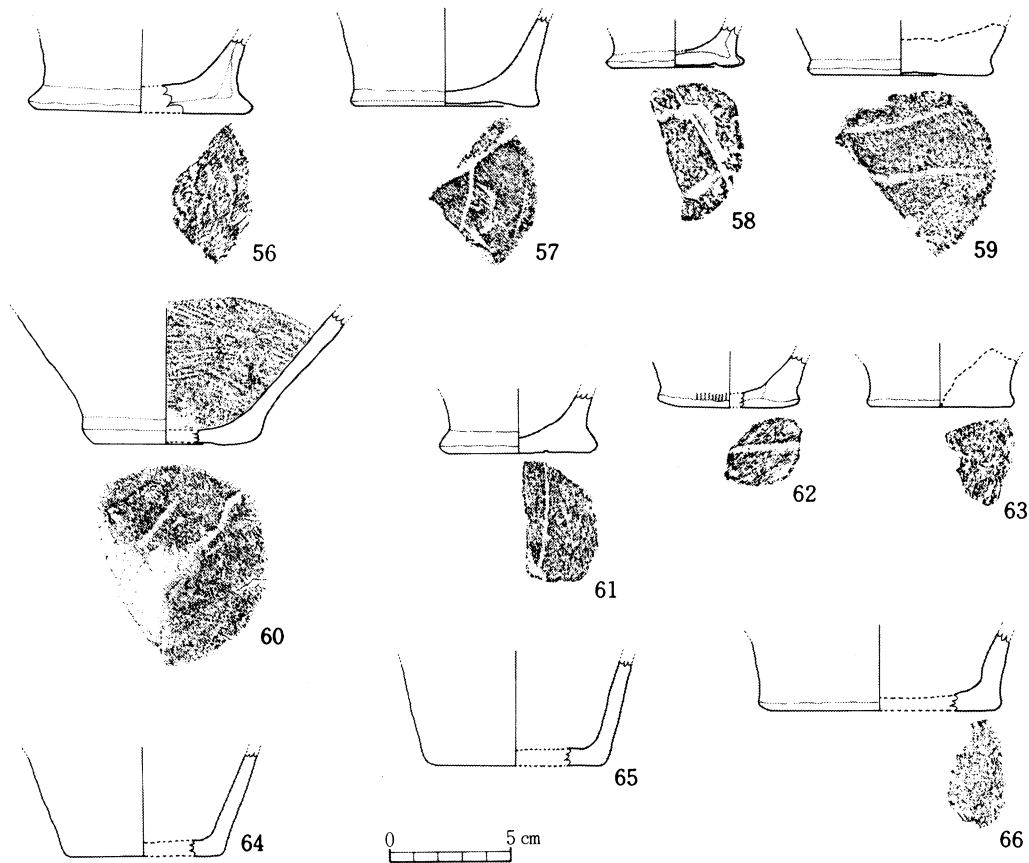
底部の底面には、木の葉の圧痕を有するもの、あるいは沈線のあるものなどがあり、51、54

57、61、63は葉痕をもち、50、52、53、55、58、59、60、62は沈線をもつもので、他は不明である。厚手の底部には、52、54、55、56、59、63があり、他は薄手のもので、外方へ張り出したものが多く見られ、角張った底部は、50、51、52、55、56、58、61で、丸味をもつものは、64、66以外のもので、64、66は張り出しがみられないタイプで、兼久式土器に含めた。

50は底部径8cmを計り、器面調整はローリングを受けているが、内外面ともにナデ調整痕を部分的に残している。51は復元底部径11.1cmを計り、底面の葉痕は鮮明で葉脈まで観察できる。器面調整は外面でナデ調整、内面はローリングを受け不明である。52は底部径7.3cm、53は復元底部径9cmを計り、ともに器面調整はローリングを受け不明である。54は復元底部径7.3cmを計り、器面調整はローリングを受けているが、内外面ともナデ調整痕を部分的に残す。55は底部径6.8cmを計り、器面調整はローリングを受けているが、内面には指頭圧調整痕を残し、ヘラナデ調整され、外面は不明である。56は復元底部径9.1cm、57は9.3cmを計り、ともに器面調整はローリングを受けて不明である。しかし、外面の一部にナデ調整痕を認める。58は復元底部径5.6cmを計り、器面調整はローリングを受け不明である。底面は粘土紐の張り付け状況が観察でき、沈線をもつ底部である。59は復元底部径7.6cm、60は7.4cmを計り、ともに器面調整はローリングを受け不明である。しかし、60は内外面ともにナデ調整痕をわずかに残す。61は復元底部径6.5cm、64は6.6cm、65は7.6cm、66は9.9cmを計り、器面調整はローリングを受け不明である。62は復元口径5.9cmを計り、器面調整は内面では不明で、外面はヘラ状施文具によるナデ調整痕の一部に認める。63は復元底部径6.0cmを計り、底面には葉痕らしい痕跡をもつものである。

第5表 泉川遺跡甕形土器底部一覧表

番号	出土区	色調	胎土	焼成	番号	出土区	色調	胎土	焼成
50	C-3	赤茶褐色	石英・長石・細砂	良	59	E-1	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
51	C-2	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	60	C-2	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
52	C-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	61	D-3	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
53	C-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良	62	D-3	明褐色	石英・長石・細砂	良
54	C-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	63	E-1	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
55	C-3	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	64	B-4	黄褐色	石英・長石・細砂	良
56	D-4	明褐色	石英・長石・細砂	良	65	B-2	明褐色	石英・長石・細砂	良
57	D-2	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良	66	C-4	茶褐色	石英・長石・細砂	良
58	E-1	黒褐色	石英・長石・細砂	良					



第9図 泉川遺跡土器実測図(5) 甕形土器V

## 2. 壺形土器

### I類 (57)

I類は沈線を施している土器である。

67は比較的短い口縁部で、肩の張る器形の土器であり、復元口径11.0cmを計る。頸部に一本の浅い沈線文を施し、口唇部から沈線内に口唇部に近づけるように鋭いヘラ状の施文具によりY字状の沈線を施文している。器面調整は部分的にローリングを受けているが、外面はハケナデ調整で、内面は指頭圧調整痕を残し、ハケナデとヘラナデ調整痕を認める。

### II類 (68)

II類は沈線と突帯を組み合わせた土器である。

68は胴部から直線的に内向し、口唇部は比較的短かく直口する器形で、復元口径8.6cmを計る器壁の薄い土器である。頸部付近には断面三角形の貼り付け突帯をもっている。突帯はヘラ状施文具により刻みを入れ、雷文様な沈線を施し、沈線は左から右の方向に施文している。器面調整は外面ともに指頭圧調整痕を残し、表面はヘラナデやハケナデ調整で、内面は部分的にヘラによるナデ上げやナデ調整痕を認め、輪積の痕跡も残している。

### III類 (69・71・72)

III類は刻目突帯を付ける土器である。

69は胴部から直線的に内向し、直口する口縁部をもち、胴部の張る器形の土器で、復元口径7.4cmを計る。頸部付近には断面三角形の貼り付け突帯をもっている。器面調整はローリングを受け調整痕は不明である。

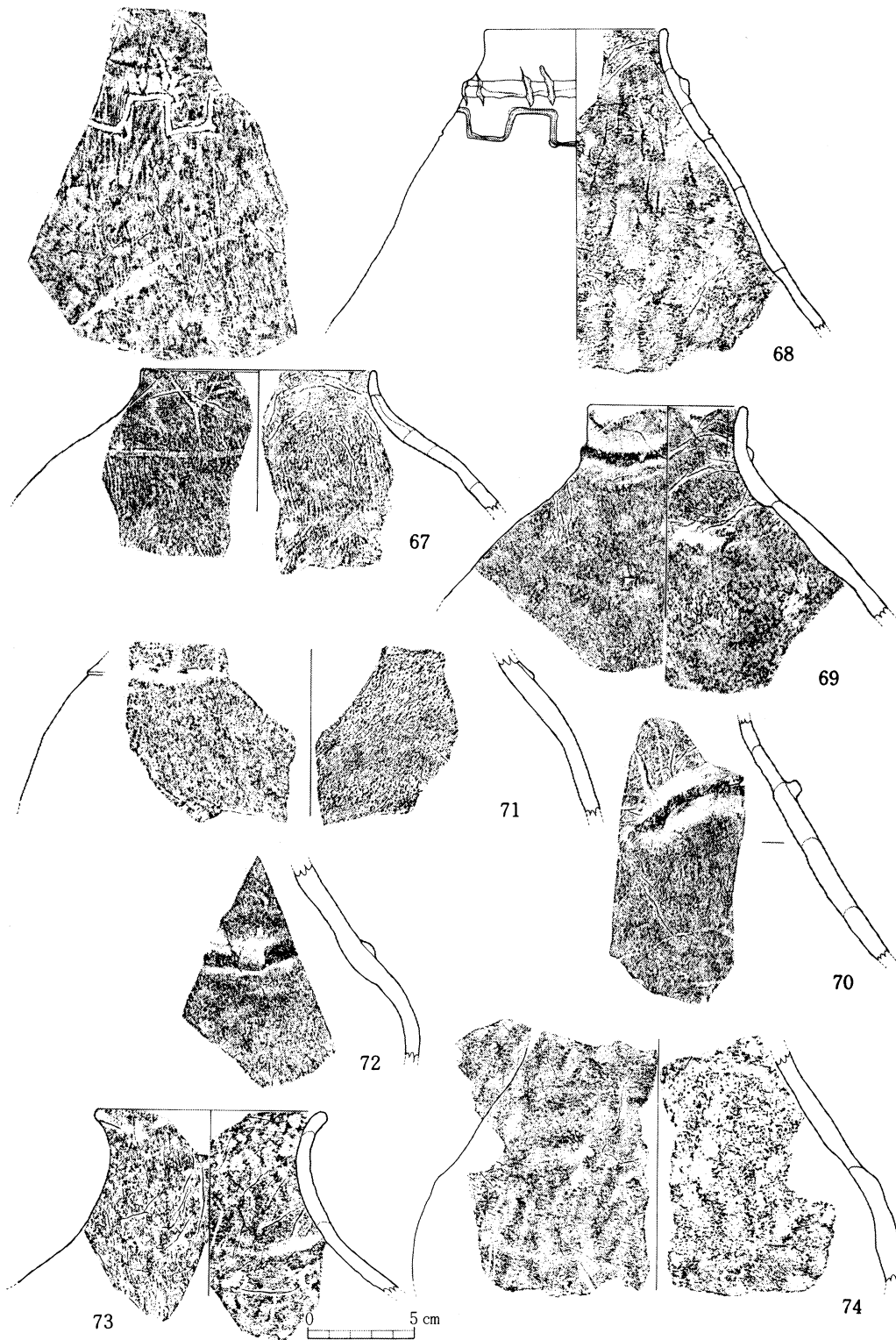
71は頸部から胴部付近にかけての破片で刻目突帯をもつ土器である。器面調整は外面においてナデ調整を施し、内面はローリングを受け調整痕は不明である。

72は頸部から胴部にかけての土器破片で、胴部は張り、直線的に内向しながら口縁部を作るタイプの土器が考えられる。頸部には貼り付け突帯をもち、突帯上には指頭によりO字刻みを施している。器面調整はローリングを受けているため不明であるが、内面には指頭圧調整痕を顕著に残す。

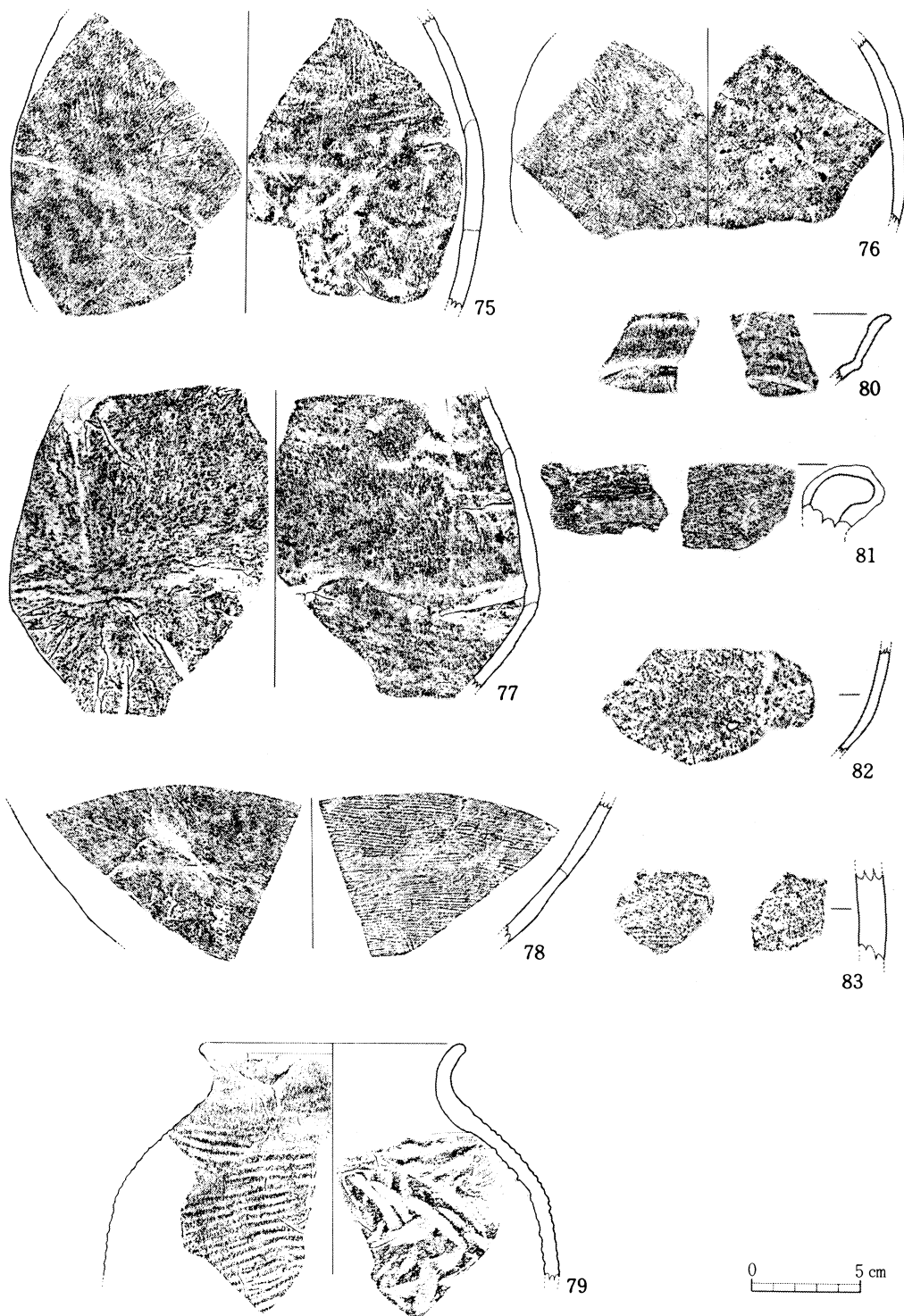
### IV類 (70)

IV類は横位の突帯に縦位の突帯を組み合わせたものや横位の突帯の変化したものがある。

70は胴部から直線的に内向し、口唇部を欠損しているが口縁部を作り出すと思われる器形の土器である。頸部には孤状と思われる貼り付け突帯をもち、器面調整は内面に指頭圧調整痕を顕著に残し、内外面ともにナデ調整痕を認める。



第10図 泉川遺跡土器実測図(6) 壺形土器 I



第11図 泉川遺跡土器実測図(7) 壺形土器Ⅱ, その他の土器

V類 (73)

V類は無文土器である。

73は口縁部が大きく外曲する器形で、復元口径10.9cmを測る。器面調整はローリングを受け、調整痕は不明であるが、内外面ともにわずかにナデ調整痕を一部に残す。

第6表 泉川遺跡I・II・III・IV・V類壺形土器一覧表

類	番号	出土区	色調	胎土	焼成	類	番号	出土区	色調	胎土	焼成
I	67	C-2	明褐色	石英・長石・雲母・細砂	良	III	71	C-2	黒褐色	石英・長石・細砂	良
II	68	D-3	明茶褐色	石英・長石・細砂	良	III	72	E-2	暗茶褐色	石英・長石・細砂	良
III	69	C-2	明茶褐色	石英・長石・細砂	良	V	73	D-3	茶褐色	石英・長石・細砂	良
IV	70	C-2	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良						

その他の壺形土器 (74~78)

74は頸部から胴部にかけての土器破片である。器面調整はローリングを受けているが、内外面ともに指頭圧調整痕を残し、外面にはナデ調整を認め、内面は胎土中の鉱物が著しく露呈し不明である。

75・76・77は頸部下位付近から胴部もしくは胴部下位までの破片で、器壁は薄い器形の土器である。器面調整はともにローリングを受け、75は内外ともに指頭圧調整痕を残し、外面はナデ調整で、内面はヘラナデ調整痕が部分的に残存している。76~77はともに調整痕は不明である。

78は底部付近の破片で、器壁の薄い土器である。器面調整は外面ではローリングを受け、不明である。内面には鮮明なヘラナデ調整痕を残している。

第7表 泉川遺跡その他の壺形土器一覧表

番号	出土区	色調	胎土	焼成	番号	出土区	色調	胎土	焼成
74	C-3	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	77	C-3	明茶褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	良
75	D-3	黄茶褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	良	78	E-3	黄褐色	石英・長石・細砂	良
76	D-2	明茶褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	良					

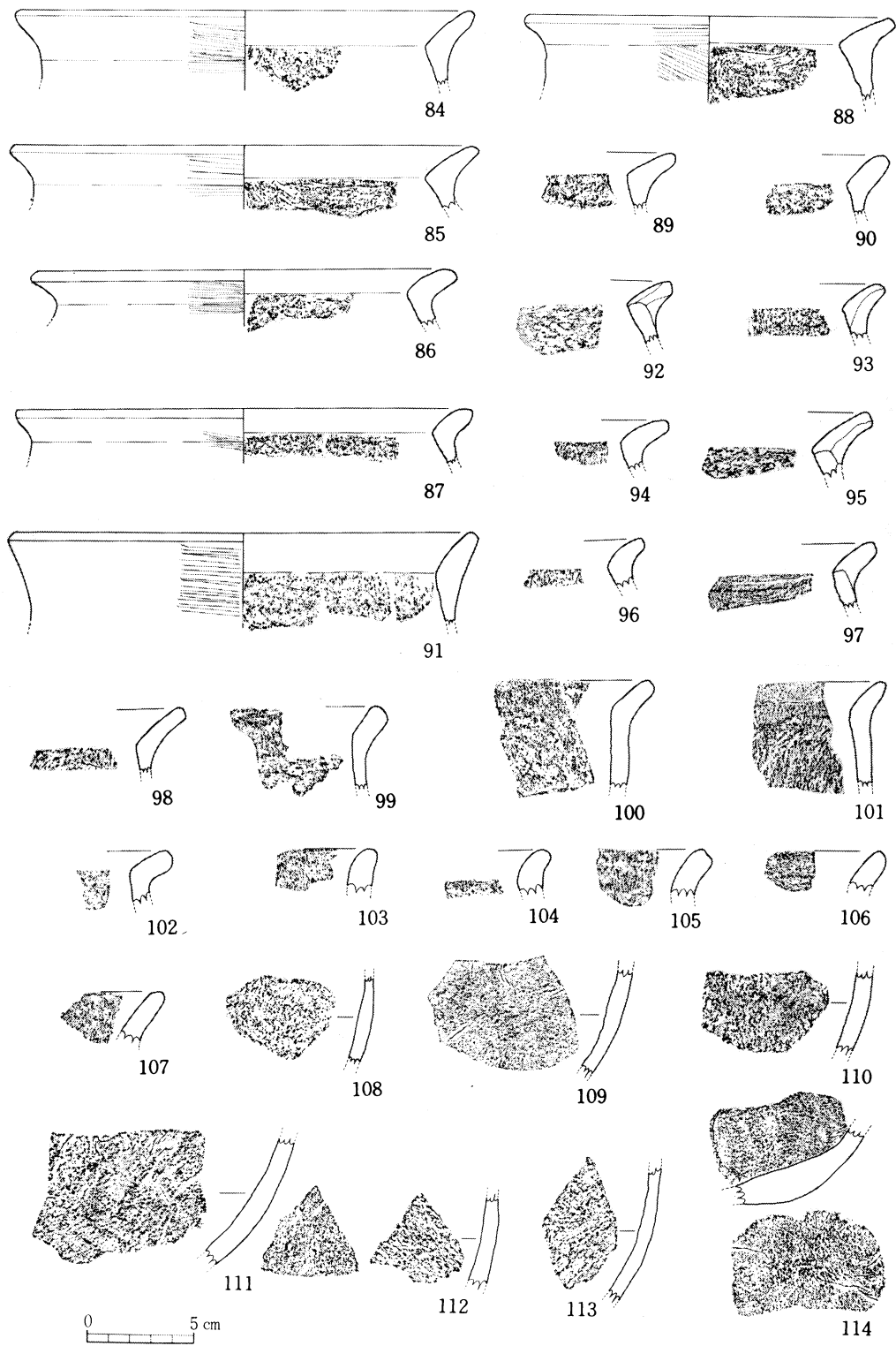
3. その他の土器 (79~114)

須恵器 (79~80)

79は甕形土器で復元口径12.3cmを計り、口縁部は短かく外反し、肩部が張る器形である。器面の調整は外面で平行タタキにより施文され、内面は同心円タタキと思われるが、特徴のあるあて具を使ったものと考えられる。器面は内外面とも風化が著しい。

80は壺もしくは甗の口縁部と思われる破片で、頸部からのびた口縁部は一端屈曲し外反する。口唇部は丸くおさめ、屈曲部には突起をもつ器形である。外面は風化が著しく調整痕は不明で、外面は横位のナデ調整である。





第12図 泉川遺跡土器実測図(8) その他の土器

**土師器 (84~114)**

84~114は土師器の甕形土器で、84~107は口縁部破片で、108~114は胴部下位から底部近くにかけての土器破片である。そのほとんどの土器がローリングを受け、内外面とも磨滅しているものが多く、内面については、大半が磨滅しわずかにヘラケズリの痕跡をどどめるものが多い。

84は復元口径21.4cmで、85は21.7cm、86は19.9cm、87は21.3cm、88は17.2cmを計り、くの字状の口縁部である。それぞれの土器は大なり小なりのローリングを受け、特に内面においては胎土中の鉱物が露呈しているものが多い。これらの土器は磨滅しているもののヘラケズリの痕跡を残している。84・85・86・88の外面にはわずかにハケナデ調整痕を残している。89~90、92~97はくの字状口縁部で復元不可能な破片で、97以外の土器破片はすべてローリングを受け内外面ともに磨滅を受けているが、内面は不鮮明なヘラケズリの痕跡を認める。97は鮮明なヘラケズリの痕跡を残している破片で、他の破片はわずかに痕跡を残すものである。92・94・96はわずかながら外面にハケナデ調整の痕跡を残し、97は他の破片より鮮明にハケナデ調整痕を残す、84~90、92~97はくの字状口縁部で、胴の張るタイプの甕形土器が考えられる。

91・98~101はくの字状の口縁部で、91は復元口径21.9cmを計り、ほとんどがローリングを受け、98以外の破片は、外面に磨滅をあまり認めない。内面では磨滅が著しく認められるが、ヘラケズリの痕跡をわずかにとどめている。99~101の外面にはハケナデ調整痕を認める。98~101はくの字状口縁部で、あまり胴の張りのないタイプの甕形土器の器形が考えられる。

102~107は口縁部破片で、そのほとんどがローリングを受け、105・106以外は全てハケナデ調整痕を残す。

108~114は胴部下位付近から底部付近にかけての破片で、ローリングを受けているが、108~113は内面にヘラケズリの調整痕をわずかに残している。109~111は外面にハケナデ調整痕を残し、108~110は煤の付着を認める破片である。

**土器破片**

81は甕形土器の厚手の口縁部の破片で、口縁部は内側から口唇部、口縁部内側にかけて粘土帯を認め、この粘土帯は修理のため貼り付けた修理痕が考えられるものである。器面は外面でヘラナデ調整を認め、内面は磨滅を認めるがハケナデ調整痕を残す。

82は破片のため定でないが、壺形土器の底部付近の器形が考えられる。この土器破片は、器壁が非常に薄く、内面に靨痕をもつ土器である。器面調整はローリングを受け、特に、内面では胎土中の鉱物が露呈するほど磨滅を受け、外面はわずかにハケナデ調整の痕跡をとどめているのみである。内面の靨痕はかろうじて磨滅を受けず、その痕跡をとどめている。靨の長さ、 $5 < \text{mm}$ 、幅 $3 \text{mm}$ 、長幅比 $1.7 <$ を計る。

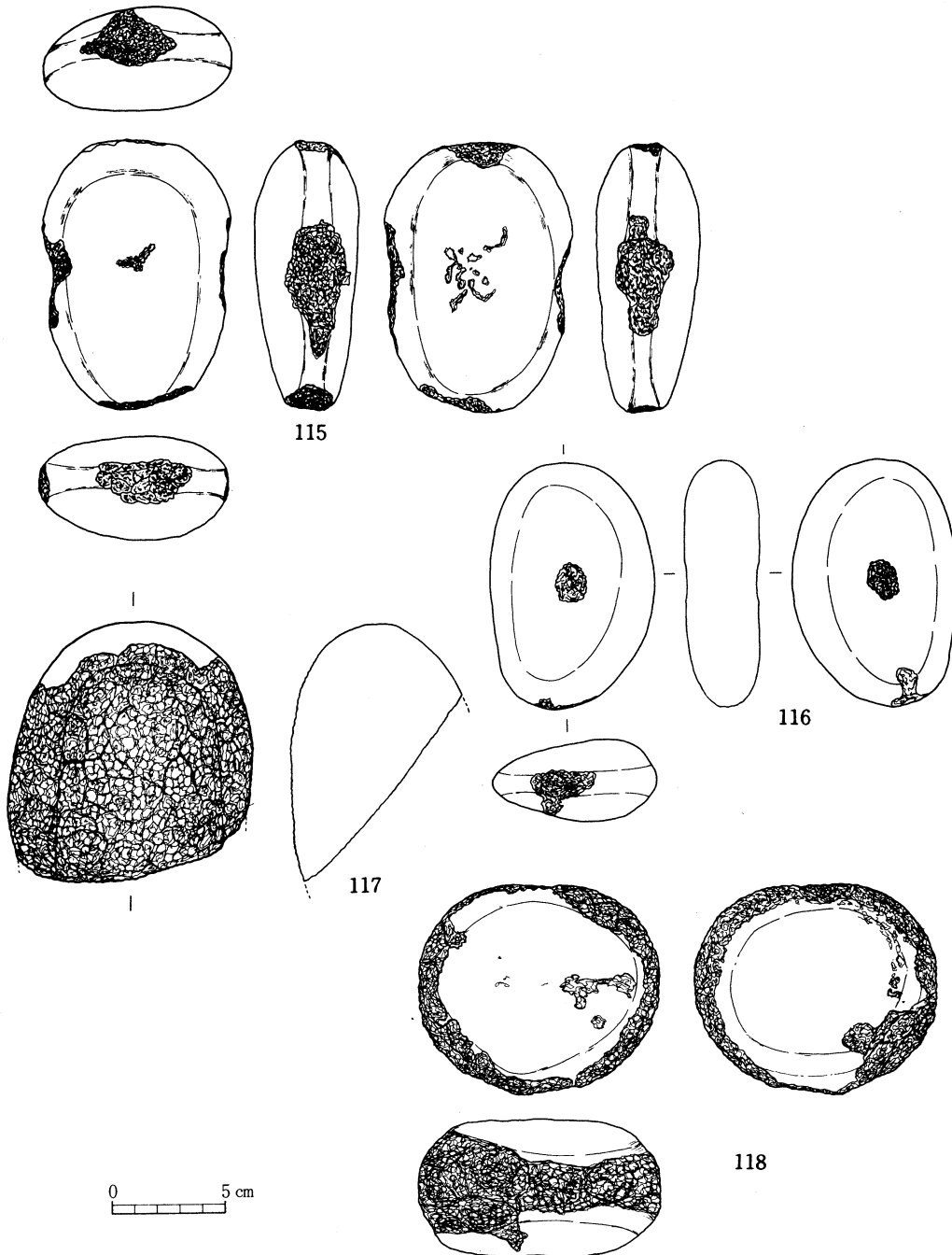
83は厚手の土器破片で、器形は不明である。この土器破片の内外面は、ヘラ状施文具により器面調整が施され、条痕状の痕跡を残している。胎土中には、非常に多くの金雲母を認める。色調、胎土、焼成などから古手の土器であることが考えられる。

第8表 泉川遺跡その他の土器一覧表

番号	出土区	色 調	胎 土	焼成	番号	出土区	色 色	胎 土	焼成
79	D-3	明青灰色	石英・長石	良	98	C-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	粗
80	D-3	灰 色	石英・長石・角閃石	良	99	C-3	暗褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
81	C-2	茶褐色	石英・長石・細砂	良	100	D-2	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
82	D-3	黒褐色	石英・長石・細砂	良	101	D-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	粗
83	E-2	暗褐色	石英・長石・金雲母・細砂	良	102	D-3	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
84	C-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	103	D-2	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
85	D-2	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	104	D-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
86	C-2	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	105	C-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
87	D-2	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	106	C-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
88	D-3	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	107	C-2	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
89	D-3	暗褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	108	D-3	黒褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
90	C-2	明褐色	石英・長石・細砂	良	109	C-2	茶褐色	石英・長石・細砂	良
91	D-2	暗茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	粗	110	C-4	黒褐色	石英・長石・細砂	良
92	D-2	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	111	C-3	茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
93	D-3	明褐色	石英・長石・細砂	良	112	D-4	茶褐色	石英長石・細砂	良
94	C-2	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	113	D-3	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
95	D-3	明茶褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良	114	D-3	明褐色	石英・長石・角閃石・細砂	良
96	C-2	明茶褐色	石英・長石・細砂	良					
97	C-3	暗褐色	石英・長石・細砂	良					

第2節 石器 (115~119)

本遺跡出土の石器には、叩石4と石皿があり、砂岩と花崗岩を素材に用いている。叩石の中には、磨石から転用したと思われるものや、敲打により大きく凹部を作り出すものもある。



第13図 泉川遺跡石器実測図(1) 叩石

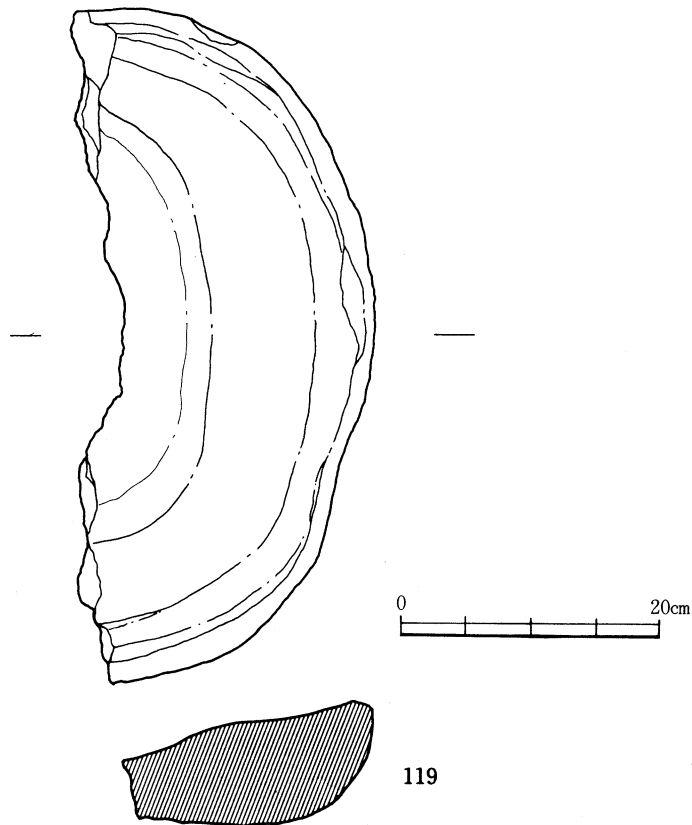
115は砂岩製の叩石で、C-4区に出土し、全長11.8cm、最大幅8.4cm、厚さ4.6cm、重さ625gを計る。両端面及び両側面とに使用痕として敲打による敲打痕を認め、特に両側面は大きく凹部を作り、両面にも敲打痕を認めるが、あまり使用されていない。

116は砂岩製の叩石で、C-2区に出土し、全長10.9cm、最大幅7.2cm、厚さ3.5cm、重さ435gを計る。下端には使用痕として敲打による敲打痕を認め、両面にも敲打痕を認め、浅い凹部を作り出している。

117は砂岩製の叩石で、C-3区に出土し、現存全長11.5cm、現存最大幅10.8cm、現存の厚さ7.6cm、現存の重さ1,500gを計り、欠損品である。器面のほとんどに使用痕として敲打による敲打痕を認める。

118は花崗岩製の叩石で、C-3区に出土し、全長10.5cm、最大幅8.3cm、厚さ4.6cm、重さ925gを計る。両面には研磨を認め、側面の全周には使用痕として敲打による敲打痕を顕著に残し、磨石をして使用后叩石としての機能が考えられる。

119は砂岩製の大型の石皿で、C-4区に出土し、現存全長51.7cm、現存最大幅23.2cm、現存の厚さ9.7cm、現存の重さ12,000gを計り、約半分は欠損しているが、全体の形態については堆定できる。石皿の上面は使用により大きい窪みを認め、下面は無脚が考えられる。



第14図 泉川遺跡石器実測図(2) 石皿

### 第3節 貝製品 (12～206)

本遺跡から出土の貝類は、109種が数えられ、その内訳は海産貝としての巻貝（腹足類）、頭足類・二枚貝や陸産貝および淡水産貝としての巻貝・二枚貝とに大別される。そのほとんどが海産貝で104種を数え、陸産貝2種、淡水産貝3種で構成されている。

本遺跡では、86点の貝製品を認めたが、中には製品か自然のものか余儀なくされたものもあった。<sup>注1</sup>

#### 1. 貝小玉 (120～121)

この貝製品は2点出土している。ともにマガキガイの殻頂を利用し、**120**は2.8×2.2cm, 10.9g **121**は1.9×1.8cm, 10.2g を計り、円孔は研磨して穿孔したもので、ほぼ円形を呈している。ただ、これらの貝製品は現在でも海岸で知見され、判断を余儀なくされたひとつであり、特に**121**は疑問の残る製品である。

#### 2. 円孔貝製品 (122～124)

この貝製品は3点出土している。ともにヤコウガイの体部の一部を切断し、中央付近に円形状の孔をあけたもので、内面には真珠層を認めた。**122**は4.1×3.3cm, 4g' を計り、楕形をしたヤコウガイの体層部に径1.2×1.1cmの円孔を右側中央付近に施し、外皮を剥ぎ真珠層が露呈している。**123**は5.2×4.0cm, 24g' を計り、隅丸形状のヤコウガイの体層部に径1.6×1.6の円孔を中央部よりやや上位に施している。**124**は7.5×5.2cm, 44g' を測り、略円形状をしたヤコウガイの体層部に径3.1×1.1cmの円孔を中央部よりやや上位に施している。これらの製品の側縁部は研磨調整が施されている。

#### 3. 有孔貝 (125～128)

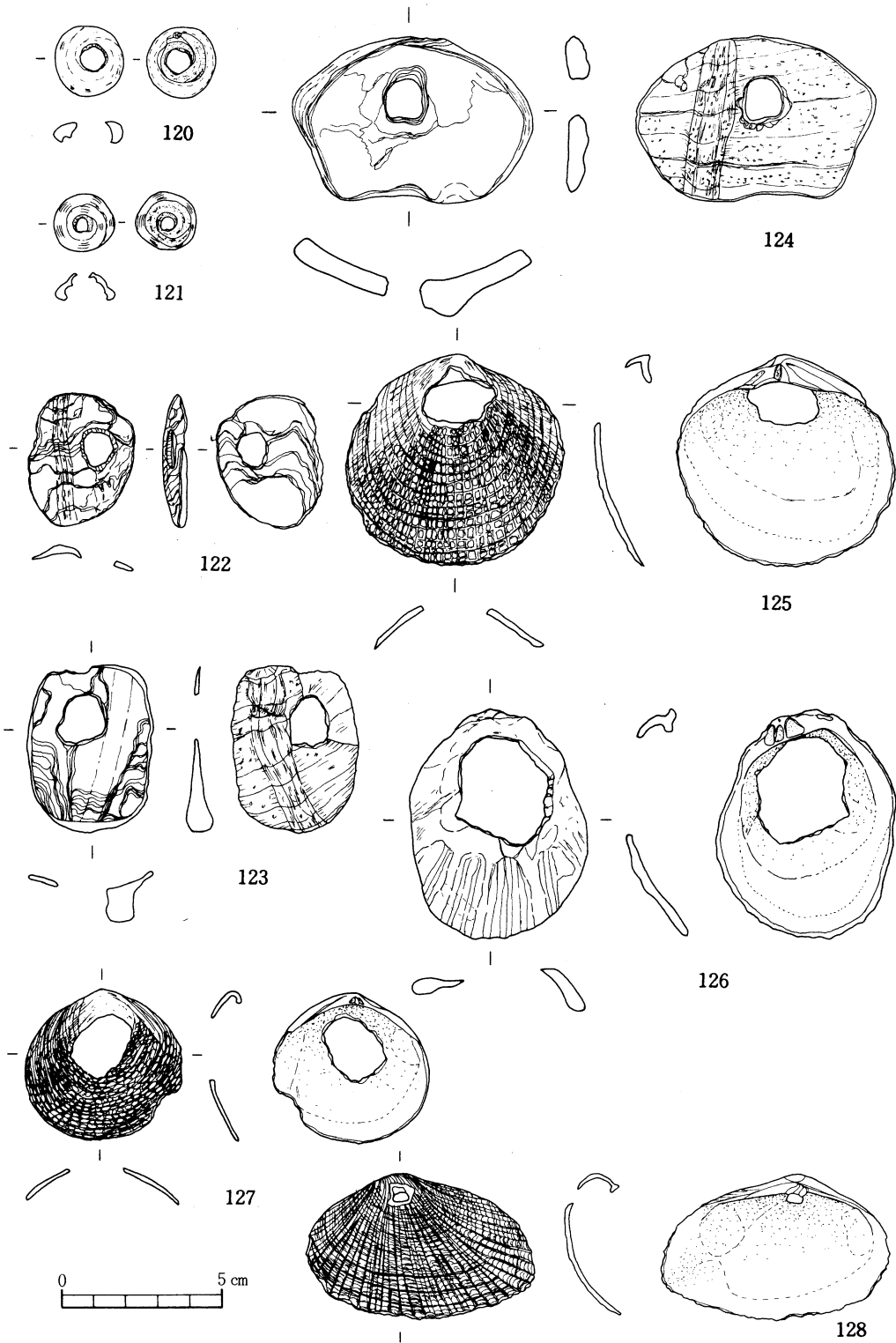
この貝製品は4点出土している。これらの貝製品には打欠いたまま放置されたものか、研磨痕を認めないものが多いが製作途中のものと考え、ここでは有孔貝の範疇に入れた。他に自然に剝離しているものも多く、本製品は特徴的なものをあげた。**125**は6.8×5.5cm, 19g' の大きさのツキガイで、殻頂近くに2.4×1.7cmの粗孔を有するものである。**126**は7.1×5.4cm, 30g' の大きさのミヒカリメンガイで、殻頂近くから中央付近にかけて3.9×2.9cmの大きい粗孔を有するもので、一部に磨滅を認める。**127**は4.9×4.4cm, 6g' の大きさのサメザラで、殻頂付近から中央付近にかけて2.0×1.9cmの粗孔を有するものである。**128**は7.0×4.6cm, 14g' の大きさのリュウキウマスオで、殻頂付近に0.7×0.5cmの小さい粗孔を有するものである。これらの貝製品の円孔は、打欠いたまま放置され、他に加工痕を認めないため、製作途中のものが考えられる。

#### 4. 貝製利器

##### 螺蓋製貝斧 (129～172)

この貝製品は、貝斧・貝刀・蓋刃・蓋斧・蓋製貝斧・螺蓋製貝斧、螺蓋利器などの名称で呼ばれているものである。<sup>注1</sup>

この種の利器には、蓋の薄い周縁部に一面から付刃し刃部を利器とする考え方や無欠損の螺<sup>注2</sup>



第15図 泉川遺跡貝製品実測図(1) 貝小玉, 円孔貝製品, 有孔貝

蓋そのものの薄い周縁部を利用し、敲打することにより付刃状の痕跡が生じるとの考え方が提唱<sup>注3</sup>されている。

本遺跡では、44個の製品が出土し、螺蓋の剝離の個所によりⅠ類からⅤ類に分類した。Ⅰ類は左側縁が剝がれ欠損したもので、129～137があり、その大半が剝がれ欠損している。138は左側縁が剝がれ欠損し、一部が欠落しているが、Ⅰ類に含めた。129・131・135・137は小さい剝離で、130・132・134・136は剝離が長幅となっている。Ⅱ類は左側縁と右側縁の二方が剝がれ欠損しているもので、139～145がある。139・140は、右側縁の表面のみの剝離を認め、139の左側縁のように剝離の大きいものもある。141・143・144は両側縁の剝離の短かいもので、145は下側縁にまで及ぶものもあり、ここではⅡ類に含めた。Ⅲ類は左側縁か右側縁のどちらかと下側縁の二方が剝がれ欠損しているもので146～150がある。146は右側縁と下側縁に剝離があるもので、147～150は左側縁と下側縁に剝離を認める。148は下側縁から右側縁に及ぶものもあり、148・149のように、かなりの敲打による剝離が考えられる。150は欠損品であるがⅢ類に含めた。Ⅳ類は下側縁が剝がれ欠損しているもので、151～170がある。151は右側縁より下側縁に、152は左側縁寄りに、わずかな剝離を認める。160は右側縁寄りにわずかな剝離をもつものである。158・165は小形の蓋を利用したものもある。156・158・163は左側にまで及ぶもので、154・159・161・162・164・166は右側縁にまで及び、166・170は左右側縁まで及ぶものも認める。この類のものが過半数を示めている。Ⅴ類は左側縁・下側縁・右側縁の三方が剝がれ欠損しているもので、171と172がある。172は各部位とも短幅の剝離を残している。

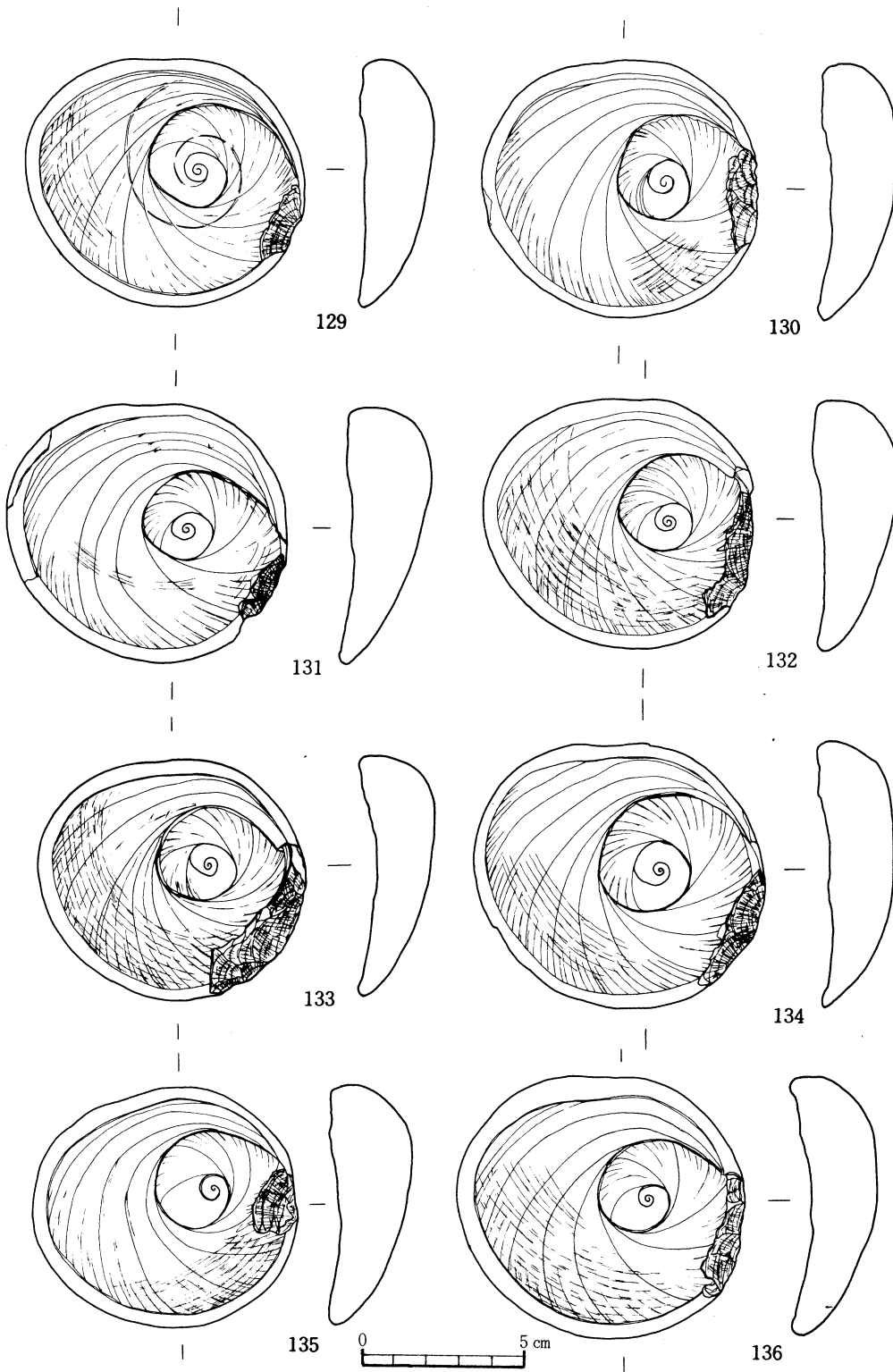
これらの製品の大きいものは、長幅8.4cm、短幅7.6cm、厚さ2.8cm、重さ185g'の平均値を計る。最大のもは、長幅9.7cm、短幅8.9cm、厚さ2.5cm、重さ265g'を計り、小形のもは2個で、最小のもは、長幅6.2cm、短幅5.5cm、厚さ1.5cm重さ70g'を計る。

刃物の位置は、最厚部を避けているものが全てで、より近い位置まで及ぶものもみられ、Ⅴ類のように三か所に剝離をもつものも認められた。

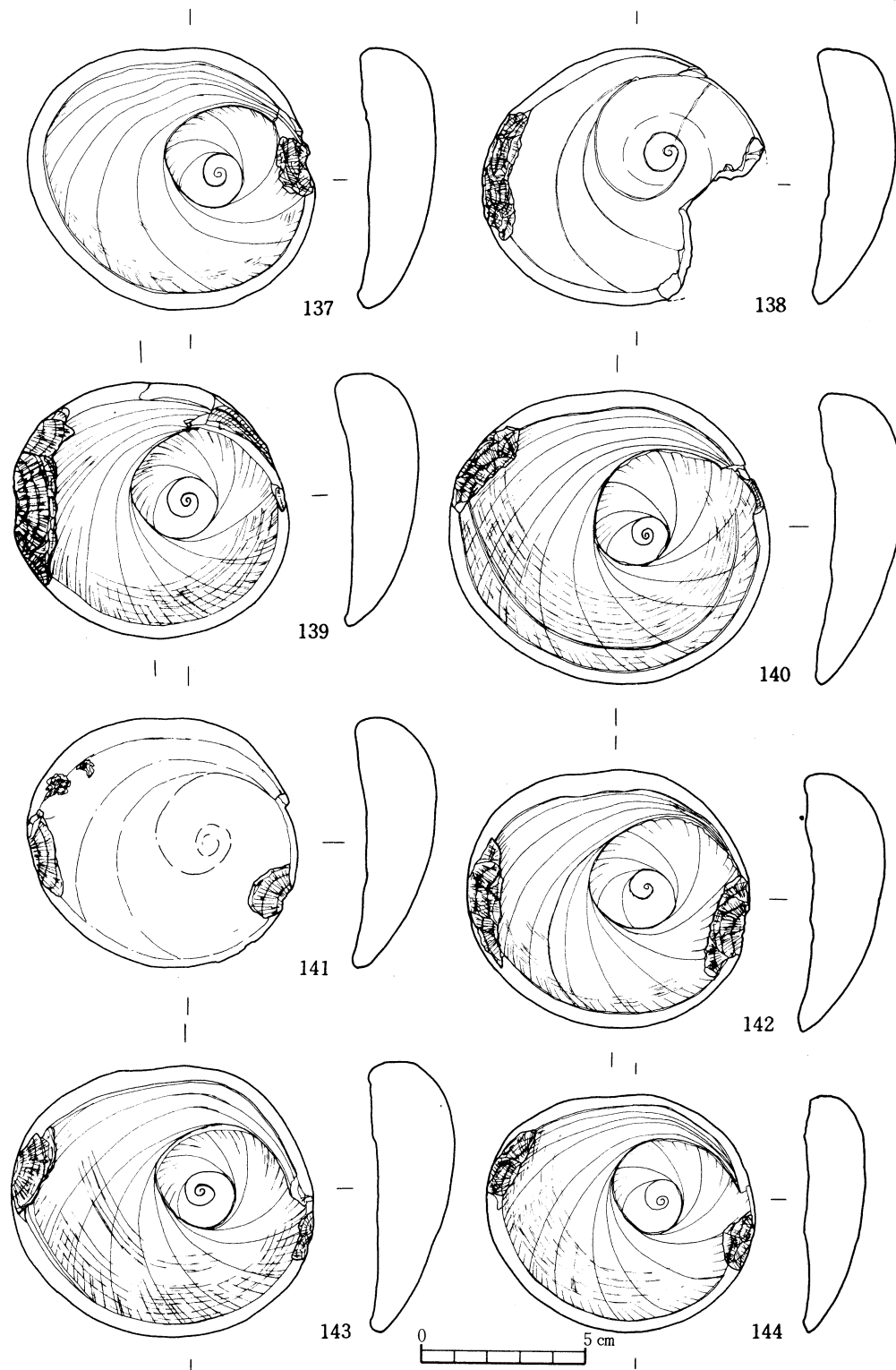
第9表 泉川遺跡螺蓋製貝斧一覧表 左：左側縁 右：右側縁 下：下側縁

類	番号	出土区	大きさ cm	厚さ cm	重量 g'	欠損部分	類	番号	出土区	大きさ cm	厚さ cm	重量 g'	欠損部分
Ⅰ	129	C-3	8.5×7.6	2.4	187	右	Ⅱ	138	C-3	8.6×7.8	2.3	148	右破損・右
Ⅰ	130	C-3	8.5×7.8	2.2	195	右	Ⅱ	139	D-2	8.4×7.5	2.4	187	左・右
Ⅰ	131	C-2	8.4×7.9	2.6	198	右	Ⅱ	140	D-2	9.7×8.9	2.5	265	左・右
Ⅰ	132	D-3	8.2×7.5	2.7	165	右	Ⅱ	141	D-3	8.1×7.6	2.5	177	左・右
Ⅰ	133	C-3	8.2×7.3	2.3	165	右やや下	Ⅱ	142	D-3	8.6×7.8	2.4	198	左・右
Ⅰ	134	D-3	8.8×8.1	2.2	218	右	Ⅱ	143	D-3	9.1×8.3	2.7	231	左・右
Ⅰ	135	C-3	8.0×7.2	2.5	175	右	Ⅱ	144	D-3	8.1×7.2	1.9	151	左・右
Ⅰ	136	C-2	8.8×7.9	2.7	113	右	Ⅱ	145	C-3	9.5×8.4	2.6	221	左・右から右下
Ⅰ	137	C-3	8.7×7.8	2.2	215	右	Ⅲ	146	D-3	8.5×7.5	2.3	185	右・下右寄り

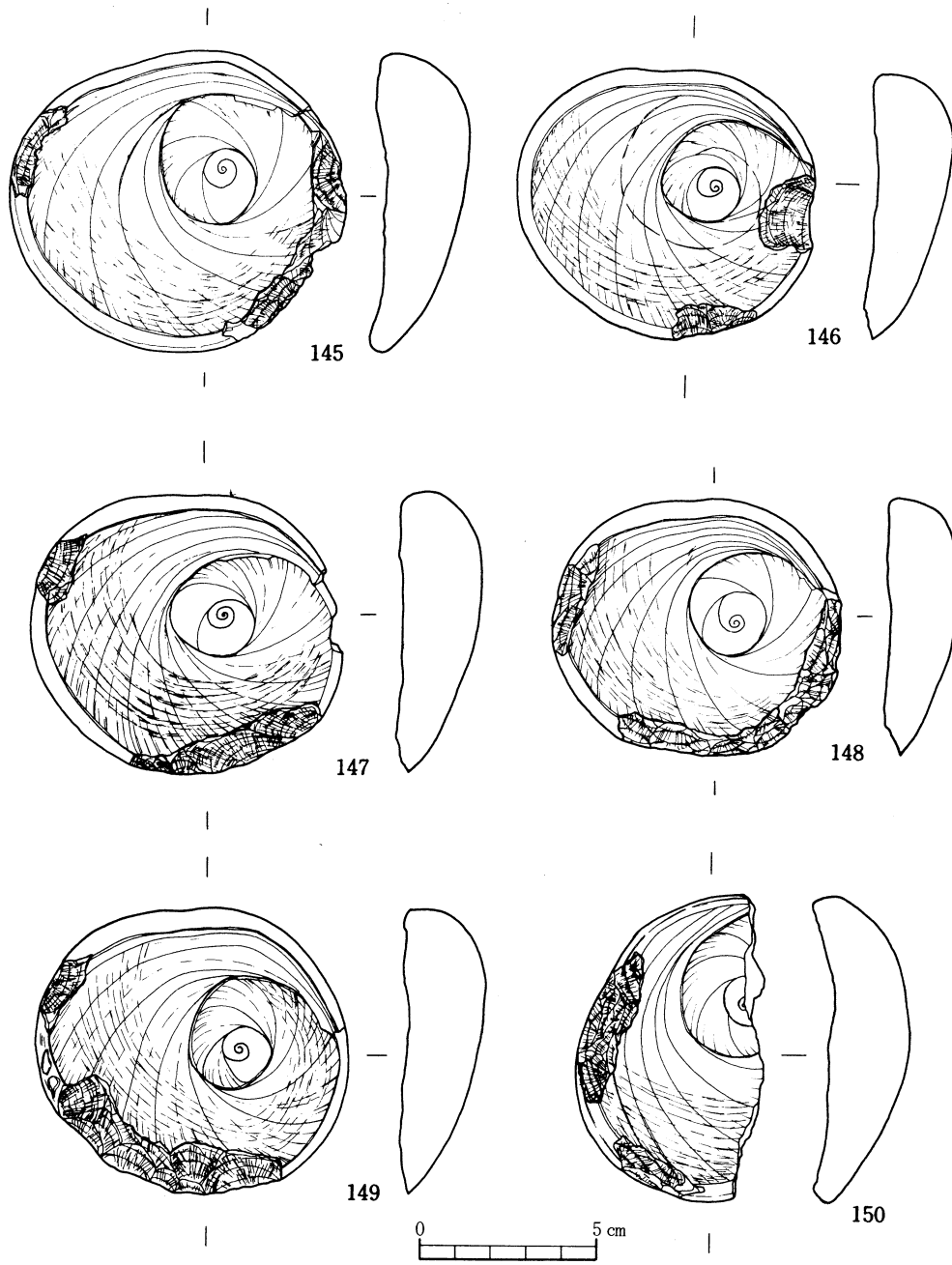




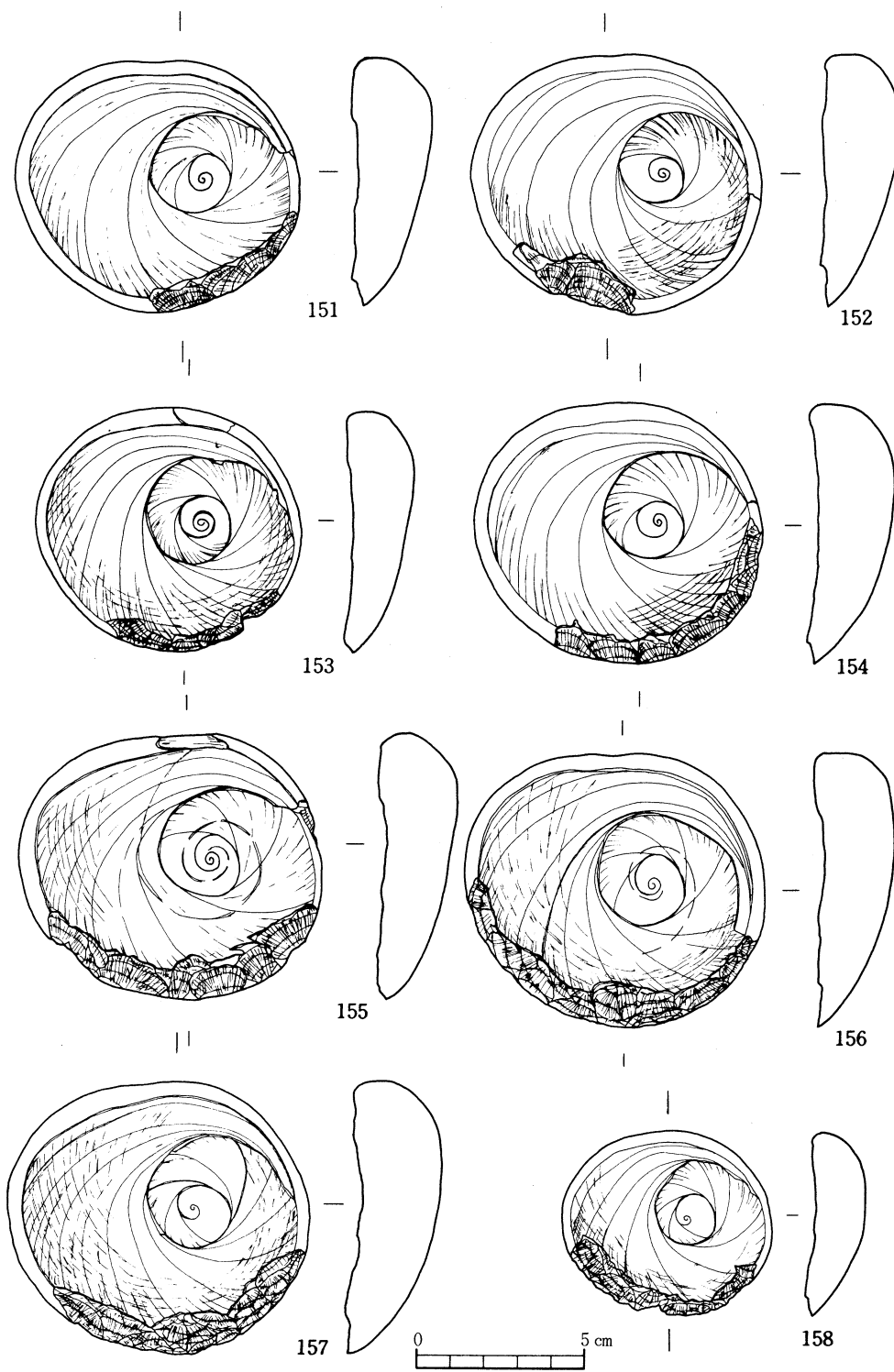
第16図 泉川遺跡貝製品実測図(2) 貝製利器 I



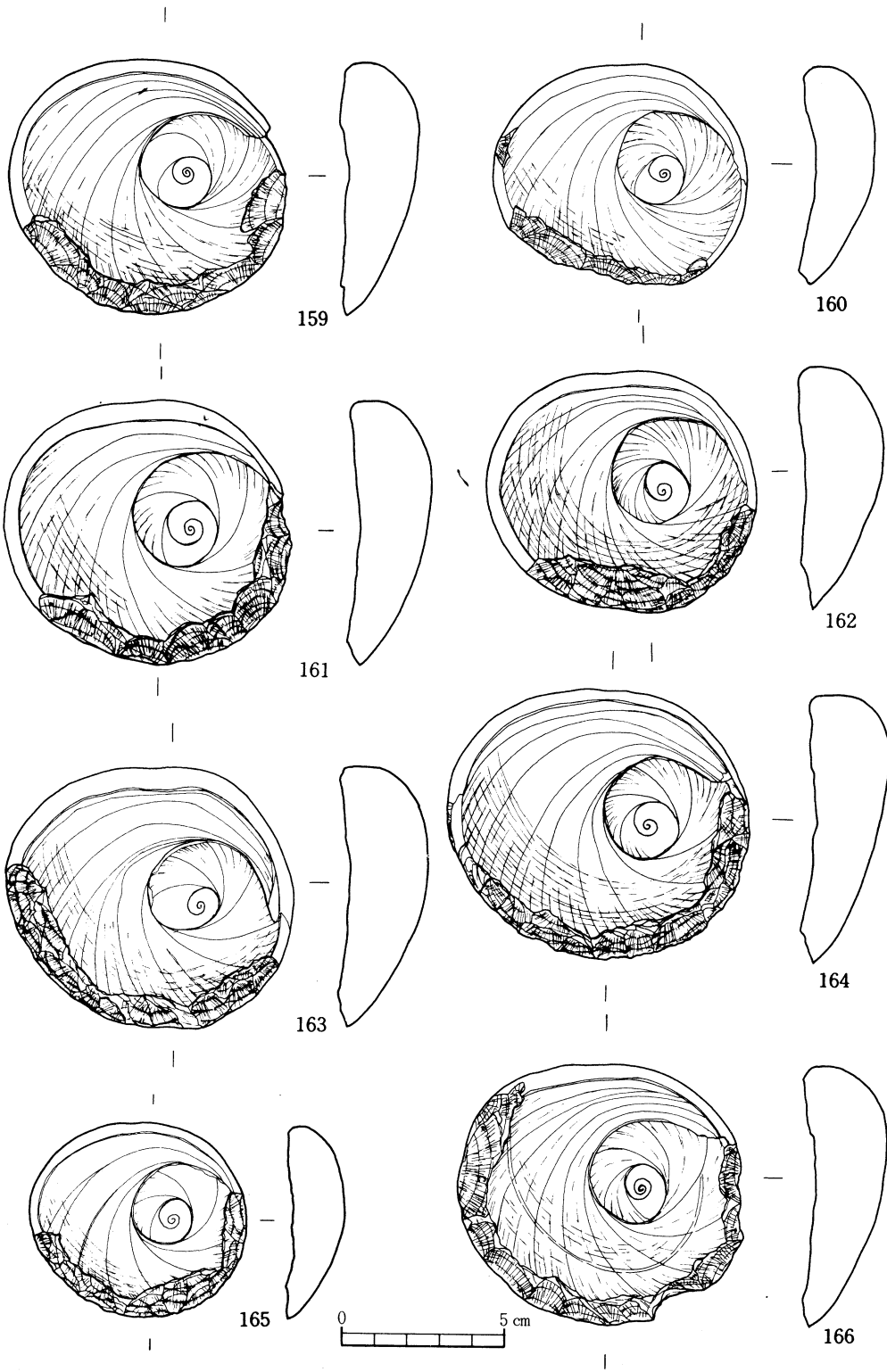
第17図 泉川遺跡貝製品実測図(3) 貝製利器Ⅱ



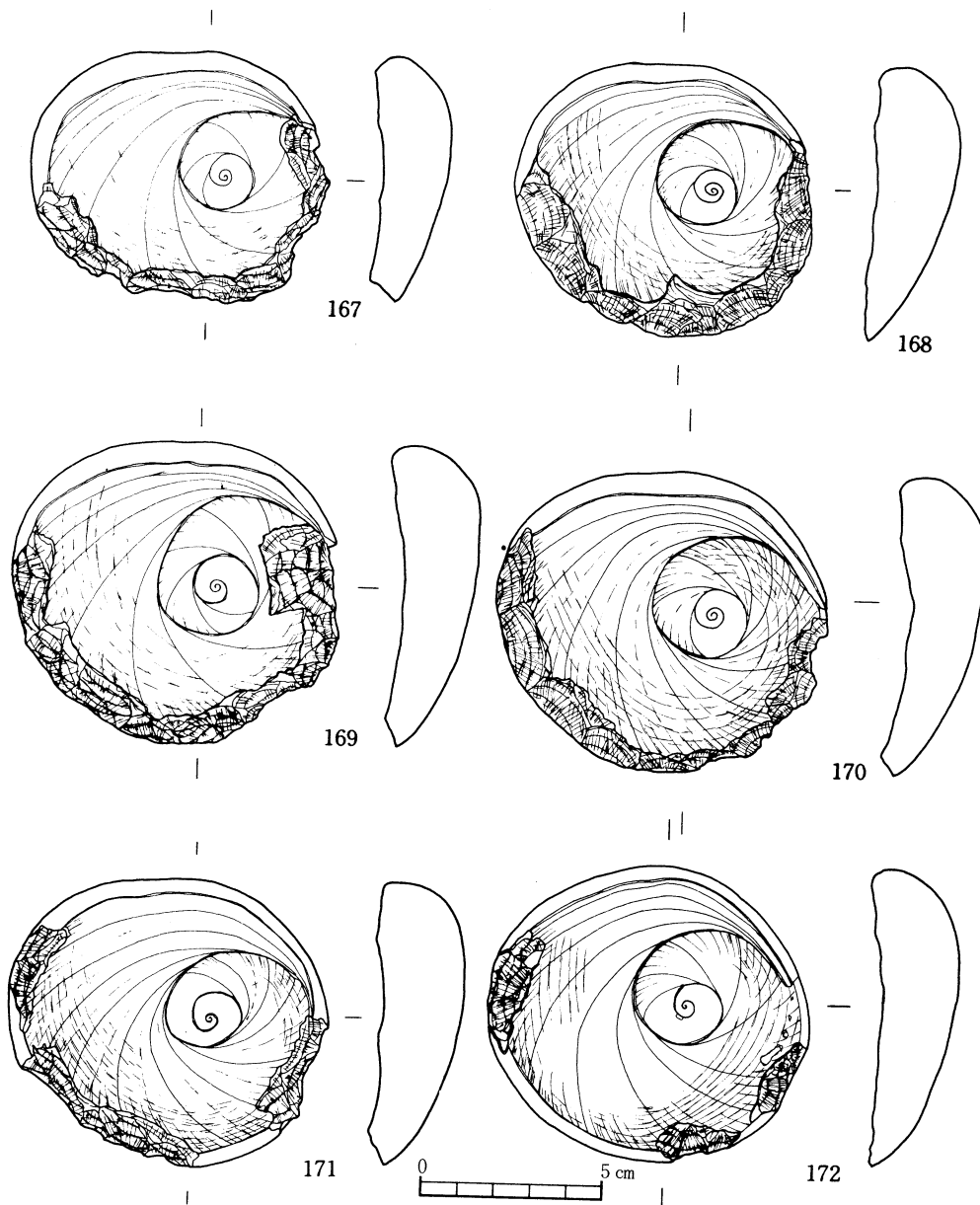
第18図 泉川遺跡貝製品実測図(4) 貝製利器Ⅲ



第19図 泉川遺跡貝製品実測図(5) 貝製利器Ⅳ



第20図 泉川遺跡貝製品実測図(6) 貝製利器V



第21図 泉川遺跡貝製品実測図(7) 貝製利器Ⅵ

類	番号	出土区	大きさ cm	厚さ cm	重量 g	欠損部分	類	番号	出土区	大きさ cm	厚さ cm	重量 g	欠損部分
Ⅲ	147	C-3	8.6×7.7	2.4	205	左・下(右寄り)	Ⅳ	160	D-3	7.7×6.7	2.2	130	下
Ⅲ	148	D-3	8.1×7.2	2.0	155	左・右から下	Ⅳ	161	C-3	8.1×8.1	2.4	198	下から右
Ⅲ	149	D-3	8.3×8.0	2.4	199	左上・下	Ⅳ	162	D-2	8.1×7.4	2.4	195	下から右下
Ⅲ	150	C-3	(5.4)×8.6	2.3	138	右半分・左上・左下	Ⅳ	163	D-3	8.9×7.8	2.7	224	左から右下
Ⅳ	151	E-3	8.5×7.8	2.5	177	下(やや右より)	Ⅳ	164	E-3	9.3×8.2	2.5	230	左下から右
Ⅳ	152	D-2	8.6×7.4	2.4	190	下(やや左寄り)	Ⅳ	165	F-2	6.6×5.8	1.7	84	左から右
Ⅳ	153	D-1	7.8×7.2	2.0	143	下から右下	Ⅳ	166	D-3	8.7×7.6	2.6	188	左上から右
Ⅳ	154	C-3	8.6×7.6	2.5	240	下から右	Ⅳ	167	D-3	8.3×6.7	2.1	160	左から右
Ⅳ	155	D-3	9.0×7.8	2.5	218	左下から右下	Ⅳ	168	B-2	8.0×7.5	2.3	160	左から右
Ⅳ	156	D-2	8.9×8.1	2.2	220	左下から右下	Ⅳ	169	D-3	8.8×8.4	2.6	220	左から右
Ⅳ	157	C-2	8.6×8.1	2.4	218	左下から右下	Ⅳ	170	D-3	9.2×8.3	2.4	215	左から右
Ⅳ	158	D-3	6.2×5.5	1.5	70	左下から右下	Ⅴ	171	C-2	8.9×7.8	2.6	215	左・左下から下・右
Ⅳ	159	D-3	8.5×7.7	2.4	165	左下から右	Ⅴ	172	C-2	8.7×8.2	2.4	220	左・下・右やや下

その他の利器

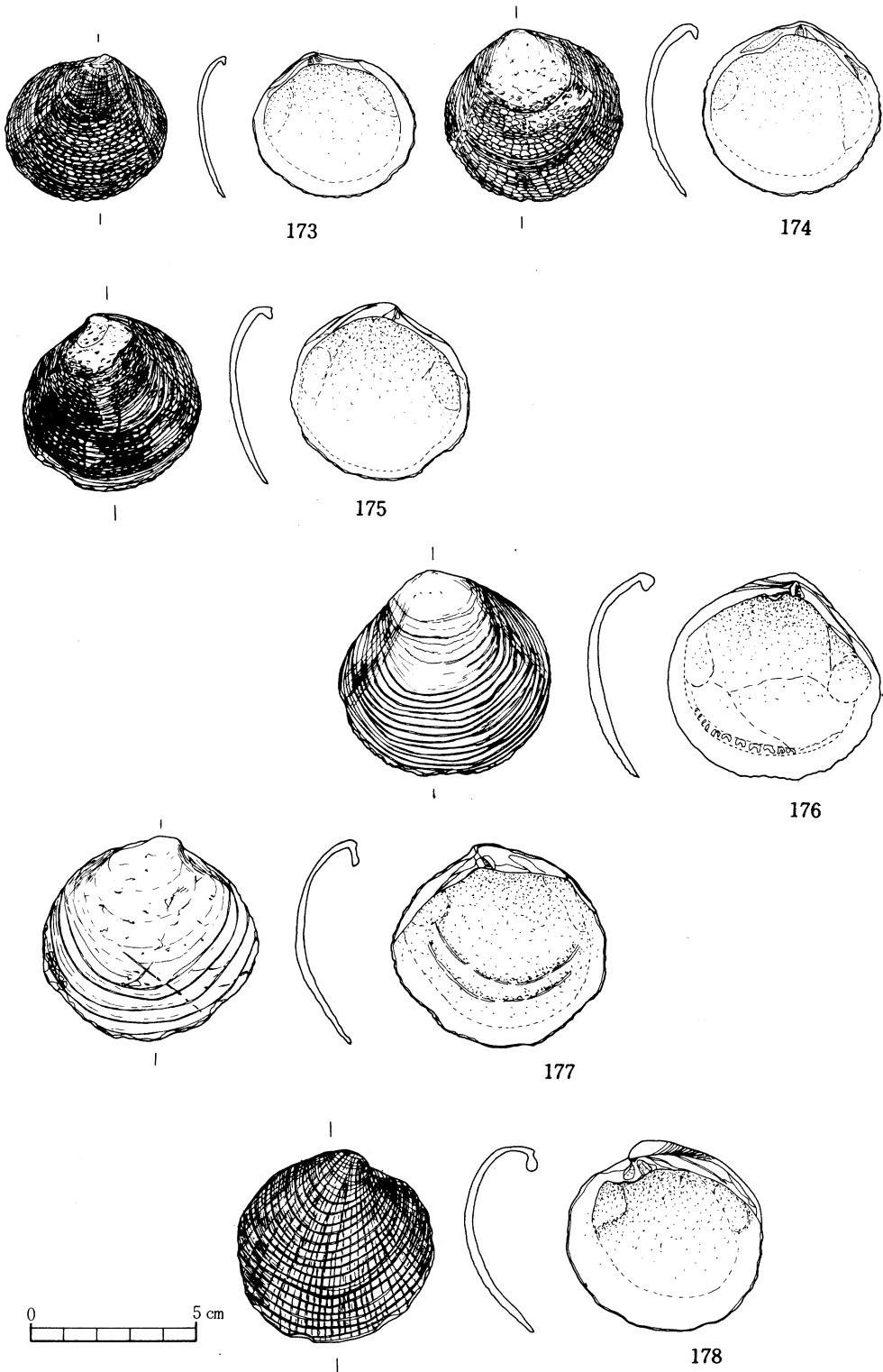
この貝製品は、使用することにより刃部が形成されたものか、自然に形成されたものか判断に苦慮するものである。この種の二枚貝の製品が多く出土したため、その一部を図化した。今後検討を要する資料と考える。貝の種類は、サメザラ3、モチヅキザラ1、ツキガイ4、ヌノメガイ1の内訳である。173~181は、二枚貝の腹縁部の外面より刃物状の痕跡を認めるものや粗く打ち欠いだようなものも認める。粗く打ち欠いだあと細部調整痕を施した貝刃とは認めがたいものである。

第10表 泉川遺跡その他の利器一覧表

番号	出土区	大きさ cm	厚み cm	重量 g	貝の種類	番号	出土区	大きさ cm	厚み cm	重量 g	貝の種類
173	C-2	4.9×4.3	0.2	7	サメザラ	178	C-2	6.0×5.7	0.3	30	ヌノメガイ
174	D-1	5.4×5.2	0.6	11	サメザラ	179	D-3	7.8×7.2	0.4	39	ツキガイ
175	D-1	5.4×5.4	0.3	15	サメザラ	180	D-3	7.6×7.0	0.4	29	ツキガイ
176	D-1	6.4×6.2	0.5	37	モチヅキザラ	181	D-3	9.8×9.6	0.5	99	ツキガイ
177	D-3	6.5×6.2	0.3	24	ツキガイ						

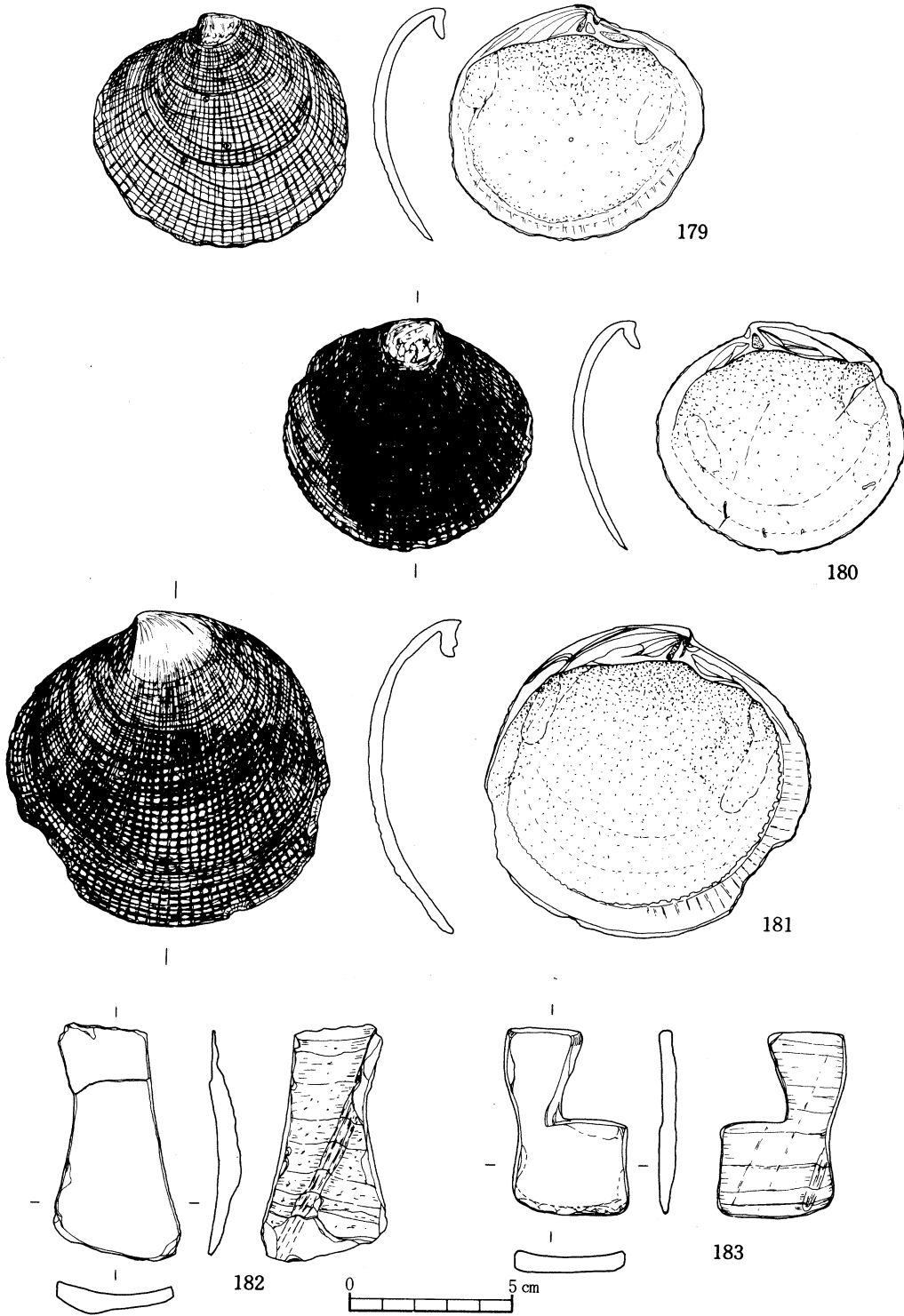
5. 貝 匙 (ヤコウガイ製品)

この製品は、ヤコウガイ製品で匙の形態を呈しているもので、185と187がある。ともに柄部は欠損し、器部だけである。185は最大身6.7cm、最大幅5.2cm、深さ1.7cm、厚味0.2cm、重量17gを計り、外面は外皮や結節部は剥ぎとり、内面には真珠層の露呈が認められる。187は最大身6.7cm、最大幅4.3cm、深さ0.7cm、厚味0.9cm、重量を計り、外面には外皮及び結節部を一部に残し、一部及び内面には真珠層の露呈を認める。これらの製品の他に貝匙でなく柄部状のものをもち用途不明なものに183があげられる。最大身5.6cm、最大幅4.0cm、厚み0.6cm、重量



第22図 泉川遺跡貝製品実測図(8) 貝製利器Ⅶ





第23図 泉川遺跡貝製品実測図(9) 貝製利器Ⅷ, 貝匙, 貝製容器Ⅰ

12.5g'を計り、下部はヤコウガイの口縁を利用して細くなり、内面には真珠層が露呈し、外面には外皮を残し、側縁はすべて研磨を受けている。

6. 貝製容器（貝匙）

この製品は、ヤコウガイの殻の一部を素材として、曲部を中心に敲打整形し作り出したもので、貝匙の名称で呼ばれていたものである。最近では、貝容器、貝製容器などの名称が与えられており、食器としての用途が考えられている。

本遺跡では、貝殻の中に大小のヤコウガイが数多く出土した。これらの製品は、ヤコウガイの体層部の曲部を中心に敲打整形して作るため、その残存部の体部や体層部の残骸も多くみられ、中には製作途中と思われる痕跡をもつものもある。198はヤコウガイの口縁部まで利用したもので他の製品は、ヤコウガイの口縁部を含まない体層部のみを利用している。189・190・192・195・197・203は完形に近いが、側縁の一部が欠損しているものもみられ、192・203は側縁に切り取った状態のままの痕跡を一部に認める。184・188・191・194・196・199・201は両端が欠損したもので、その後磨滅を受け、188・196・201は切り取った状態のままの痕跡を一部にとどめているが、狭い範囲のものが多い。193・194・200は下端面が欠損したものである。182・186・188・205については貝容器使用後の転用が考えられるものである。

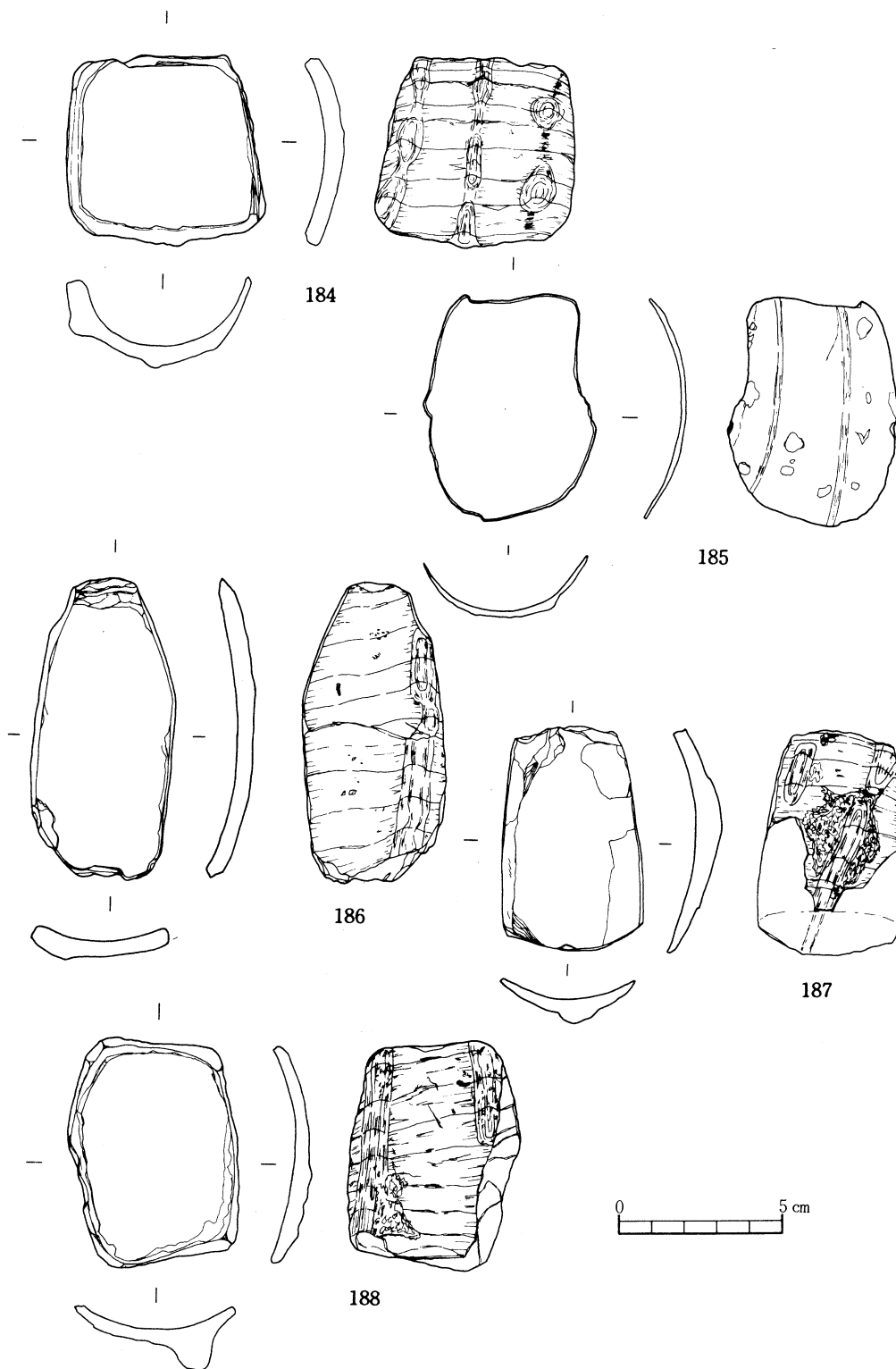
第11表 泉川遺跡貝製容器一覧表 ※ 厚味は平均値

番号	出土区	最大身・最大幅 cm	深さ cm	厚味 cm	厚量 g'	番号	出土区	最大身・最大幅 cm	深さ cm	厚味 cm	重量 g'
182	D-1	6.8×3.9	0.4	0.7	22.5	196	C-3	10.6×8.4	1.5	0.6	64
184	D-3	5.7×6.1	2.1	0.6	44	197	C-3	11.0×8.2	2.6	0.7	126
186	C-2	9.0×4.5	1.0	0.6	42	198	D-3	8.8×10.0	2.6	0.7	125
188	C-3	6.6×5.2	0.7	0.6	51	199	C-3	6.1×7.9	2.6	0.4	64
189	C-3	10.4×8.0	2.6	0.9	93	200	D-3	8.0×8.6	2.6	0.6	74
190	C-3	12.2×8.8	3.6	0.7	163	201	C-3	10.0×8.9	2.7	0.4	44
191	E-3	5.0×7.8	1.6	0.6	43	202	C-3	10.9×7.1	1.5	0.8	67
192	C-3	9.3×8.5	2.5	0.9	110	203	D-3	6.5×6.8	2.4	0.6	104
193	C-3	6.7-6.1	2.3	0.8	50	204	C-3	8.4×7.8	2.1	1.1	81
194	D-2	7.9×8.6	2.4	1.0	66	205	D-3	9.6×6.3	1.0	0.7	44
195	C-3	7.5×7.1	2.3	0.6	114	206	D-3	8.4×7.3	1.2	0.5	74

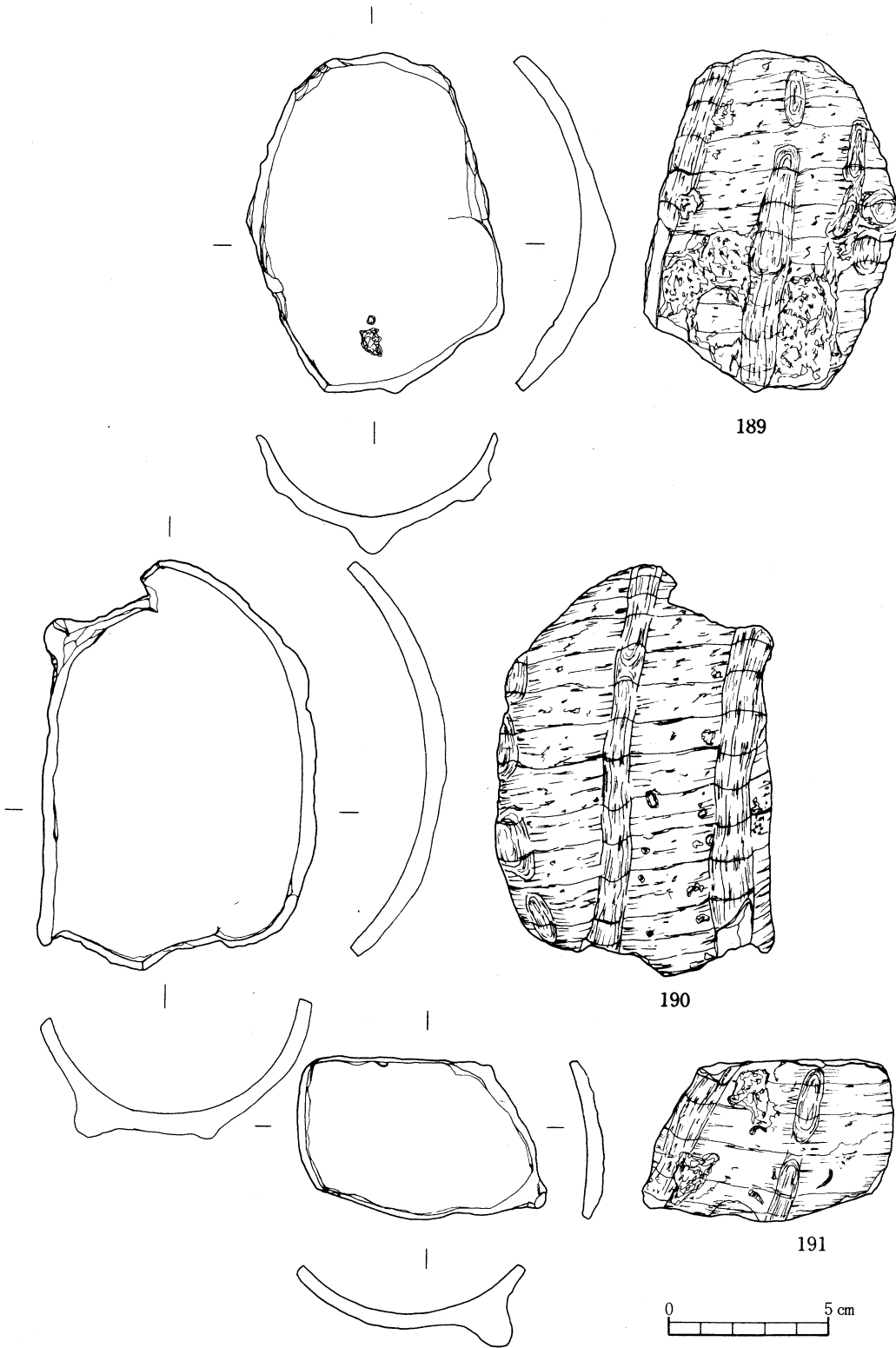
注1. 行田義三「泉川遺跡出土貝類について」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(39)1986. 3所収

注2. 三島 格「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』1982

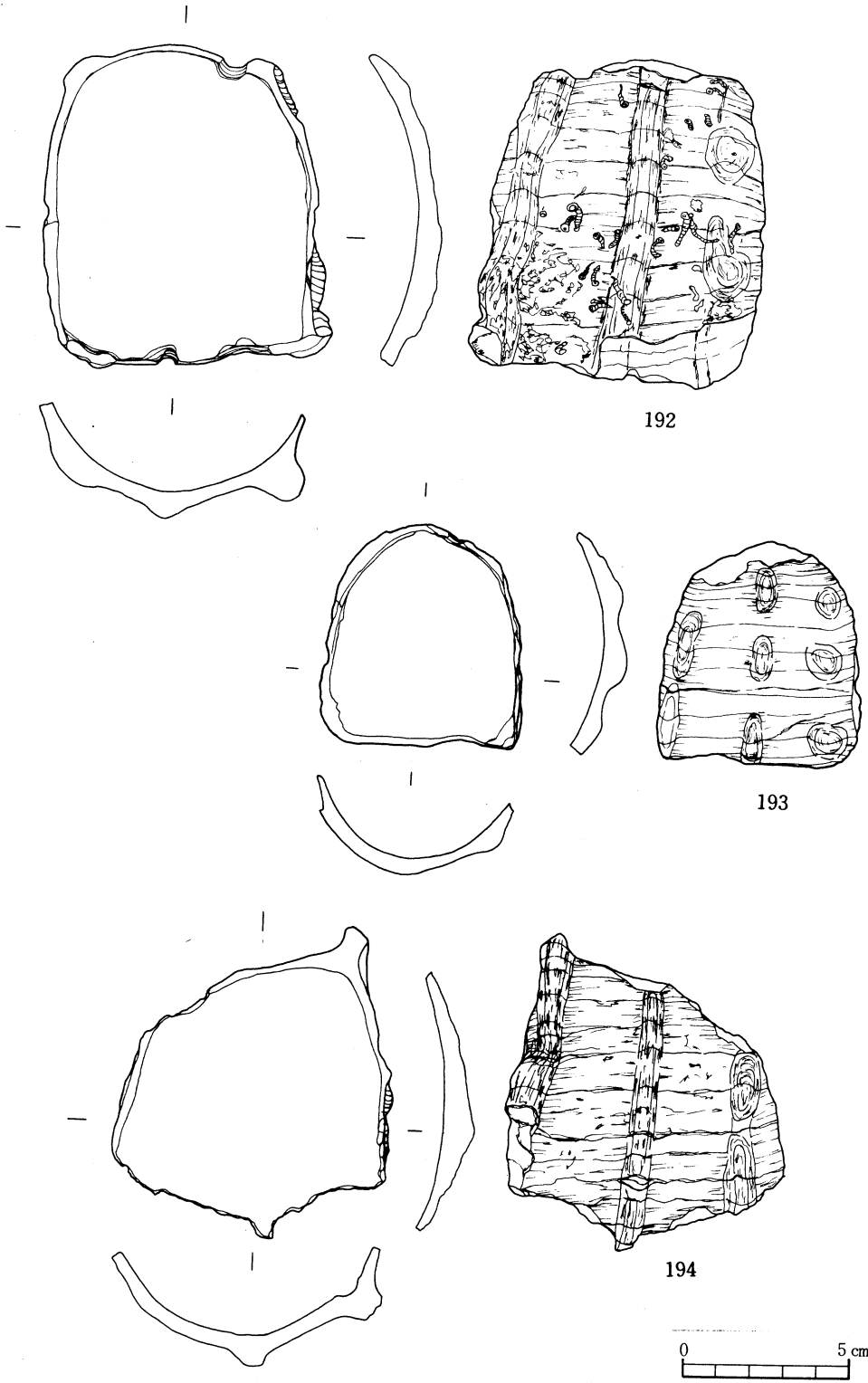
注3. 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)1985. 3



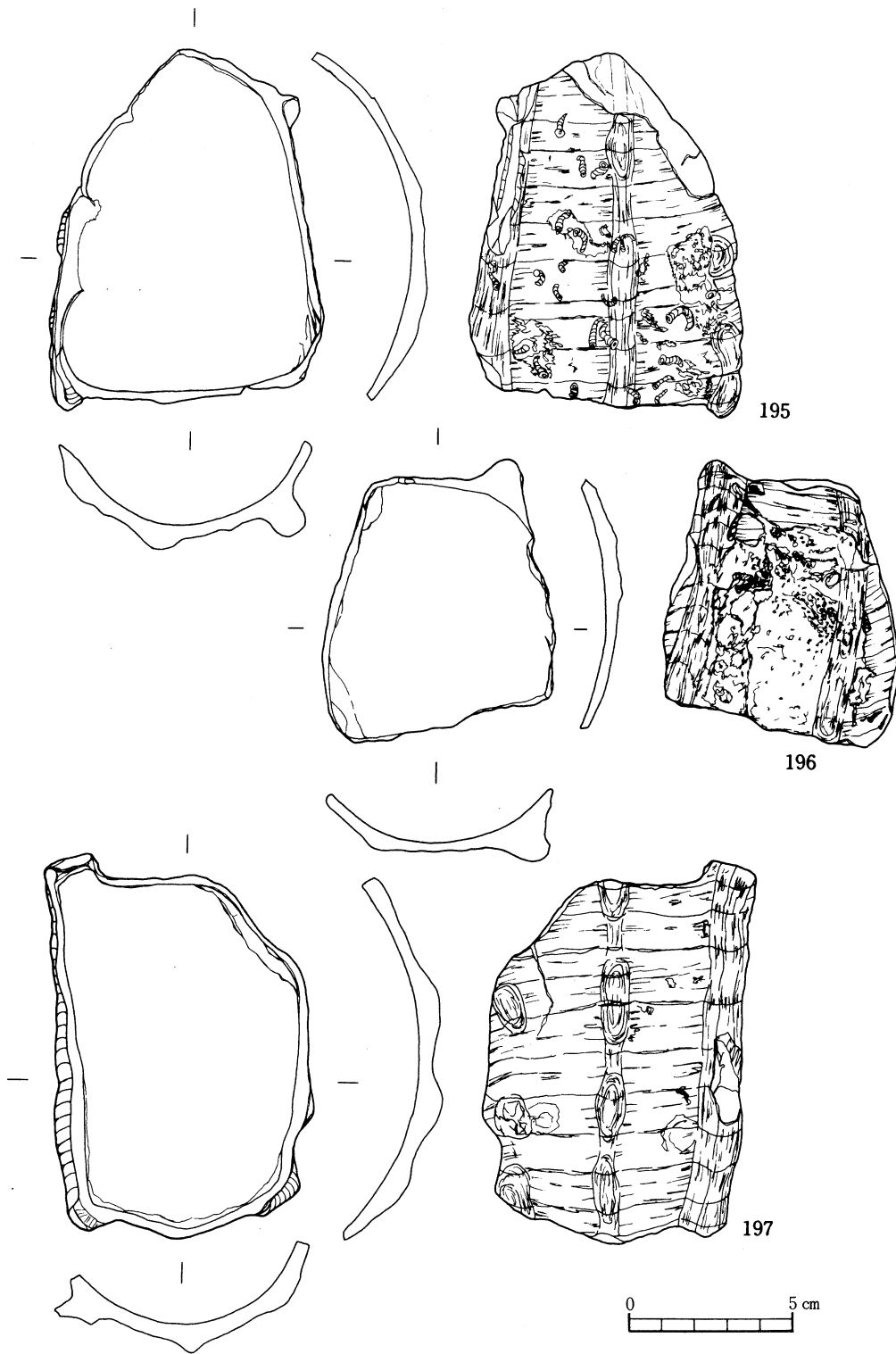
第24図 泉川遺跡貝製品実測図(10) 貝製容器Ⅱ



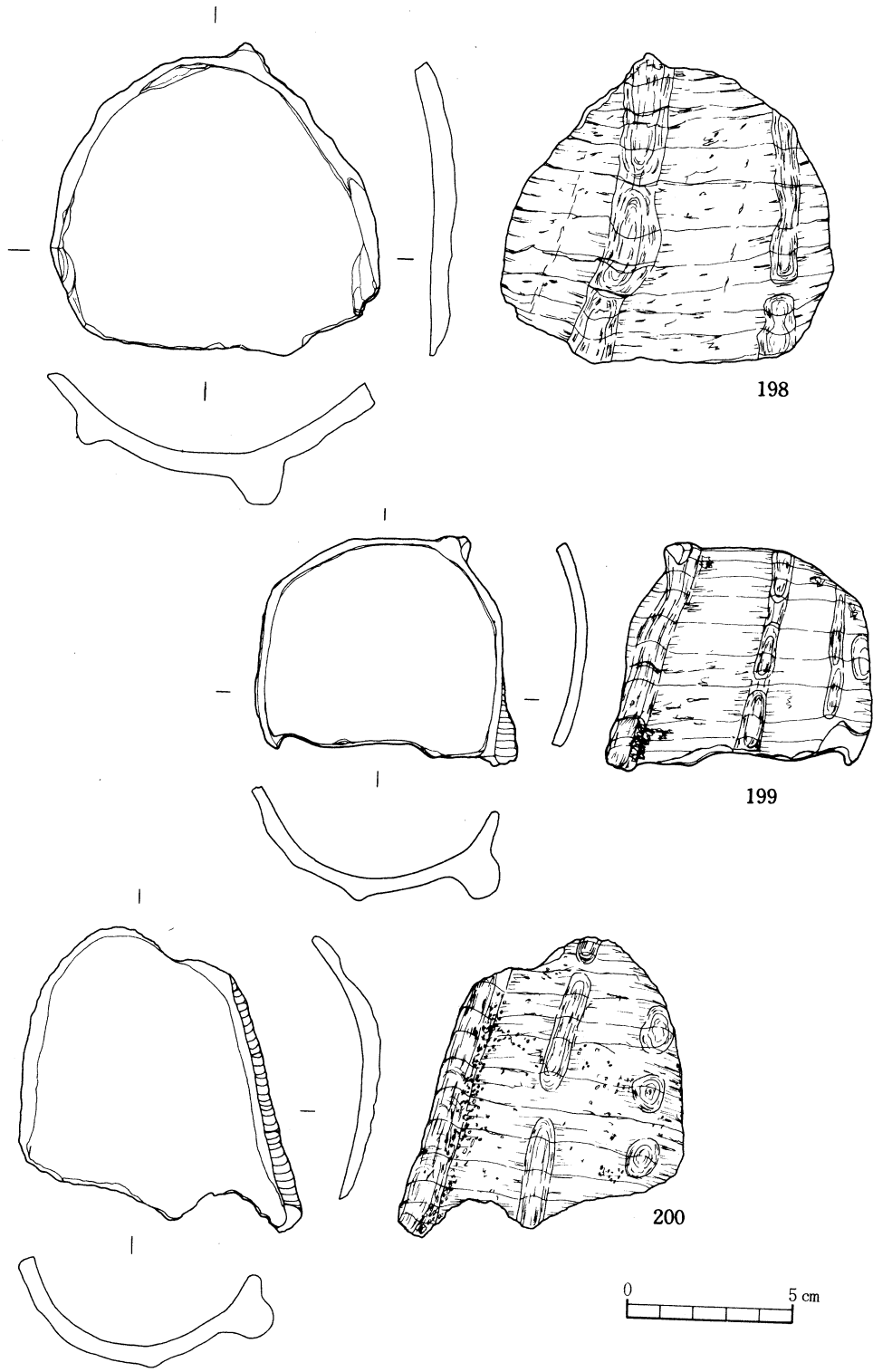
第25図 泉川遺跡貝製品実測図(1) 貝製容器Ⅲ



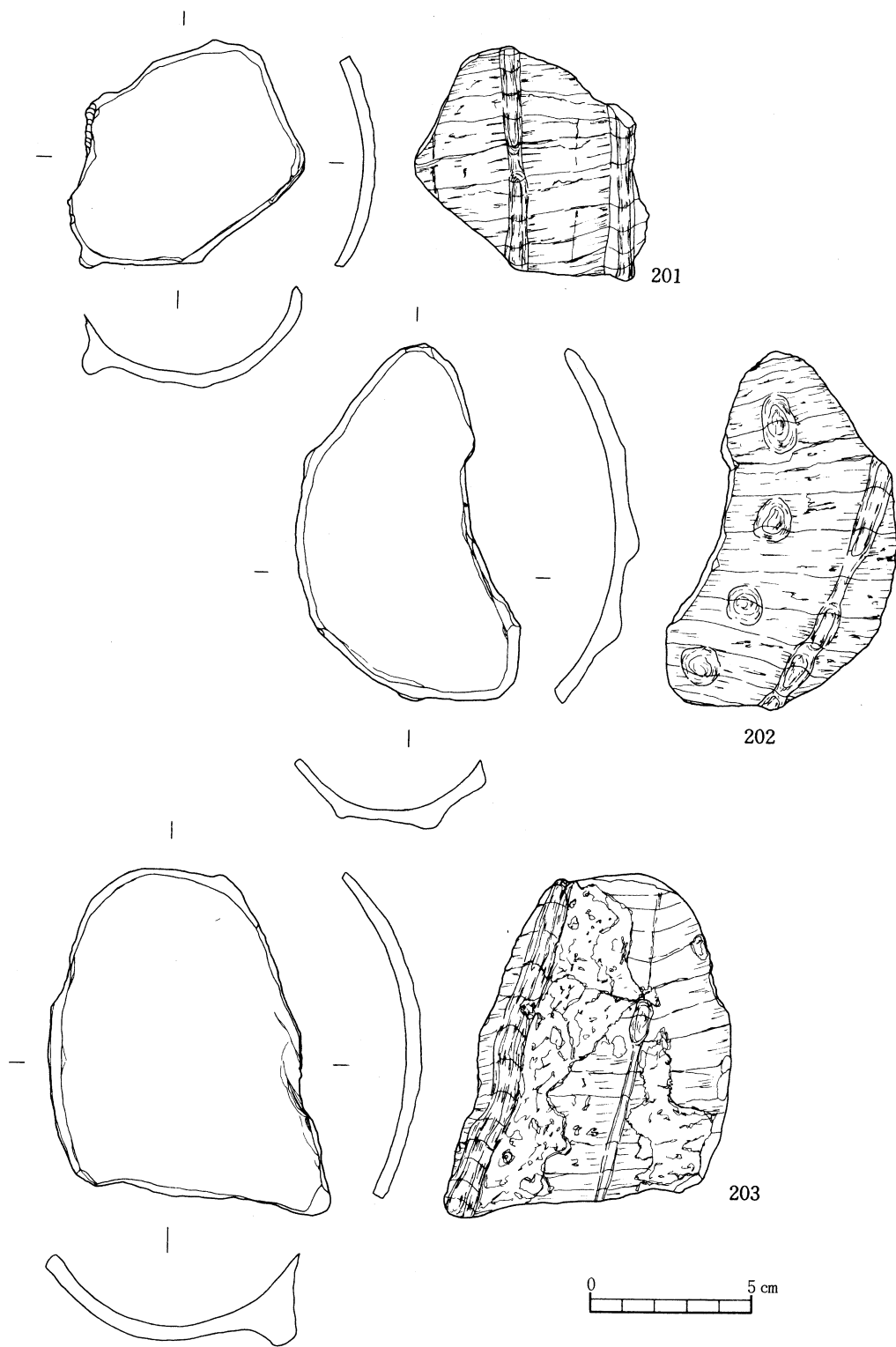
第26図 泉川遺跡貝製品実測図(12) 貝製容器Ⅳ



第27図 泉川遺跡貝製品実測図(13) 貝製容器V

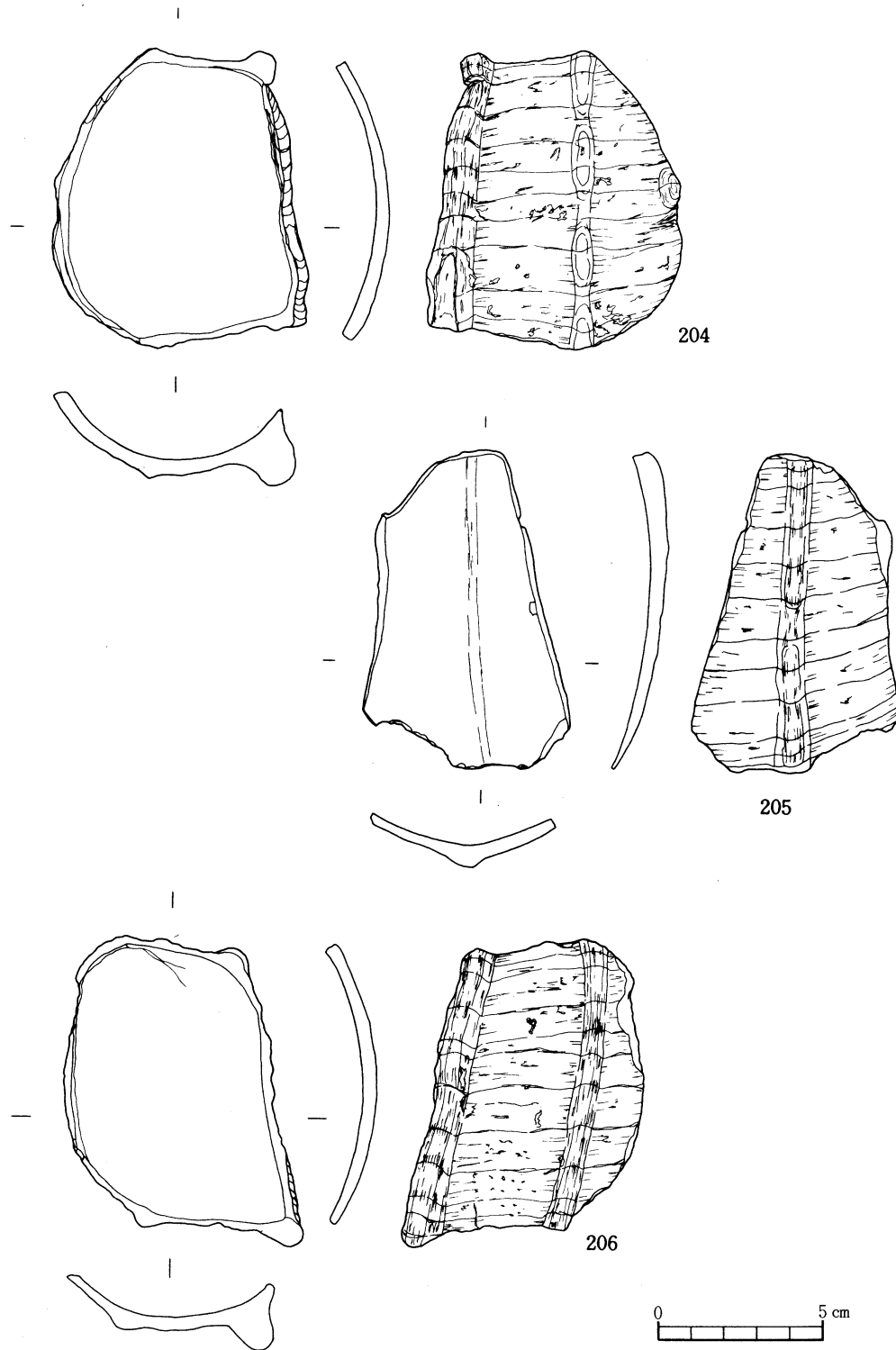


第28図 泉川遺跡貝製品実測図(14) 貝製容器VI



第29図 泉川遺跡貝製品実測図(15) 貝製容器Ⅶ





第30図 泉川遺跡貝製品実測図(16) 貝製容器Ⅶ

## 第6章 まとめ

泉川遺跡は、長浜金久第1遺跡と同様に最も海岸側の砂丘上に所在し、その大半が砂採集事業により縁辺部が<sup>注1</sup>残存しているのみである。

本遺跡の遺物包含層を形成する砂層は、軽石、サンゴ塊、枝サンゴを含み、ローリングを受けた土器破片、貝殻の死骸などで構成され、人為的な層位でなく、海進海退の影響を受け現位置でなく、二次的な堆積層と判断した。しかし、遺跡地の西側端には土壌を検出し、それほど遠くない所に遺跡が所在していたことが堆察できる。本遺跡は、こうした環境から出土した遺物より古墳時代後期から平安時代前期相当期の時期が考えられる。本遺跡のマガキガイによる放射性炭素測定の結果 $950 \pm 30 \text{ B.P.Y}$ の年代が測定されている。

貝殻が多く集中した層は、標高約1.2mを数え、当時の海岸の岩礁も検出した。多量に出土した貝は、マガキガイが特に多く、ヤコウガイ・ヒレシャコなどの大形の貝もみられ、オオムガイやマングローブシジミは珍らしく、本遺跡からは<sup>注2</sup>109種の貝が<sup>注3</sup>知見された。これらの貝殻はB・C・D—3・3区を中心に出土した。

本遺跡出土の土器は、伊仙町の面縄第3貝塚(兼久貝塚)出土の土器を標式とする兼久式土久式土器を中心に、須恵器・土師器などがみられ、そのほとんどがローリングを受けている。これらの土器で最も注目される土器は、靱痕のある土器破片が出土し、南西諸島での発掘調査例では初見である。

本遺跡の兼久式土器には、甕形土器や壺形土器があり、轆轤を使用せず全ての土器が輪積みによる手法を用い、器面の内外面に輪積調整痕を残すものが多くみられる。これらの土器は破片のため文様や突帯の状況により、甕形土器はI類～VI類、壺形土器はI類～V類に分類した。

I類は沈線を施している土器、II類は沈線と突帯を組み合わせた土器、III類は刻目突帯をもつ土器、IV類は横位の突帯に縦位の突帯を組み合わせたものや横位の突帯が変化した土器、V類は無文土器であり、甕形土器はVI類として、横位の粘土帯や横位と縦位の粘土帯を組み合わせたものに刻目を施している。I・II類の土器は、面縄第1貝塚IV層<sup>注4</sup>{ $1355 \pm 60 \text{ B.P.Y (A D 650)}$ }の沈線と刻目突帯をもつ土器や長浜金久第1遺跡のI・II類に類似する土器である。III類は、長浜金久第1遺跡19層<sup>注5</sup>{ $1120 \pm 20 \text{ B.P.Y (A D 830 \sim 890)}$ } III類土器の範疇と考えられる土器である。IV類は、長浜金久第1遺跡のIV類土器やあやまる第2貝塚出土の突帯に刻目が施されてない土器に類似している土器が考えられる。V類は長浜金久第1遺跡のV類土器や面縄第1貝塚のII層及びIV層出土の土器と類似するタイプである。VI層は初見であり、今後の増加を待ちたい。これらの甕形土器を器形的にみると口縁部が内向し、口唇部が外曲し、胴部が丸味を帯びるもの、口縁部が外向するもの、口縁部が波状となる土器に大別され、壺形土器は、胴部より直線的に内向し、口縁部は短かく直口するもの、口縁部は短かく肩の張るもの、口縁部が大きく外曲するタイプが考えられる。

須恵器は、南島各地に広く分布する類須恵器とは異なり、本土からの持ち込みが考えられる

須恵器である。近年、伊仙町カムイヤキ古窯跡が調査され、類須恵器の窯として注目された。土師器は、口縁部破片が多いが、内面にヘラケズリ<sup>注6</sup>の痕跡をとどめており、9世紀から10世紀の所産が考えられる。兼久式土器・須恵器・土師器などとともに出土した靱痕のある土器破片は、南西諸島での調査例では初見であり、手広遺跡の表採資料や大島郡住用村出土の類須恵器の底面に靱痕が認められている。この靱の長さ6.0mm、幅3.0mm、長幅比2.0で、日本型と報告されている。

石器は、叩石と石皿があり、叩石の中には磨石と使用後叩石に転用したものや使用により大きい凹部を造り出すものもある。石皿は欠損しているが、大型で約1,200g<sup>注8</sup>を計り、使用による窪み面が大きいものである。

貝製品には、貝小玉・円孔貝製品・貝製利器・貝匙・貝製容器などが出土した。これらの中には二次堆積層からの出土のため判断を余儀なくされたことを付加しておきたい。貝小玉はマガキガイの殻頂を利用したもので、穿孔のある自然のものも多く認められた。円孔貝製品は、呪術的な用途が考えられるとの報告がなされている。有孔貝は、粗孔を有するのみばかりで、他に加工は認められない。用途については装飾品や漁具としての使用などが検討されている。貝製利器として、三島格氏提唱の螺蓋製貝斧<sup>注9</sup>が出土し、名称も多種である。この製品の付刃の状況について、同氏は付刃の方法やその磨滅状況、石器との関係、用途として敲打、削る、切るなどの多目的な機能などについて論じられている。一方、貝製容器が多く、貝匙や未製品のヤコウガイなどの殻や体部などの残存からヤコウガイ製貝匙や貝製容器などの専用敲打具としての螺蓋利器の名称を与え、敲打することにより付刃状の痕跡が生じるとの考え方を示している。本遺跡の製品は、多目的使用を考えれば後者も含まれ、前者の考え方が妥当と思われ、破<sup>注1</sup>砕片もかなり認められる。貝匙は、ヤコウガイ製品で匙の形態をしたもので、本遺跡のものは柄部が欠損したもので、ともに外皮が剥がれており、内外面ともに真珠層の露呈を認める。貝製容器は、ヤコウガイの殻を切断し製作されたもので、本遺跡のものは完形品が少なく、欠損しているものが多い。また、ヤコウガイ体部の残存部や破砕片も多量に認める。この製品は、貝匙と呼称されていたものであるが、その形状や用途から貝製容器、貝容器<sup>注1</sup>の名称が与えられている。<sup>注4</sup>

#### 参考文献

- 注1. 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財報告書(32) 1985. 3  
 注2. 京都産業大学山田治氏測定  
 注3. 宮之城中学校行田義三氏同定  
 注4. 伊仙町教育委員会「面縄貝塚群」伊仙町文化財発掘調査報告書(4) 1985. 3  
 注5. 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」笠利町文化財報告No.7 1984. 3  
 注6. 伊仙町教育委員会「カムイヤキ古窯跡群Ⅱ」伊仙町文化財発掘調査報告書(5) 1985. 3  
 注7. 奄美考古学研究会員里山勇廣氏発見の資料で、中山清美氏教示による。  
 注8. 白木原和美「類須恵器の出自について」熊本大学法文論叢、第36号 1975. 3  
 注9. 三島格「螺蓋製貝斧」賀川光夫先生還暦記念論集 1982



1.遠景



泉川遺跡発掘調査 (I)

2.近景 I



1. 近景 II



泉川遺跡発掘調査 (II)

2. 土 壙 (東から)



泉川遺跡発掘調査(Ⅲ)

1. 遺物出土状況 (C-2区)



泉川遺跡発掘調査(Ⅲ)

2. 遺物出土状況 (D-2区)



(M5-0) 泉川遺跡発掘調査

1. 遺物出土状況 (変形土器)



泉川遺跡発掘調査 (IV)

2. 遺物出土状況 (壺形土器)

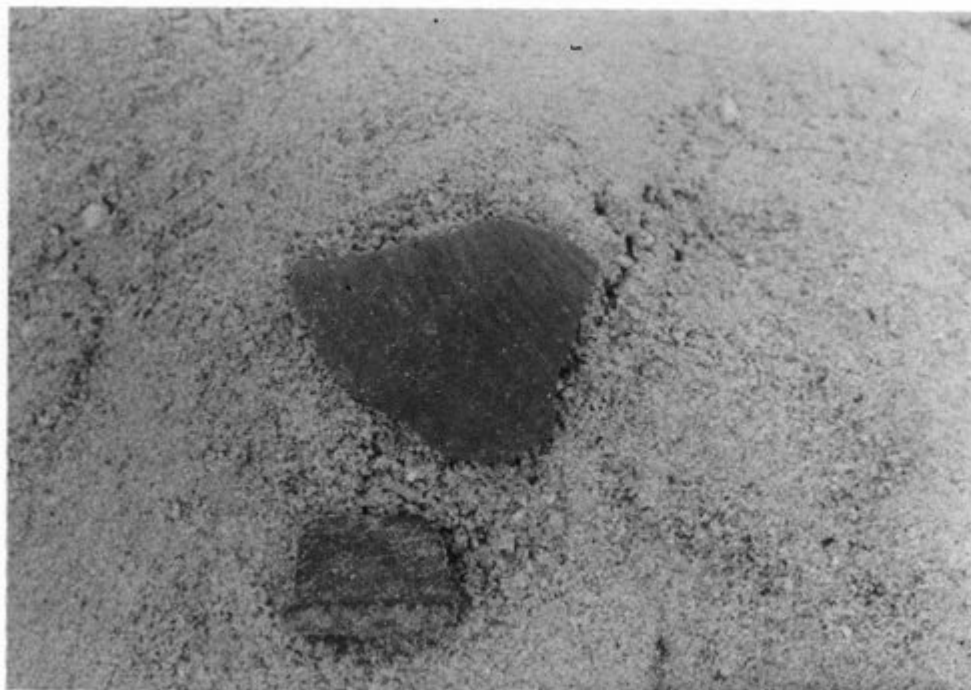


1. 遺物出土状況 (甕形土器・ヤコウガイ)



泉川遺跡発掘調査 (V) 2. 遺物出土状況 (甕形土器底部)





1. 遺物出土状況 (変形土器・須恵器)



泉川遺跡発掘調査 (VI)

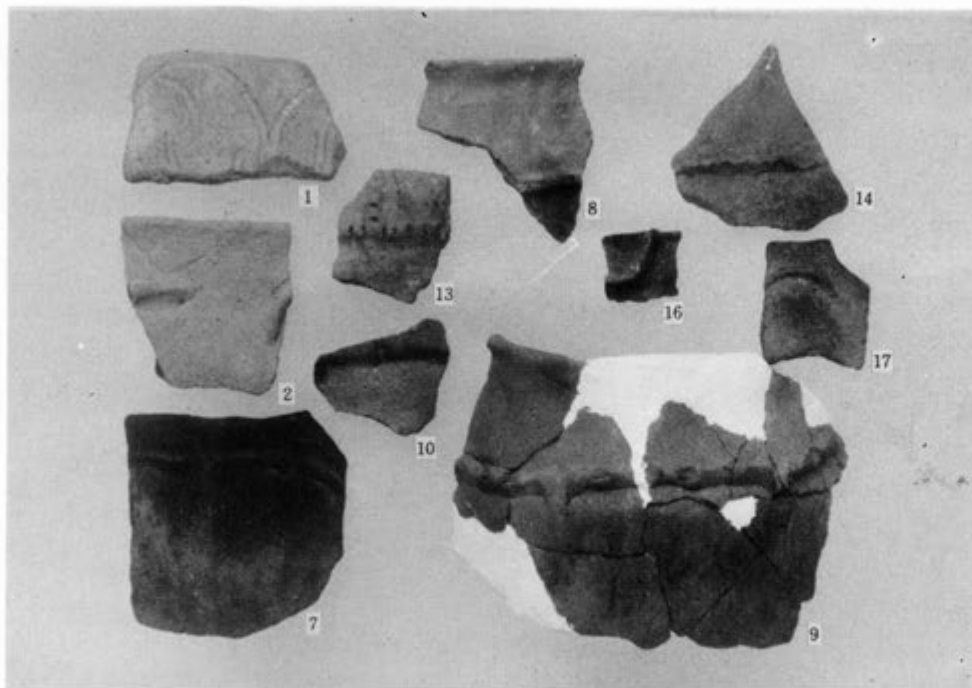
2. 遺物出土状況 (土師器)



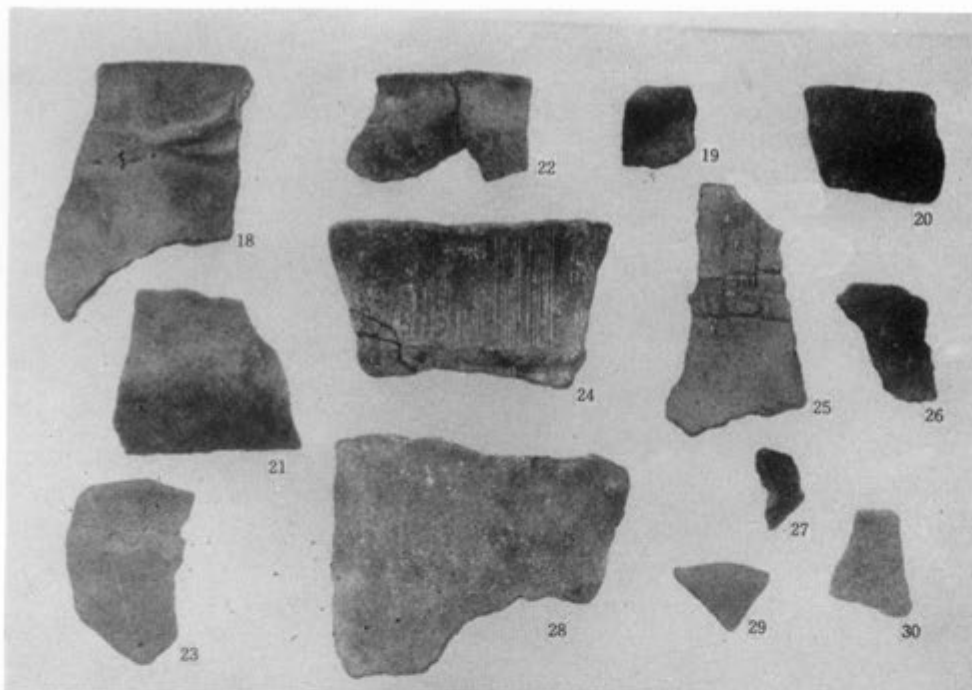
1.遺物出土状況(石皿)



泉川遺跡発掘調査(VI) 2.サンゴ塊・枝サンゴ・軽石類検出状況

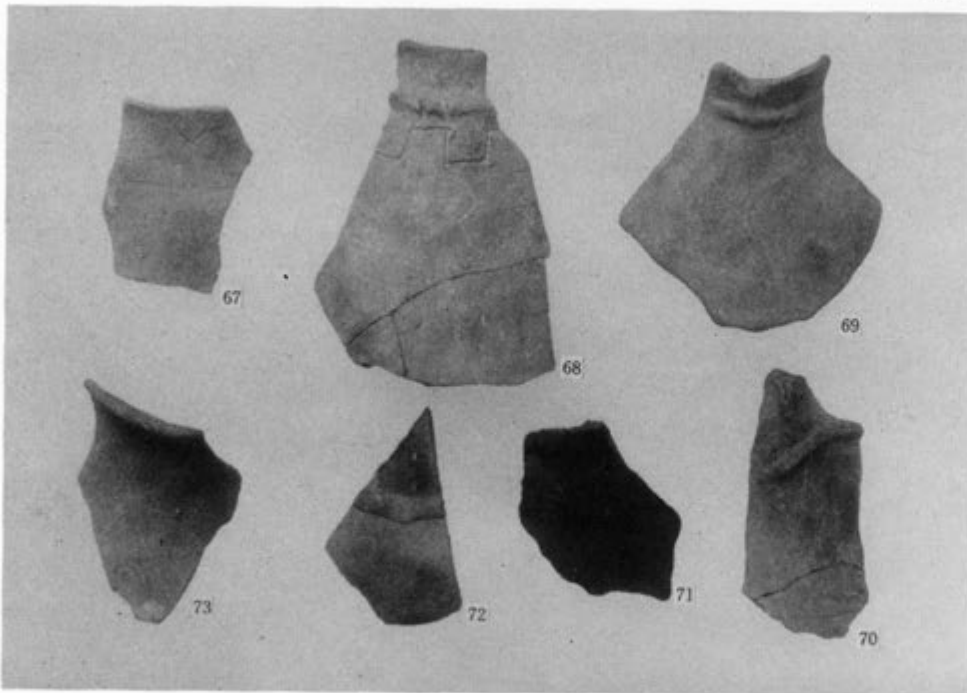


1. 甕形土器 (I)

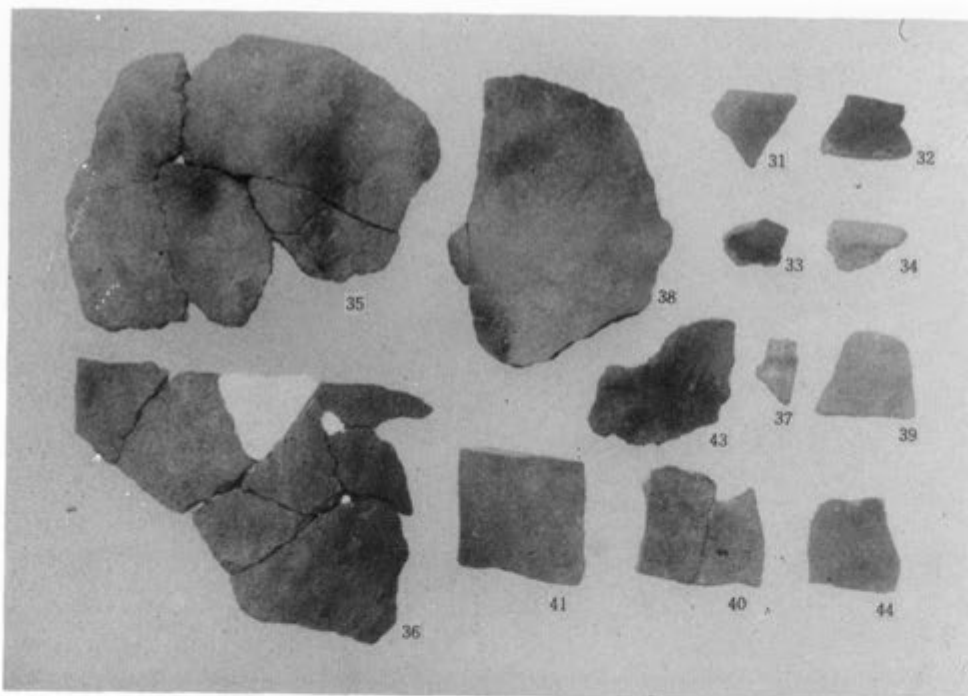


泉川遺跡出土土器 (I)

2. 甕形土器 (II)

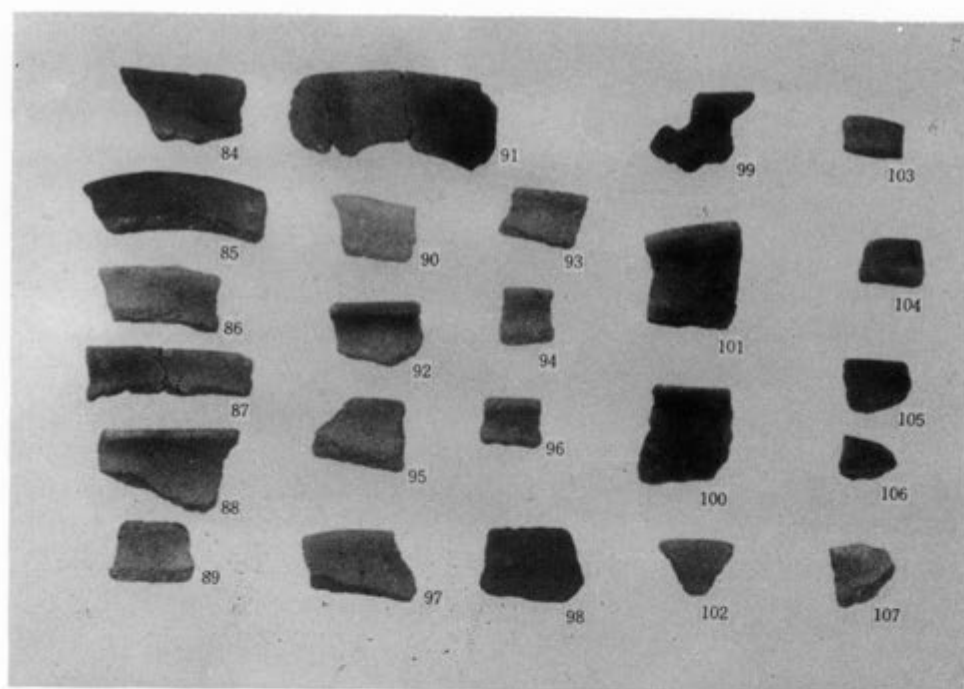
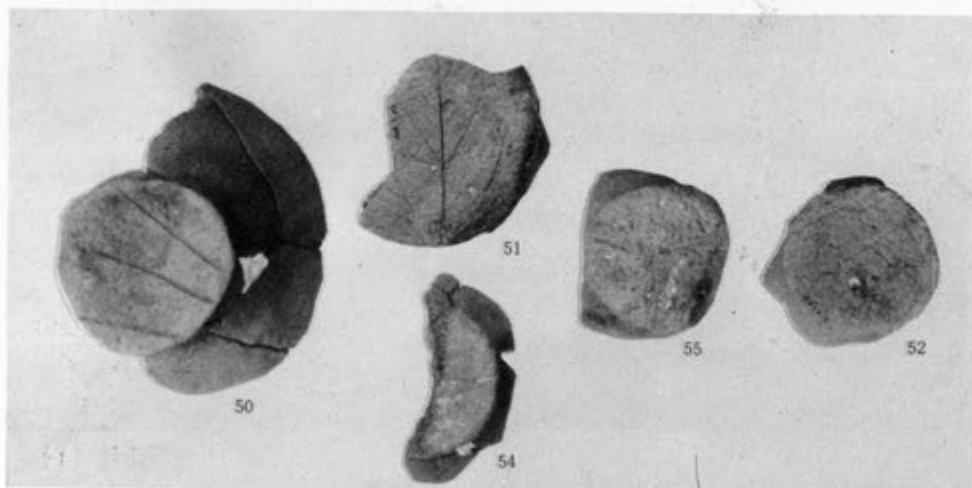
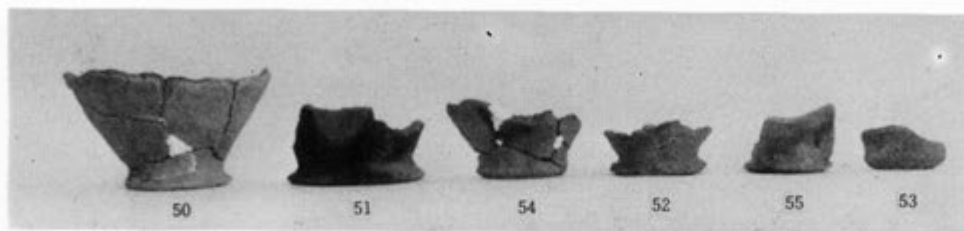


1. 壺形土器 (I)



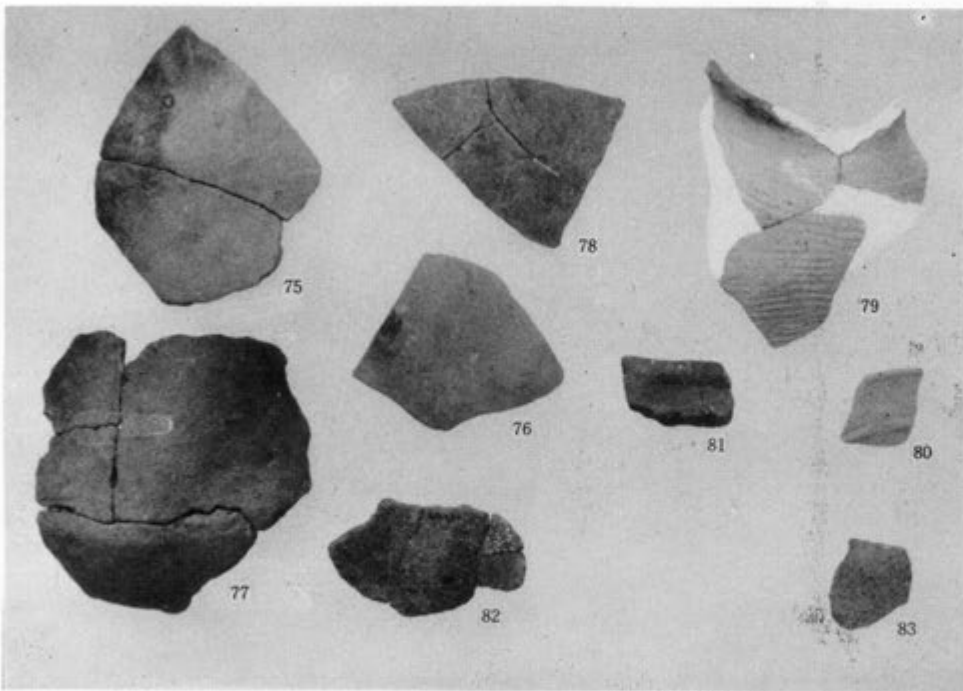
泉川遺跡出土土器 (II)

2. 甕形土器 (III)

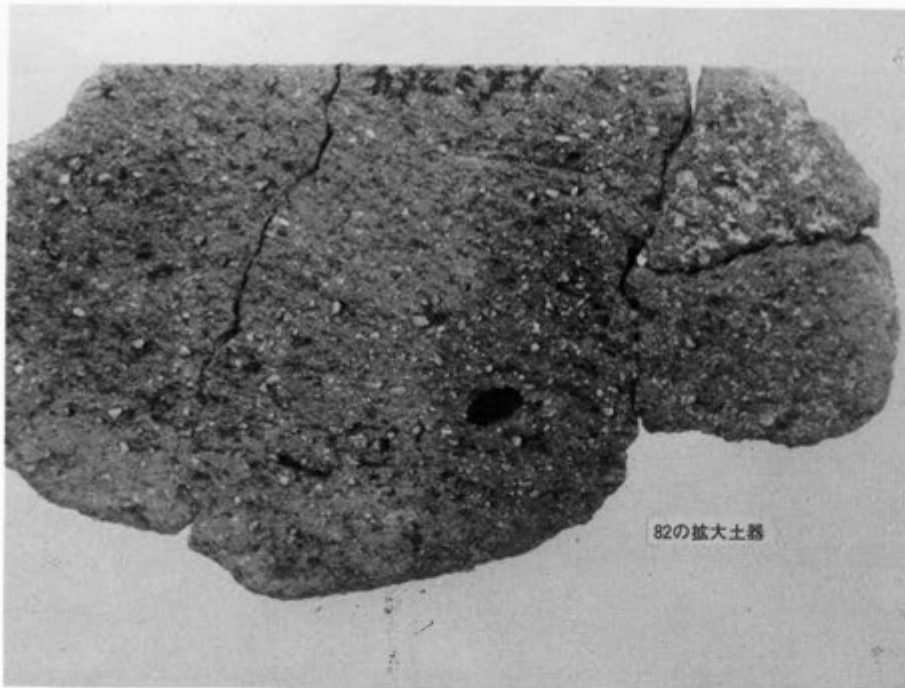


泉川遺跡出土土器 (Ⅲ)

1. 甕形土器底部・土師器

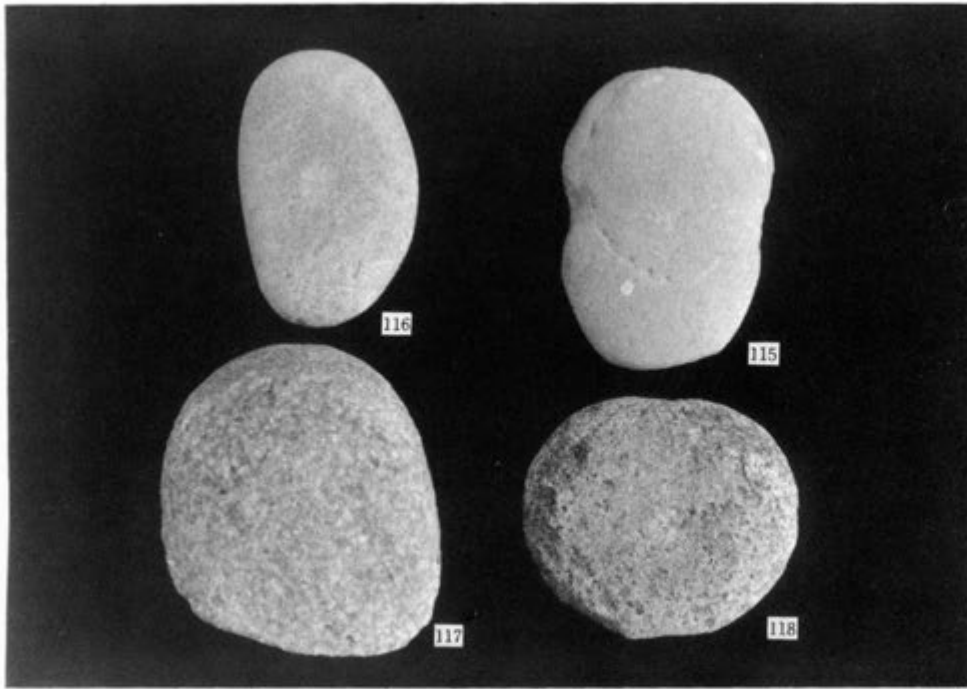


1. 壺形土器 (Ⅱ), 須恵器, 外

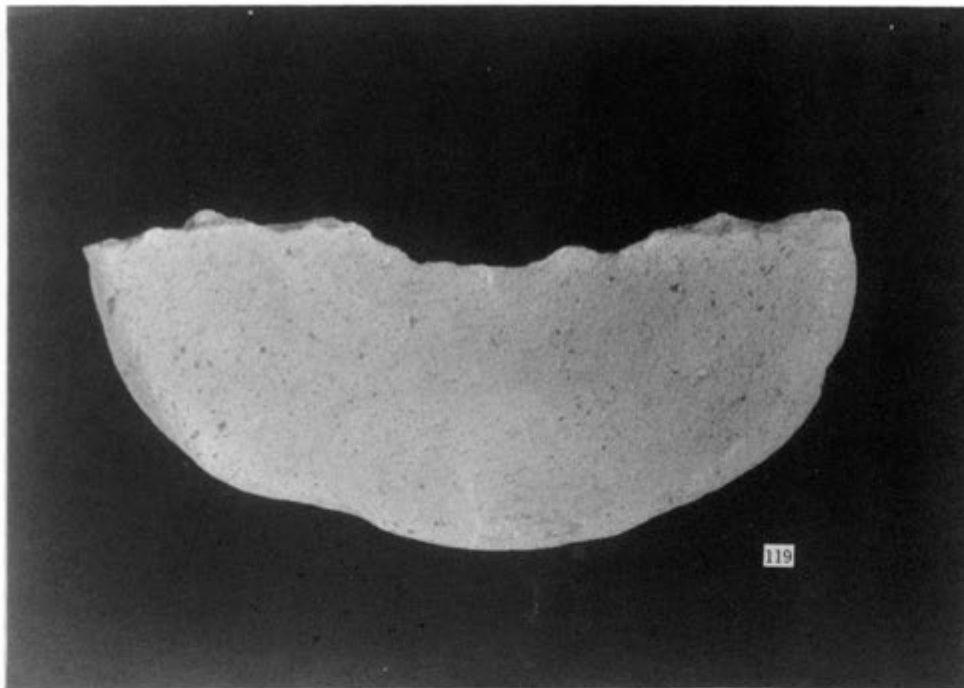


泉川遺跡出土土器 (Ⅳ)

2. 稜痕のある土器

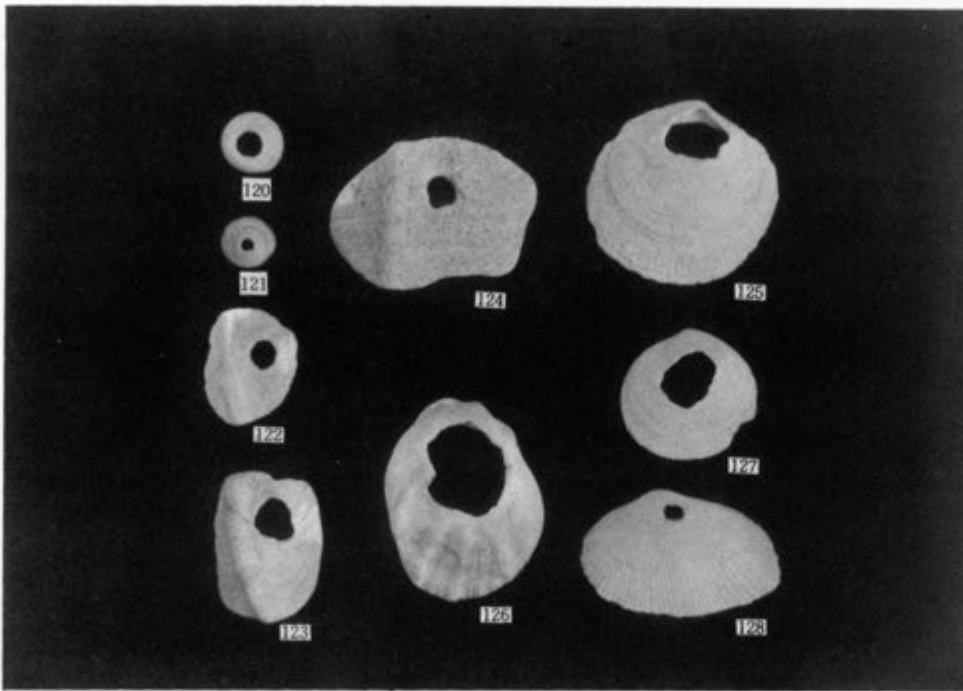


1. 叩石

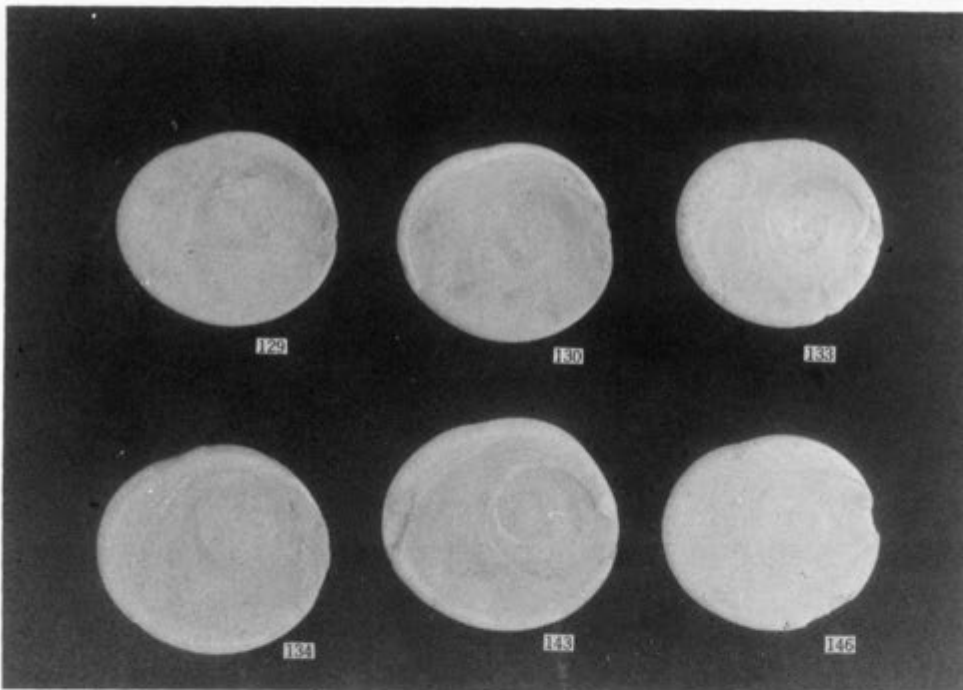


泉川遺跡出土石器 (I)

2. 石皿

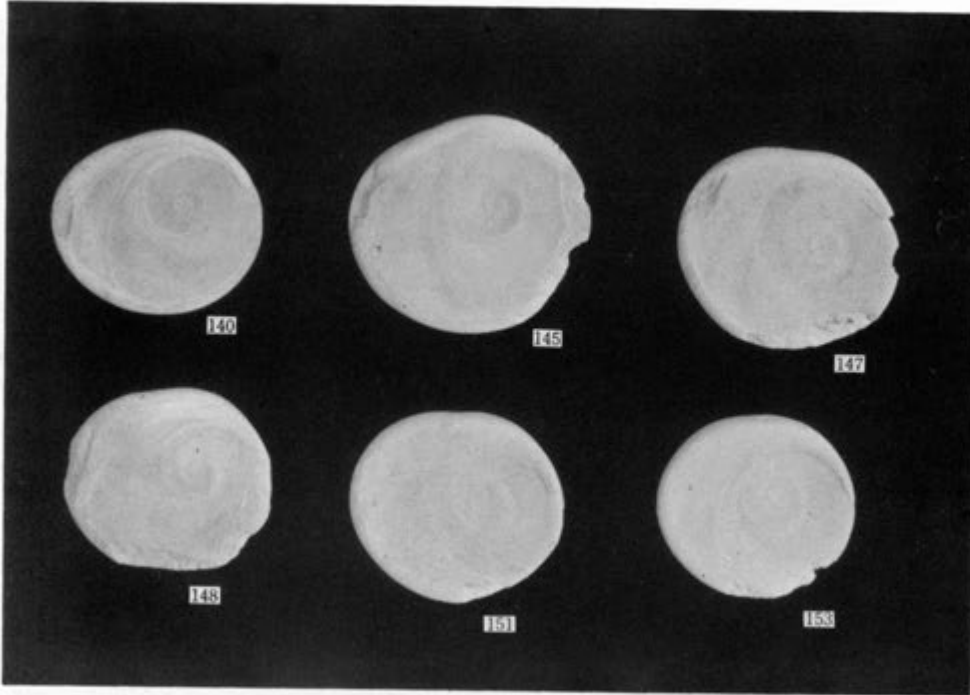


1. 貝小玉・円孔貝製品・有孔貝



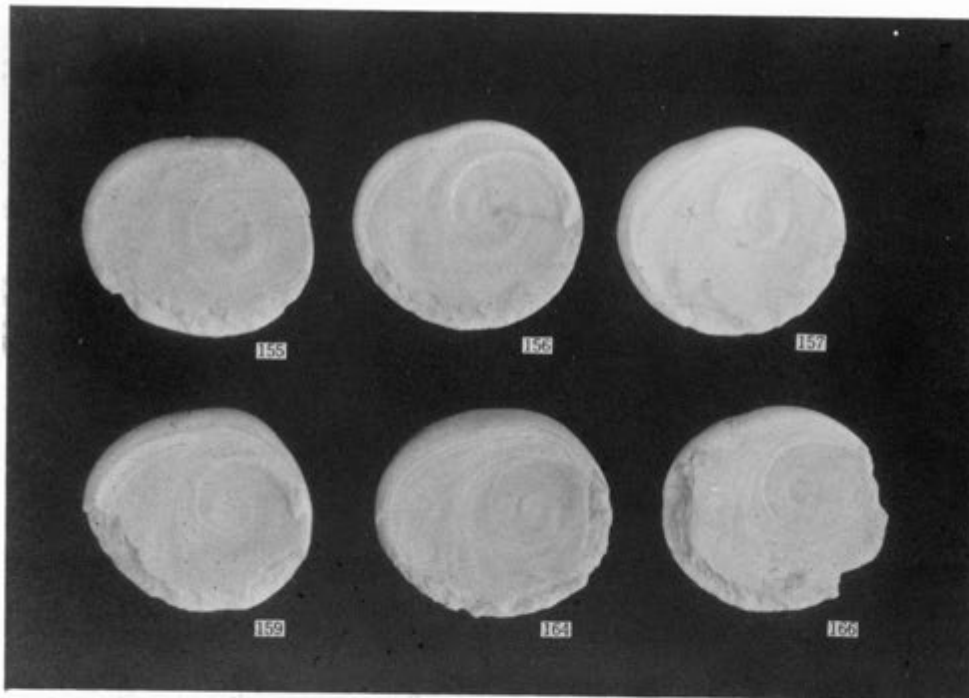
泉川遺跡出土貝製品 (I)      2. 貝製利器 (I) ・螺蓋製見弁 1





泉川遺跡出土製品 (I)

1. 貝製利器 (I) · 螺蓋製貝斧 2

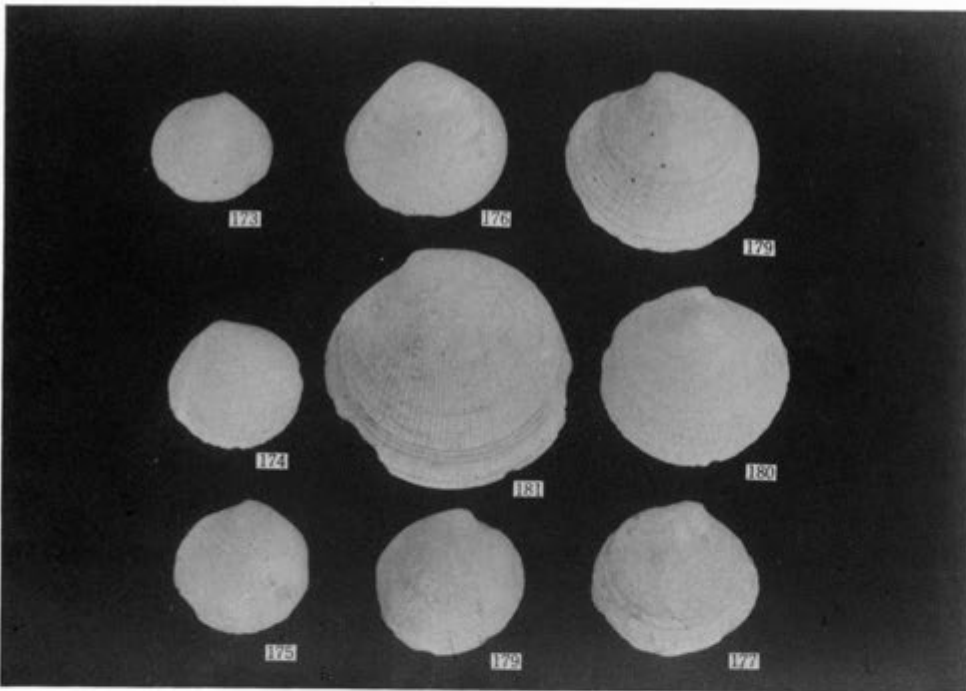


泉川遺跡出土製品 (II)

2. 貝製利器 (II) · 螺蓋製貝斧 3

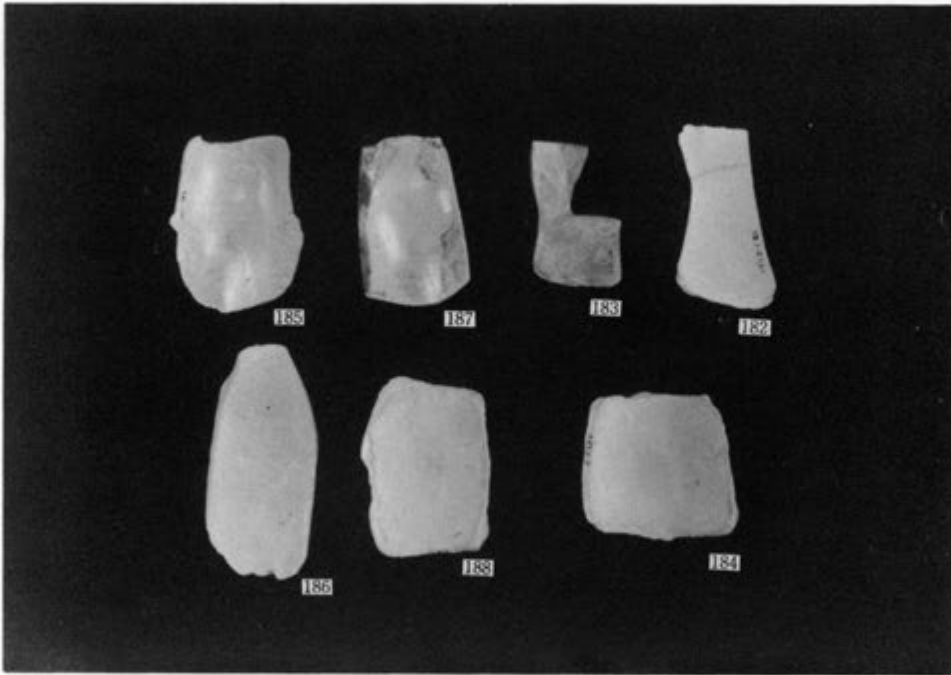


1. 貝製利器 (IV) ・ 螺蓋製貝斧 4

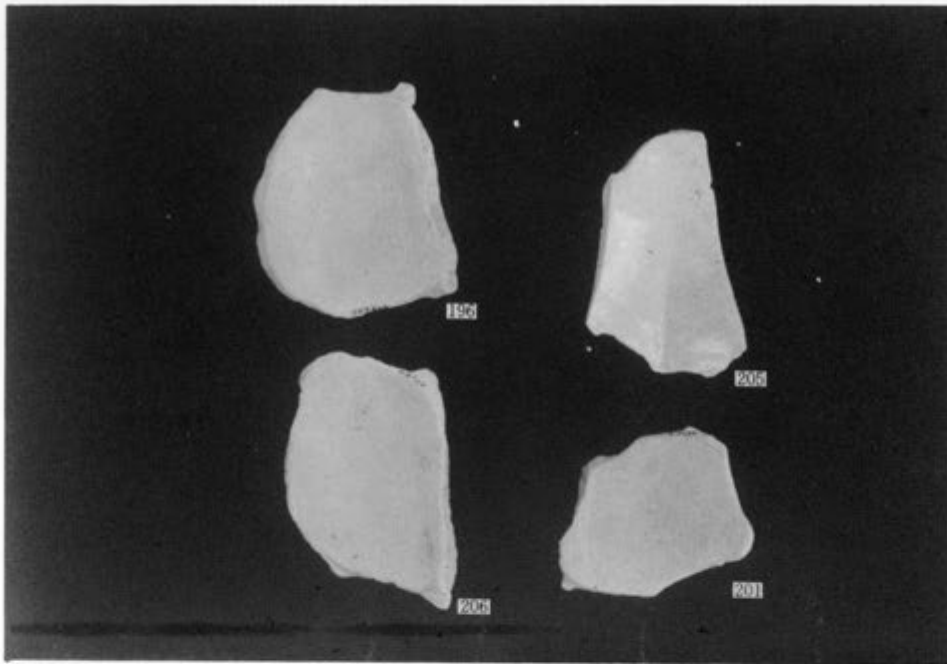


泉川遺跡出土貝製品 (III)<sup>14</sup>

2. 貝製利器 (V)

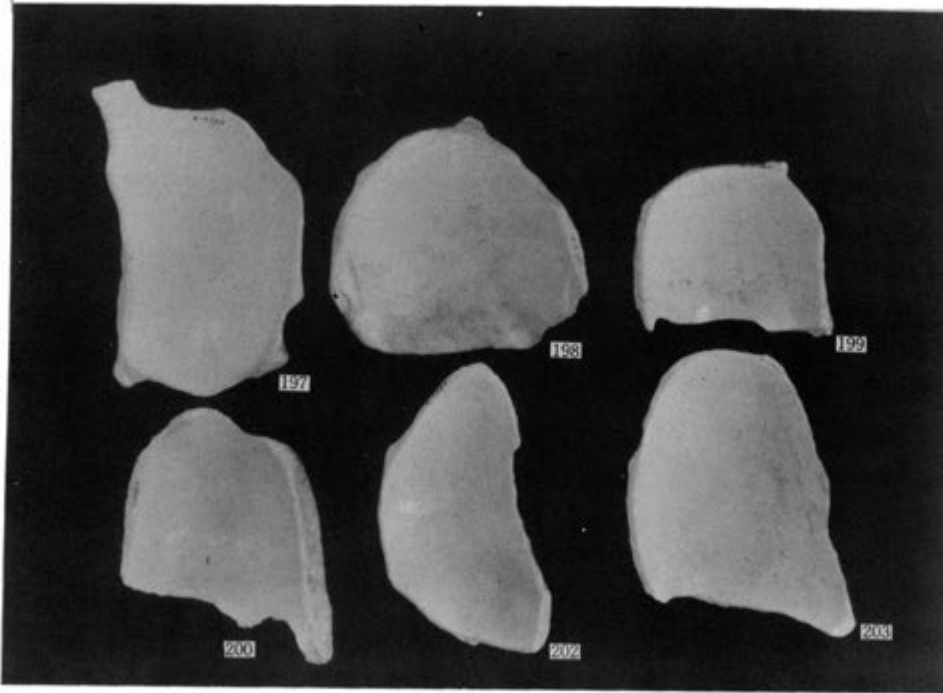


1. 貝匙・貝製容器 1

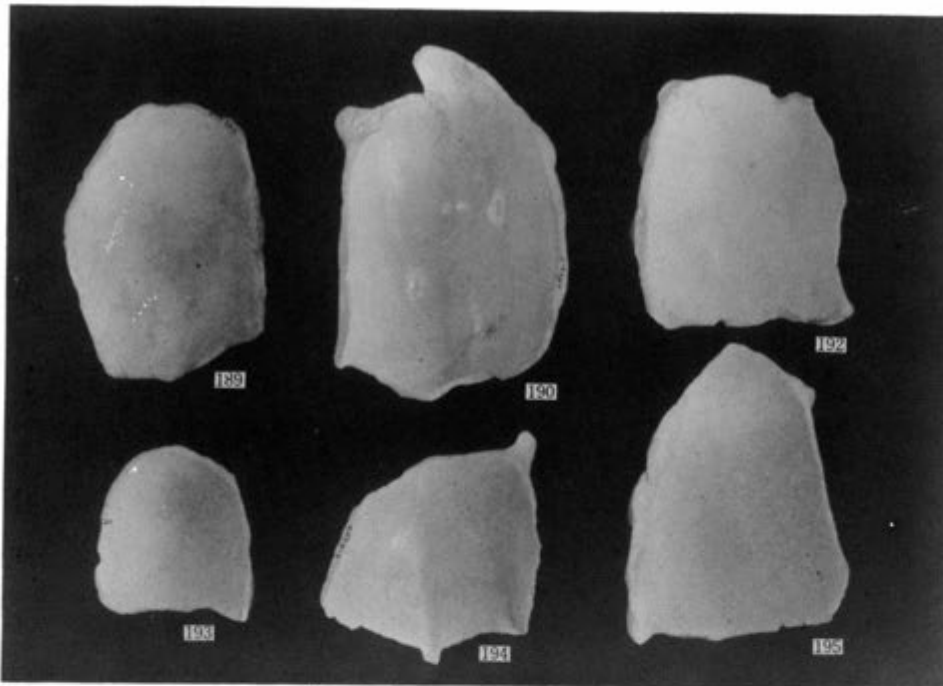


泉川遺跡出土貝製品 (IV)

2. 貝製容器 2



1. 貝製容器 3



泉川遺跡出土貝製品 (V)

2. 貝製容器 4

# 泉川遺跡出土貝類について

行 田 義 三

1. 泉川遺跡から出土した貝類は次の通りである。

109種	海産	巻貝(腹足類).....71
		頭足類.....1
		二枚貝.....32
	陸産.....2	
	淡水産	巻貝.....2
		二枚貝.....1

2. いずれも同地域に現生している貝であるが、マングローブシジミだけは生息していない。

3. 大形の貝にはヤコウガイ、ヒレジャコ、シラナミ、スイジガイ、ラクダガイ、クモガイ、ゴホウラ、ダルマサラバティ、ホラガイなどがあげられる。

4. 多量に出土したものにはマガキガイがあり、肉は香ばしく美味である。

5. 出土した貝の中で、小形で食用にしたとは考えられない次のようなものがある。

コシマヤタテ、オキナクウスカワマイマイ

6. 出土した貝はすべて図版にまとめたが、貝の小片(一部分)であったり、模様がなくなって識別の困難なものについては、完全な標本を写真に撮り参考に供した。その時の表示は番号の右上に'印を付してある。(例 2番の貝の参考標本→ 2')

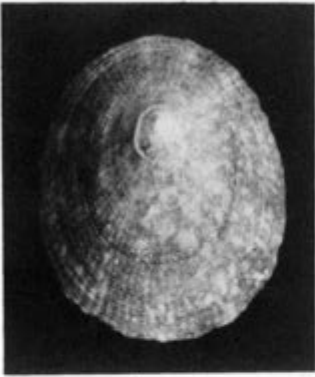
7. 写真の番号は一覧表の和名番号と一致している。

泉川遺跡出土貝類一覧表

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
	巻貝(腹足類)		9	ダルマサラサバティ	奄美以南
	※ツタノハ科			※リュウテン科	
1	オオベッコウガサ	奄美以南	10	リュウテン	種子島以南
	※ミミガイ科		11	カンギク	種子島以南
2	イボアナゴ	紀伊以南	12	オオウラウズ	種子島以南
3	フクトコブシ	国国以南	13	チョウセンサザエ	平島以南
4	マアナゴ	四国以南	14	ヤコウガイ	種子島以南
	※ニシキウス科			※ムカデガイ科	
5	オキナワイシダタミ	奄美以南	15	リュウキュウヘビガイ	四国以南
6	ニシキウス	紀伊以南		※アマオブネ科	
7	ギンタカハマ	房総以南	16	オオマルアマオブネ	種子島以南
8	サラサバティ	奄美以南	17	アマオブネ	房総以南

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
	<b>※オニツノガイ科</b>		46	ツノレイシ	紀伊以南
18	コオニツノ	四国以南	47	ガンゼキボウ	房総以南
19	メオニツノ	四国以南	48	テツボラ	紀伊以南
20	オニツノガイ	紀伊以南	49	ハナワレイシ	紀伊以南
	<b>※タカラガイ</b>			<b>※オニコブシ科</b>	
21	ハナビラダカラ	房総以南	50	コオニコブシ	紀伊以南
22	キイロダカラ	房総以南		<b>※ヤツシロガイ科</b>	
23	クチムラサキダカラ	四国以南	51	ウズラガイ	房総以南
24	ハナマルユキ	房総以南		<b>※イトマキボラ科</b>	
25	コモンダカラ	房総以南	52	ツノキガイ	紀伊以南
26	ヒメホシダカラ	種子島以南	53	リュウキュウツノマタ	紀伊以南
27	ヤクシマダカラ	房総以南	54	チトセボラ	伊豆半島以南
28	ホシダカラ	四国以南	55	イトマキボラ	四国以南
	<b>※フジツガイ科</b>			<b>※フヂガイ科</b>	
29	ホラガイ	紀伊以南	56	コシマヤタテ	紀伊以南
30	サツマボラ	紀伊以南		<b>※イモガイ科</b>	
31	ミツカドボラ	紀伊以南	57	サヤガタイモ	房総以南
	<b>※スイショウガイ科</b>		58	キヌカツギイモ	房総以南
32	ムカシタモト	房総以南	59	イボシマイモ	房総以南
33	マガキガイ	房総以南	60	アジロイモ	種子島以前
34	マイノソデ	四国以南	61	サラサミナシ	紀伊以南
35	イボンデ	種子島以南	62	マダライモ	紀伊以南
36	ゴホウラ	種子島以南	63	クロザメモドキ	四国以南
37	スイジガイ	種子島以南	64	ゴマクイモ	四国以南
38	クモガイ	種子島以南	65	ヤナギシボリイモ	紀伊以南
39	ラクダガイ	種子島以南	66	ロウソクガイ	紀伊以南
	<b>※オキニシ科</b>		67	ニシキミナシ	四国以南
40	オキニシ	房総以南	68	クロフモドキ	種子島以南
	<b>※アクキガイ科</b>			<b>※タケノコガイ科</b>	
41	キマダライガレイシ	紀伊以南	69	ベニタケ	紀伊以南
42	ムラサキイガレイシ	紀伊以南		<b>※カラマツガイ科</b>	
43	アカイガレイシ	紀伊以南	70	コウダカカラマツ	四国以南
44	テツレイシ	紀伊以南		<b>※アメフラシ科</b>	
45	シラクモガイ	九州南部以南	71	タツナミガイ	房総以南

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
72	頭足類	熱帯太平洋海域	88	ツキガイ	紀伊以南
	※オウムガイ科 オウムガイ		89	クチベニツキガイ	四国以南
73	淡水産	北海道以南	90	※キクザル科 キクザル	陸奥湾以南
	※タニシ科 マルタニシ		91	※カゴガイ科 カゴガイ	奄美以南
74	※トウガタカリニナ科 トウガタカリニナ	奄美以南	92	※シャコガイ科 シラナミ	種子島以南
75	陸産	奄美以南	93	ヒレジャコ	種子島以南
	※ナンバンマイマイ科 オオシママイマイ		94	ヒメジャコ	種子島以南
76	※オナジマイマイ科 オキナワウスカワマイマイ	奄美以南	95	※ザルガイ科 リュウキュウザル	奄美以南
77	節足動物	本州以南	96	カワラガイ	奄美以南
	※フジツボ類 クロフジツボ		97	※マルスダレガイ科 ホンスジイナミガイ	紀伊以南
78	二枚貝	紀伊以南	98	アラスジケマンガイ	奄美以南
	※フネガイ科 オオタカノハ		99	ケショウハマグリ	種子島以南
79	ベニエガイ	房総以南	100	アラヌノメ	紀伊以南
80	エガイ	房総以南	101	ヌノメガイ	九州南部以南
81	リュウキュウサルボウ	種子島以南	102	マルオミナエシ	紀伊以南
82	※イガイ科 ヒバリガイ	陸奥湾以南	103	※チドリマスオ科 イソハマグリ	房総以南
	※シュモクアオリ科 マクガイ	種子島以南	104	※バカガイ科 リュウキュウバカガイ	紀伊以南
83	※ウグイスガイ科 クロチョウガイ	紀伊以南	105	※ニッコウガイ科 モチズキギラ	奄美以南
84	※ウミギク科 ミヒカリメンガイ	四国以南	106	サメザラ	九州南部以南
	※イタボガキ科 コケゴロモガキ	陸奥湾以南	107	ヒメニッコウガイ	紀伊以南
85	※ツキガイ科 オハグロガキ	紀伊以南	108	リュウキュウシラトリ	紀伊以南
86			109	※シオサザナミガイ科 リュウキュウマスオ	紀伊以南
				淡水産	
87	※シジミ科 マングロープシジミ		110		奄美以南



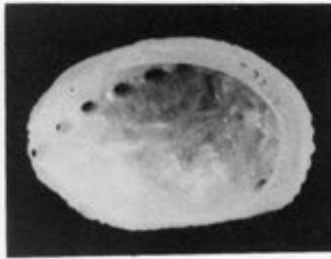
1 ×0.7



2 a ×1



2 b ×0.7



2 c ×0.7



3 ×0.9



3'

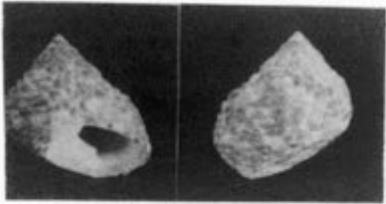


4 ×1



4'





5 ×0.9



6 a ×0.9



6 b ×0.9



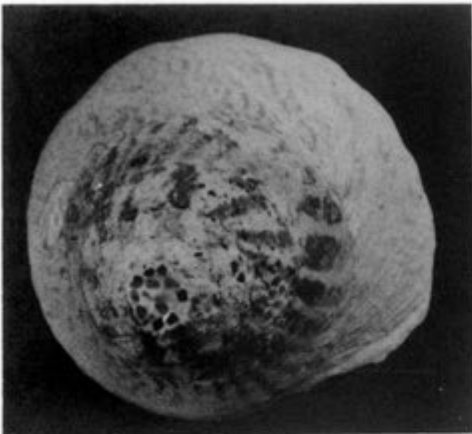
6 c ×0.9



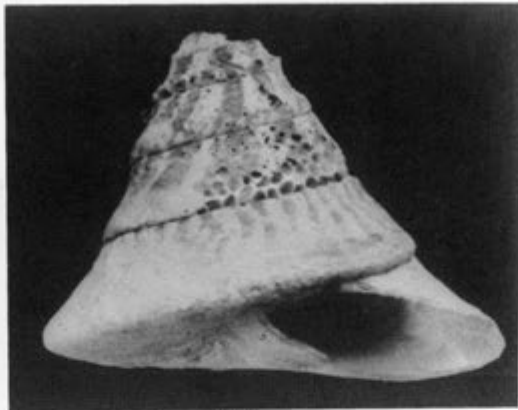
7 ×0.7



8 ×0.7



9 a ×0.5



9 b ×0.5



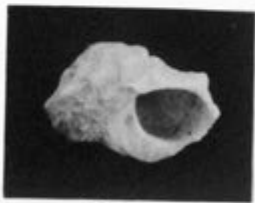
10a

×0.8



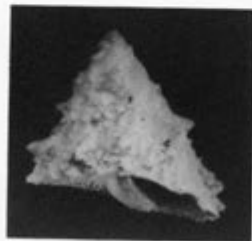
10b

×0.8



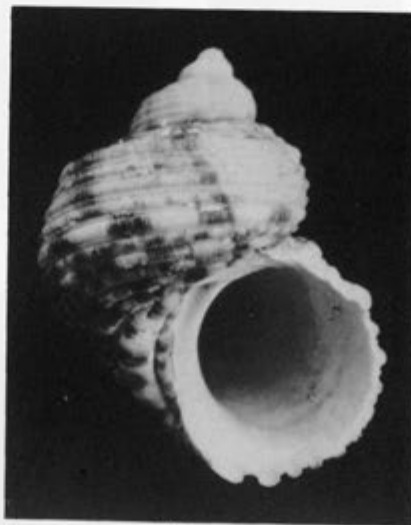
11

×0.9



12

×0.8



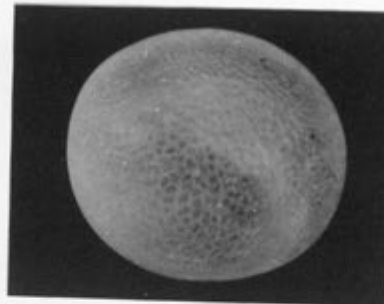
13

×0.8



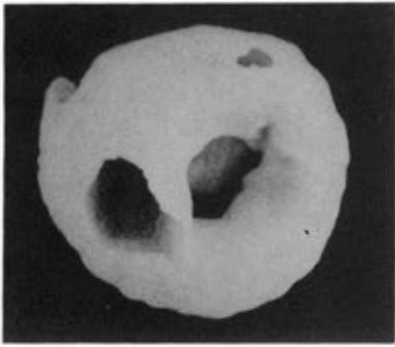
14

×0.4

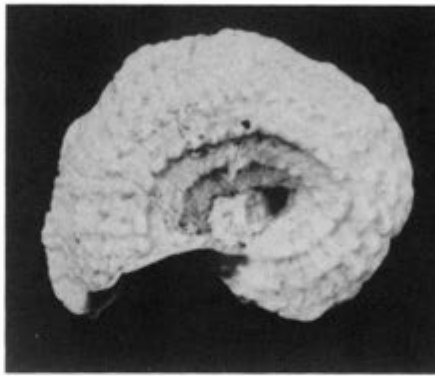


13のふた

×1.2



15      ×0.8



15'



16 a    ×1



16 b    ×1



17      ×1



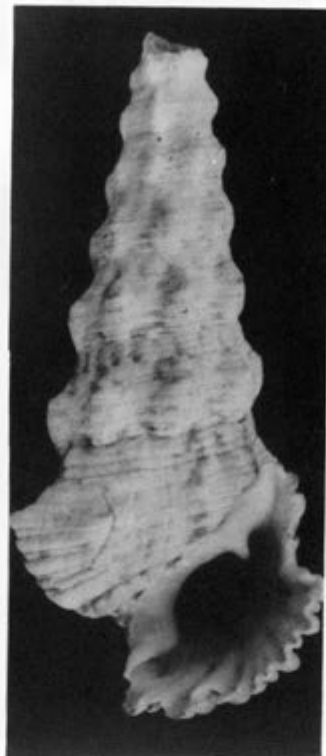
18      ×0.8



19      ×1



19'    ×1



20      ×0.9



21 ×1



22 ×1



23 ×0.7



23' ×1



24 ×1



25 ×0.9



25' ×1.4



26 ×0.8



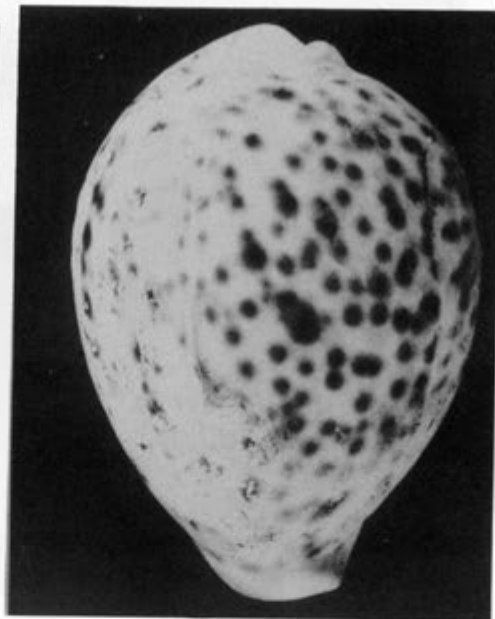
26' ×0.8



27 ×0.8



27' ×1



28 ×0.8



29 ×0.9



30 ×1



31 ×0.8



29' ×0.9



32 ×0.9



34 a ×0.7



33 ×0.9



34 b ×0.7



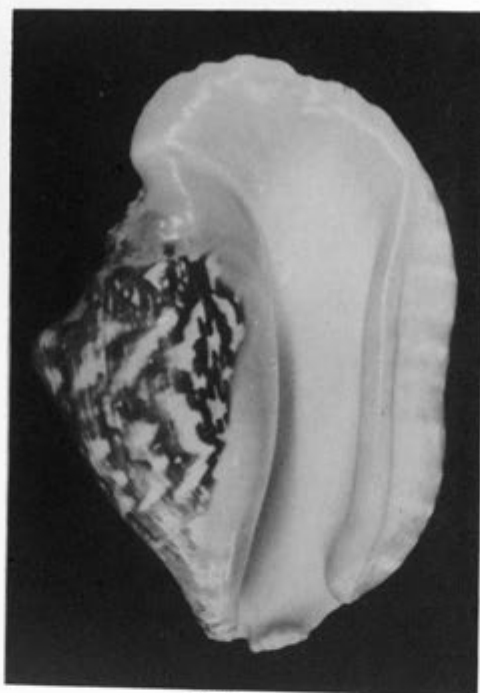
35 ×0.9



35' ×1



36 a ×0.6



36 b ×0.5



37 a

×0.4



37 b

×0.6



38

×0.6

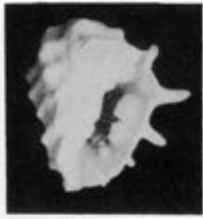


39

×0.3



40 ×0.8



41 ×0.8



42 ×0.8



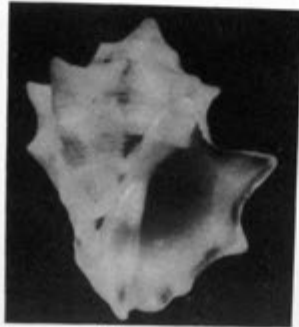
43 ×0.8



44 ×1



45 ×0.9



46 ×1



47 ×0.7



48 ×0.8



48' ×0.9



49 ×1



49' ×1





50 ×1



51 ×1



52 ×0.8



53 ×1



54' ×0.8



54 ×0.8



55 ×0.8



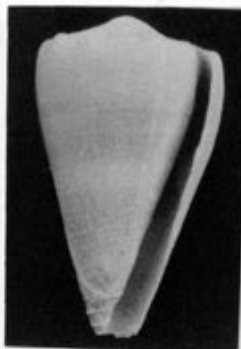
56  $\times 1.3$



57  $\times 0.6$



58  $\times 0.9$



59 a  $\times 0.9$



59 b  $\times 0.8$



60 a  $\times 1$



60 b  $\times 1$



60 c  $\times 1$



60 d



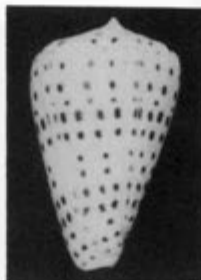
61  $\times 0.8$



62



63 a  $\times 0.8$



63 b



64  $\times 0.8$



65  $\times 0.7$



66  $\times 0.7$



66'  $\times 0.8$



67 a ×0.7



67 b ×0.7



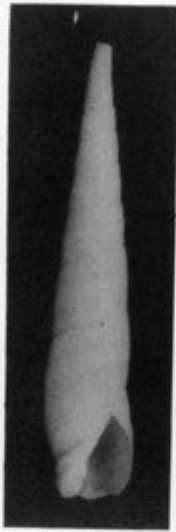
68 ×1



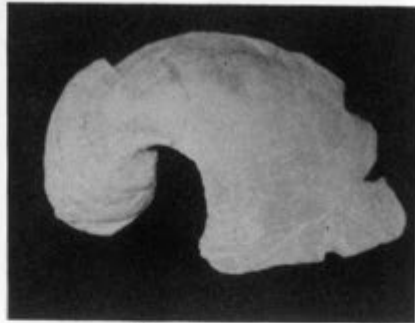
70 ×1.3



68' ×1



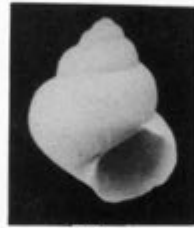
69 ×0.6



71 ×1



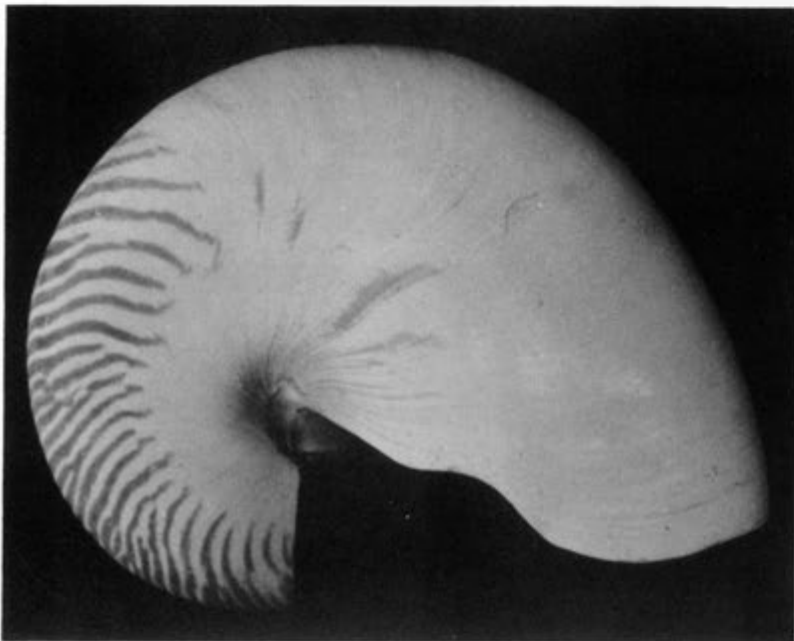
72 ×0.7



73 ×0.6



74 ×1.6



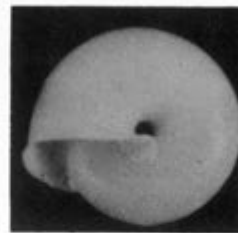
72' × 0.7



75 a ×0.6



75 b ×0.6



75 c ×0.6



76 ×1



77 ×0.6



78 ×0.9



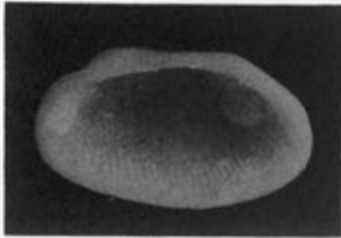
79 ×1



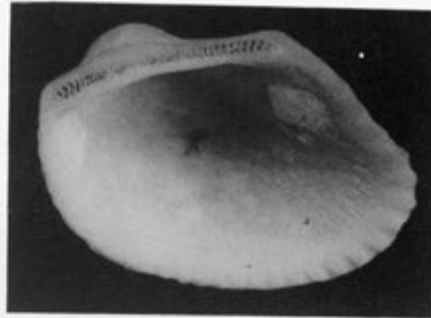
80 a ×0.7



81 a ×0.6



80 b ×0.7



81 b ×0.6



82 ×0.8



83 a ×0.9



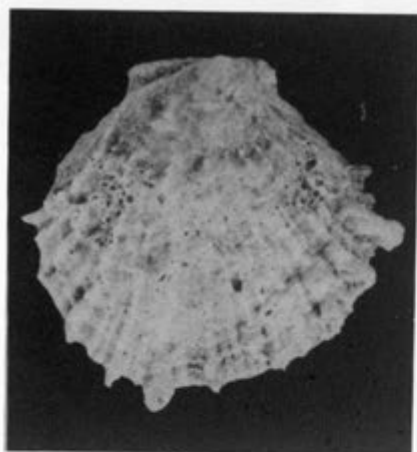
83 b ×0.9



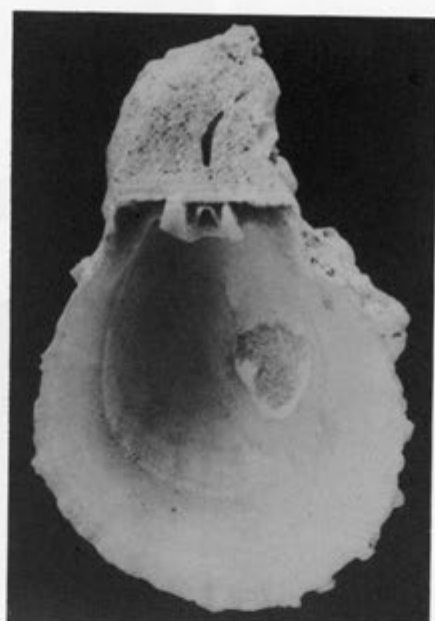
84 ×0.6



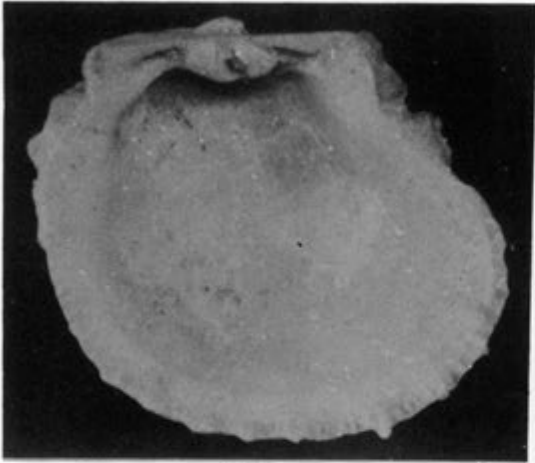
84' ×0.6



85 a ×0.7



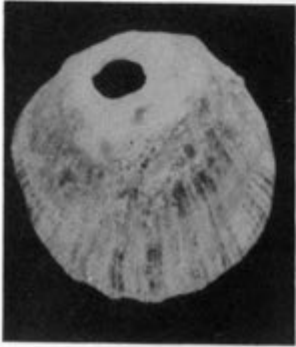
85 b ×0.7



85 c ×1



85 d ×1



85 e ×0.8



85 f ×0.8



86 a ×0.5



86 b ×0.5



87 a ×0.8



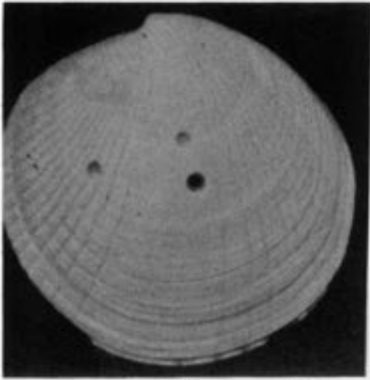
87 b ×0.8



88 a ×0.6



88 b ×0.6



89 a ×0.6



89 b ×0.6



90 a ×0.9



90 b ×0.9



91 a ×0.6



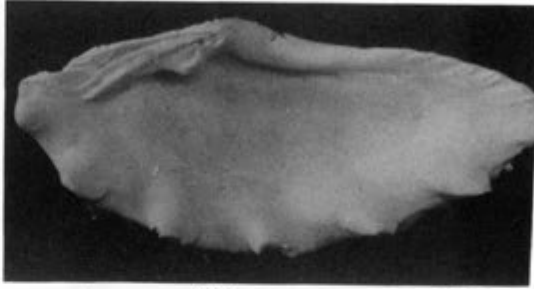
91 b ×0.6





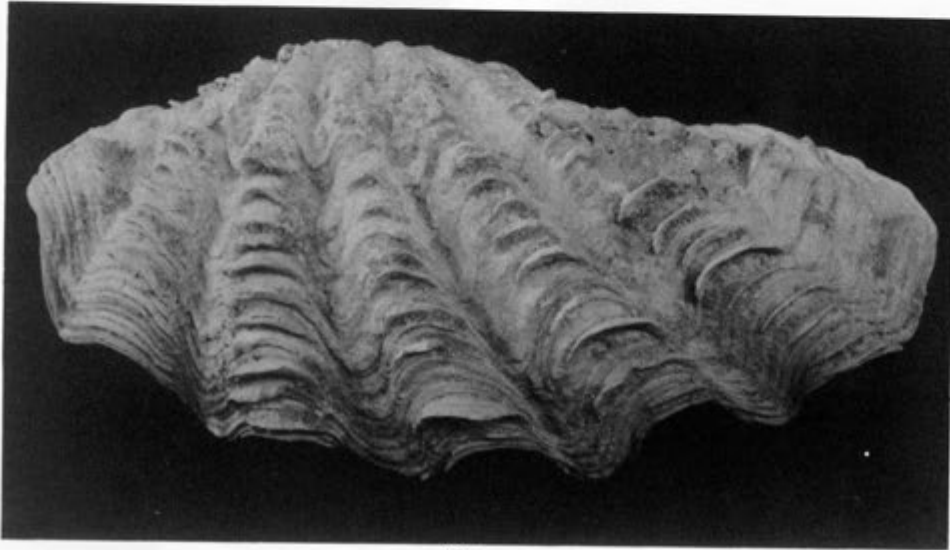
92 a

×0.3



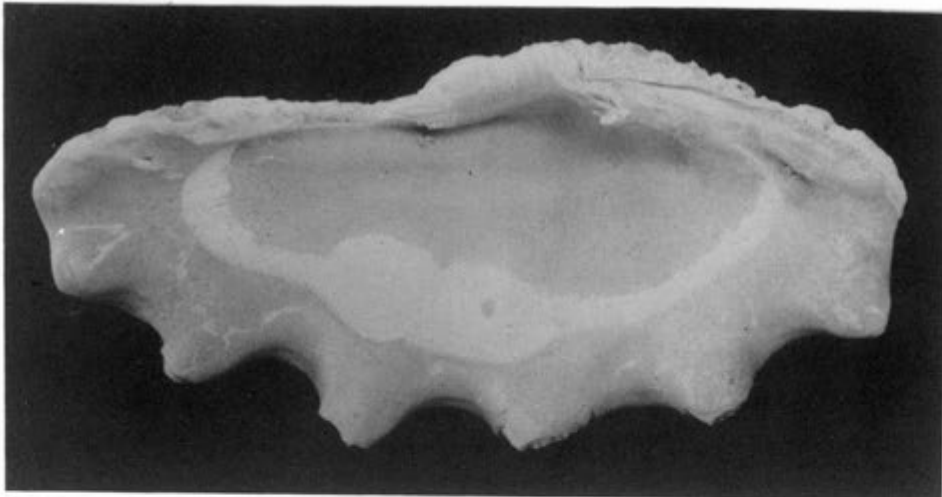
92 b

×0.3



92 c

×0.3



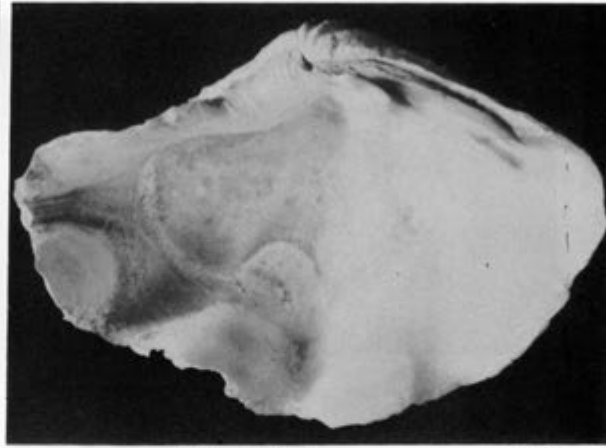
92 d

×0.3



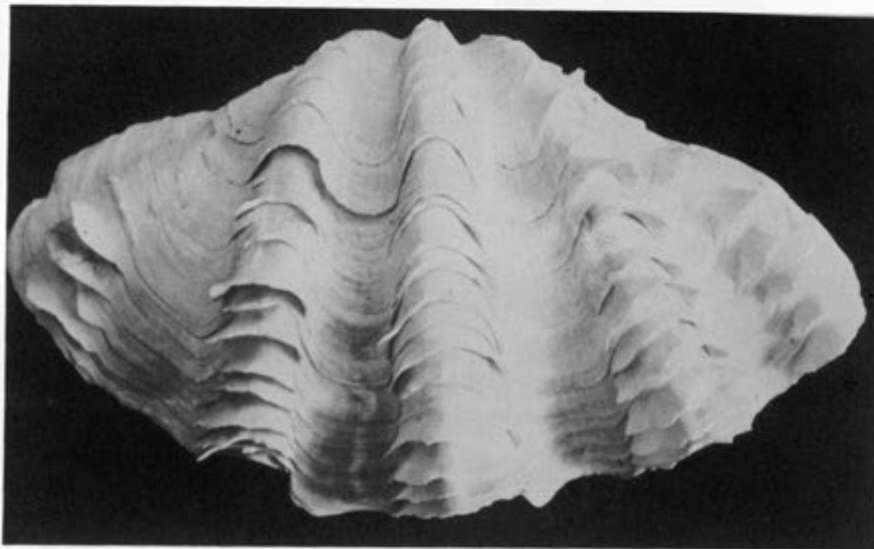
93 a (幼貝)

×0.3



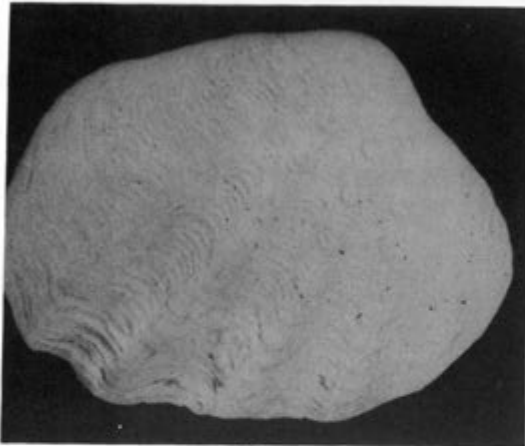
93 b (幼貝)

×0.3



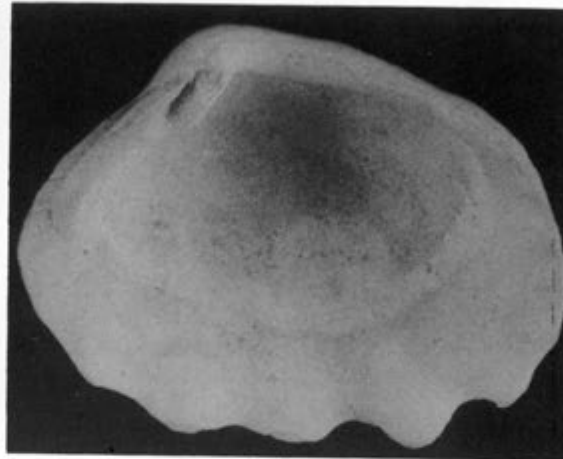
93 c

×0.3



94 a

×0.3



94 b

×0.3



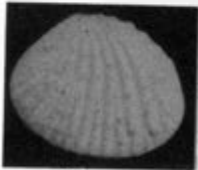
95  $\times 0.9$



96 a  $\times 0.7$



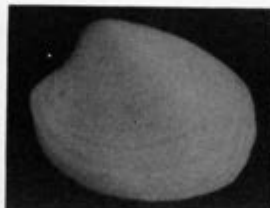
96 b  $\times 0.7$



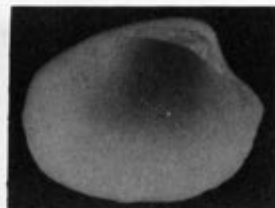
97  $\times 0.8$



98  $\times 0.9$



99 a  $\times 0.6$



99 b  $\times 0.6$



100 a  $\times 0.6$



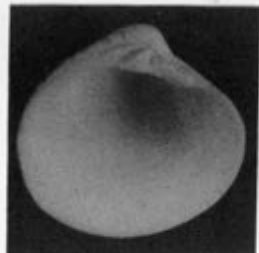
100 b  $\times 0.6$



101  $\times 0.8$



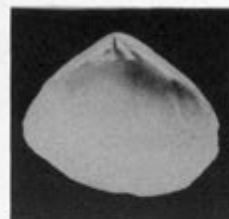
102 a  $\times 0.7$



102 b  $\times 0.7$



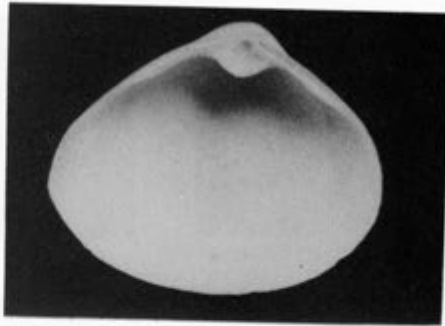
103 a  $\times 0.8$



103 b  $\times 0.8$



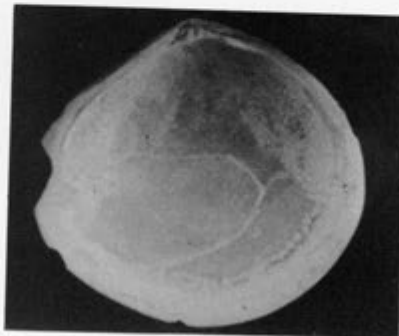
104 a      ×0.7



104 b      ×0.7



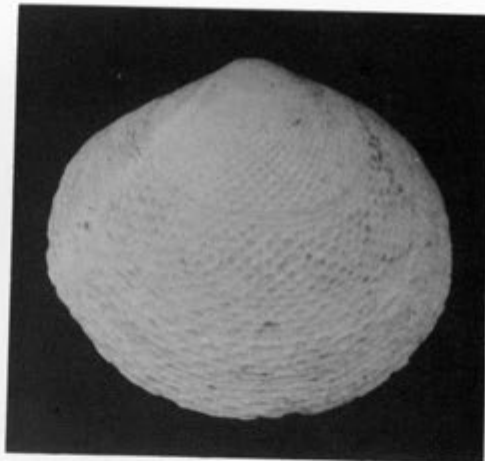
105 a      ×0.7



105 b      ×0.7



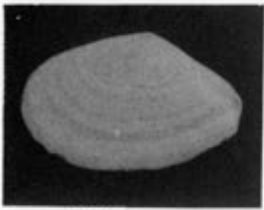
106 a      ×0.6



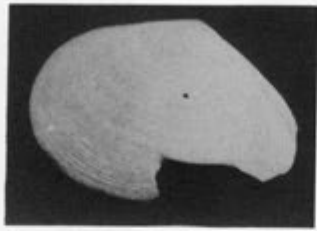
106 c      ×0.6



106 b      ×0.6



107 a ×0.7



107 b ×0.7



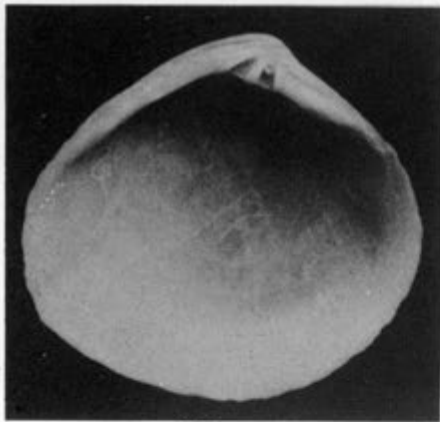
108 ×0.9



109 a ×0.7



109 b ×0.7



110 a ×0.6



110 b ×0.6

## 泉川遺跡出土の自然遺物

### —とくに出土動物骨について—

鹿児島大学 西中川 駿

泉川遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町万屋泉川にあり、新奄美空港建設のため昭和60年9月から11月にかけて、鹿児島県文化課の立神、長野両氏の指導のもとに発掘された奈良～平安時代相当の遺跡である。ここでは人工遺物と共伴した自然遺物、とくに出土動物骨について、その概要を報告する。

泉川遺跡から出土した自然遺物は、総重量235.1g（貝類を除く）で、そのうち哺乳類が195.2g、鳥類3.5g、爬虫類18.8g、魚類17.6gである。

出土した哺乳類の骨片は、イノシシ、ウシ、イヌ、ネコおよびジュゴンのものである。イノシシは、両骨端の欠如した左上腕骨1個で、保存長95.9mm、中央最小幅×径は13.7×18.2mmである。遠位の内側顆に刀傷がみられることから、食用にされていたことがうかがわれる（図Ⅰの1参照）。

ウシは左果骨、左中心第四足根骨、左第四趾中節骨および左第三趾末節骨の各1個で、同一個体のものであり、ほぼ完全な形で残っている（図版Ⅰの3～6参照）。しかし、表採のためにこれらが当時のものであるかは明らかでないが、中節骨の最大長を計測すると37.0mmで、これは現代和牛のものより小さいことから、改良以前のウシの骨であることは確かである。

イヌは第四前臼歯と第一後臼歯をそなえた右下顎骨で、保存長95.0mmで、第一後臼歯の長さ×幅は21.4×7.4mmで、ほぼ現生の柴イヌと同じ大きさである（図版Ⅰの2参照）。

ネコは左上腕骨、右橈骨、右尺骨、左大腿骨、左胫骨の各1個の同一個体のもので、骨端が欠如して小さいことから子ネコのものと思われる（図版Ⅰの7,8参照）。また、骨質が新しいことから、当時のものであるかは疑問がもたれる。

ジュゴンは、3ヵ所で折れた左助骨片（図版Ⅰの9,10参照）とこの他に頭骨の一部とみられる骨片2個が出土している。ジュゴンの出土は同じ笠利町のあやまる第2貝塚<sup>3)</sup>で、鹿児島県下では初めて発見されたが、今回の出土で2遺跡で確認されたことになる。

鳥類はハト大の胸骨と、若いニワトリのものと思われる左上腕骨各1個がみられる。上腕骨は骨質がもろく、また、骨端が欠如しているため確実な種の同定は出来ない（図版Ⅰの11参照）。

爬虫類はウミガメで、頭蓋片や腹板などがみられる（図版Ⅰの12,13参照）。

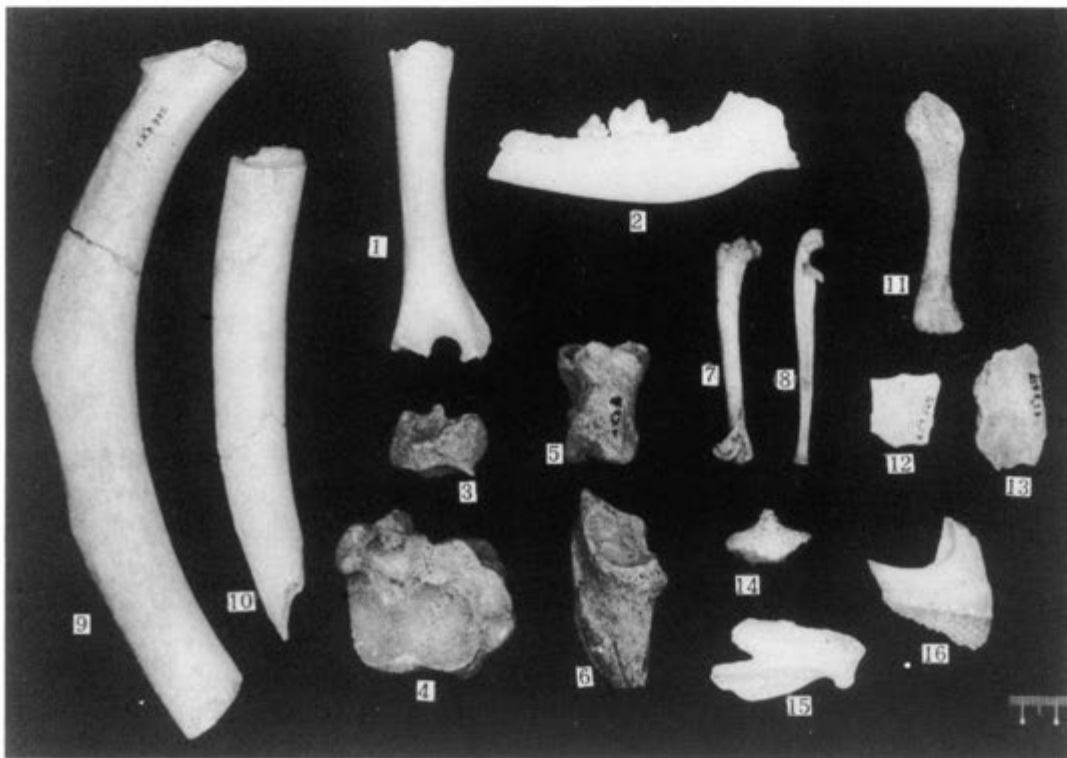
魚類はブダイの右前上顎骨やベラの咽頭骨、スズキの左、右歯骨などがみられ、同じ万屋のケジ遺跡および長浜金久遺跡<sup>2)</sup>に比べ魚骨が少ない。

以上、泉川遺跡出土の動物骨について述べたが、イノシシは小型で現生のリュウキュウイノシシと形態的に類似しており、奈良、平安時代においても狩猟獣の1つであったことが推察される。イヌは奄美の遺跡では犬田布貝塚から多く出土しているが、これらと同等の大きさであ

り、当時の人々により飼われていたことがうかがわれる。ジュゴンの出土は、前述したように非常に貴重な資料で、現在ジュゴンの北限は奄美大島までとされており、また、県本土の遺跡からジュゴンの出土のないことから、当時もジュゴンの北限は、奄美であったことが考えられる。また、ジュゴンも魚貝類と共に当時の人々の食料とされていたことが想像される。

### 参考文献

1. 伊仙町教育委員会：犬田布貝塚，P74～81，1984
2. 鹿児島県教育委員会：長浜金久遺跡，P223～229，1985
3. 笠利町教育委員会：あやまる第2貝塚，P62～65，1984



図版 I の説明

- |       |       |        |            |
|-------|-------|--------|------------|
| 1     | ：イノシシ | 11     | ：鳥類（ニワトリ?） |
| 2     | ：イヌ   | 12, 13 | ：カメ        |
| 3～6   | ：ウシ   | 14     | ：ベラ        |
| 7, 8  | ：ネコ   | 15     | ：スズキ       |
| 9, 10 | ：ジュゴン | 16     | ：ブダイ       |
- 1, 左上腕骨 2, 右下顎骨 3, 左果骨 4, 左中心第四足根骨 5, 左第四趾中節骨  
6, 左第三趾末節骨 7, 左上腕骨 8, 右尺骨 9, 10, 左肋骨 11, 左上腕骨  
12, 13, 腹板 14, 下咽頭骨 15, 右歯骨 16, 右前上顎骨

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(39)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書

# 泉 川 遺 跡

発行日 昭和61年3月31日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号